



佐倉藩

江戸屋敷ものがたり

試作第1版 平成10年9月1日

山岸 弘明調べ

佐倉藩江戸屋敷ものがたり

試作第1版 平成10年9月1日

山岸 弘明調べ

佐倉城の中世期には千葉宗家が作った半築の鹿島城があった。千葉氏は鎌倉幕府の有力御家人として代々下総国を支配したが、戦国時代のはじめに起こった関東動乱のとき、千葉康胤が千葉宗家の亥鼻城を攻め滅ばし、本拠を本佐倉城に移した。親胤、邦胤のときのちの佐倉城にあたる鹿島台の地に築城を開始したが、家臣の謀叛で殺害され、最後の城主重胤も小田原に人質とされたので千葉氏は名目だけの存在となった。鹿島城工事は北条氏の命を受けた重臣の原氏が継続、千葉一族の鹿島幹胤が居住した。天正18年、豊臣秀吉の小田原攻めで千葉、原の両氏が滅亡。徳川家康の関東入府にともない、佐倉にも4人の大名が配備される。本佐倉(のち本佐倉)の家康5男、武田信吉伝人として封じられたともされるが定かでない。

三浦義次(天正18年~文禄元年=本佐倉1万石)

江戸屋敷なし。慶長年中に西の丸下=千代田区皇居外苑①、2重橋前交差点周辺

武田信吉(文禄元年~慶長7年、大堀4万石)

江戸屋敷なし

松平忠輝(慶長7年~12年、大堀5万石)

慶長年中 ~元和2年 上屋敷 大手御門前=千代田区丸の内1-①、NKK本社ビル、UKビル

小笠原吉次(慶長12年~15年、大堀2万8千石)

江戸屋敷なし

酒井家次(天正18年~慶長9年=臼井3万石)

慶長年中 ~寛永ころ 上屋敷 和田倉御門内=千代田区皇居外苑②、坂下門前交差点周辺

久野宗能、宗久(天正18年~慶長元年=鹿島?1万3千石)

江戸屋敷なし

北条氏勝、氏重(天正18年~慶長19年=岩富1万石)

慶長年中 ~寛永8-8 上屋敷 西の丸下=千代田区皇居外苑①、2重橋前交差点周辺

慶長15-2~寛永10-4 土井大炊頭利勝 (3万2千石、寛永2年9月~14万2千石=慶長15年8月~老中) 小見川から佐倉へ。佐倉から古河へ。のちに大老。正保元年7月没、菩提所=古河市正定寺

近世佐倉城の創設は慶長15年、土井利勝が同じ下総国の小見川1万石から本佐倉に転封されたことに始まる。利勝は土井利昌の子とされるが家康の落胤との説が有力である。家康、秀忠、家光3代につかえ40年間にもわたって老中、大老をつとめた。明敏、知略にすぐれ、初期の幕政確立に貢献した。

築城工事は慶長16年にはじまり、大坂冬、夏の陣をはさんで元和3年(2年ともいう)に竣工した。鹿島台天然の地形を利用、石垣のない土の城だが、中世様式の臭いを色濃く残した本格的な城郭で、本丸には天守閣、銅櫓、角櫓があり、本丸御殿のお成御殿金の間を家康、秀忠が東金鷹狩の宿舎とした。銅櫓は江戸城山里郭の3重櫓の移築とも。家康は「天下の名城たらん」とその要害堅固さをたたえたという。

江戸上屋敷は江戸城大手門前、神田橋の現在大手町1丁目大手町合同庁舎2と三井生命ビル一部。佐倉入りに先立つ慶長8年に拝領し、古河移封後、明暦大火まで利隆との2代が住んだ。神田門には土井家の水車の紋をつけた幕をはりめぐらせたので大炊橋門ともよばれた。下屋敷は駒込の原屋敷で小石川高校、駒込署などの一画8万7千坪、蔵屋敷は蠣殻町で水天宮近くにあった。

慶長8年 ~明暦3-3 上屋敷①大炊橋(神田橋)御門内=千代田区大手町1-②、③、大手町合同庁舎2、三井生命ビルの一部

" 8年 ~" 3-3 添屋敷 大炊橋御門土手際=千代田区大手町1-③、大手町合同庁舎2の一部

" 18-3~明治維新 下屋敷 原=文京区本駒込1-④、⑨~⑯、⑳~㉔、2-①~⑯、6-①~⑫、⑯の一部、小石川高校、日本原子力研究所、駒込署、住宅地、六義園の一部

" 18-3~享和3年 添屋敷 大塚=文京区白山5の一部、東洋大学周辺

寛永はじめ~延享4-6 蔵屋敷 蠣殻=中央区日本橋人形町1-⑤~⑯、蠣殻町1-㉔~㉔、38の一部、区立蠣殻町区民館、日本橋特別出張所、日本橋社会教育会館、日本橋公会堂

寛永10-6~寛永11閏7 石川主殿頭忠総 (7万石) 日田から、膳所へ。慶安3年12月没、菩提寺=京都市上京区本禅寺

土井利勝移封後の佐倉はめまぐるしく城主の交代がつづいた。石川家は家成が関が原の合戦で戦功をあげ、大垣3万石となった。康道のあと嗣子がなく忠総は大久保忠隣(2男)から養子。日田6万石をへて寛永10年佐倉に入封したがわずか1年で膳所7万石へ転封した。江戸屋敷ははじめ幕閣と譜代重臣邸の連なる皇居外苑中央部で、のちに上野広小路前に移って明治維新におよんだ。

慶長ころ ~寛永ころ 上屋敷②西の丸下=千代田区皇居外苑①、内堀通り中央部

寛永年中 下屋敷 西の丸下=千代田区皇居外苑①、内堀通り中央部上屋敷道路南

寛永12-2~寛永15-1 松平形原紀伊守家信 (4万石) 高槻から。寛永15年1月没、菩提所=亀岡市光忠寺

" 15-5~" 17-9 松平形原若狭守康信 (3万6千石) 高槻へ。天和2年6月没、菩提所=亀岡市光忠寺

松平形原家は松平3祖5男からはじまる。家康の江戸入りにしたがって五井5千石を得、元和年間に大名に列した。寛永12年、高槻2万石から4万石に栄進して佐倉入封。江戸屋敷は皇居外苑楠公像近くにあった。寛永13-8~天和元-10 上屋敷③西の丸下=千代田区皇居外苑①、楠公像周辺

寛永19-7~慶安4-4 堀田出羽守、加賀守正盛 (11万石=老中) 松本から。慶安4-4没、菩提所=台東区寛永寺内現龍院、品川区東海寺

慶安4-8~万治3-11 堀田上野介正信 (10万石) 改易。万治3年11月没、菩提所=台東区金蔵寺
寛永後期、老中堀田正盛が11万石で佐倉城主となった。正盛は稲葉正成先妻の子で春日局の縁で幼少期の3代将軍家光に近侍し、成人ののち、6人衆(老中)の1人として幕政に参画した。幕政にもみるべきものがあった。家臣団を拡充、江戸の外郭として軍事力の増強につとめた。慶安4年、家光逝去に殉死、家督は長男の正信に相続されたが、万治3年、幕政批判の意見書を提出して無断帰国したので狂人として改易、弟脇坂安政にお預けとなった。城受取上使は朽木民部少輔、佐倉城はいったん幕府の公料となった。堀田家はのち、その子正休のとき1万石で再興。子孫は宮川1万3千石で明治維新を迎えた。江戸上屋敷は皇居外苑坂下門前、下屋敷は浅草。正盛が将軍家光から家族的な付合いを受けたことから下屋敷へのお成りがひんぱんに繰かえされた。堀田家の時代、圧政に苦しんだ農民を救おうと佐倉宗五郎が江戸藩邸に直訴して死罪となった。有名な義民伝だが、その史実は確実ではない。

寛永年中~明暦3-3 上屋敷④和田倉御門内=千代田区皇居外苑②、坂下門前交差点周辺

明暦3-3~万治3-2 " ④ " =千代田区皇居外苑②、明暦大火後の割り替えて若干移動
御老中御役屋敷

寛永13年~明治維新 下屋敷 台東区寿1-①~⑨、⑮、⑯と⑩一部、3全町、4-④~⑦、駒形1-①、②と⑤一部。寿町全町、駒形、雷門におよんだとも。寿保育園、寿児童館、済美公園、ローソン寿4丁目店、ペンギンライター、ホワイトレジデンス、会社、商店、住居など

寛文元閏8~延宝6-1 松平大給和泉守乗久 (6万石) 館林から、唐津へ。貞享3-7没、菩提所=港区天徳寺

堀田正信改易後の佐倉は天領をへて松平大給家となった。大給家は松平3祖からはじまる。乗久は館林藩主老中乗寿の長男に生まれ、相続にあたり弟に5千石を分与した。寛文元年6万石で入封、江戸屋敷は神田橋御門内旧土井大炊頭邸の一部であった。20年後に跡地を拝領した酒井小浜藩絵図では表門が5間1戸、入って前庭があり、表御殿に通ずる。およそ30室、右に大書院、小書院、奥まったあたりが藩主が生活したお座の間、居間で池泉がある。左手の台所門をくぐると奥御殿、屋敷周囲を長屋が囲んだ。

明暦3-3~元禄6-10 上屋敷⑤神田橋御門内=千代田区大手町1-②、③、大手町合同庁舎2

延宝6-1~貞享3-1 大久保出羽守、加賀守忠朝 (9万3千石=老中) 唐津から、小田原へ。正徳2-9没、菩提所=世田谷区教学院

佐倉城は堀田正盛没後27年ぶりに老中を迎える。大久保忠朝は徳川幕府創設の功臣忠隣3男の2男で宗家忠職の養嗣子となり、4代将軍家綱に近侍して延宝5年老中にすすんだ。翌6年唐津から佐倉城に入城、9万3千石を領有した。家綱廟塔造営、家綱33回忌などを奉行し、貞享3年、さらに1万石を加増されて忠隣3の旧領、念願の地小田原に戻った。江戸役屋敷は西の丸下2重橋前交差点近く、下屋敷は芝の海岸地で、潮入りの池泉を中心とした回遊式築山泉水庭・楽寿園を造営した。のちにご3卿、ご3家邸、皇太后離宮をへて都立芝離宮庭園として今日に保存されている。

延宝5-8~正徳4-9 上屋敷⑥西の丸下=千代田区皇居外苑①、2重橋前交差点周辺

御老中御役屋敷

" 6-2~文政元-8 下屋敷 芝増上寺海手=港区浜松町2-④、旧芝離宮庭園

貞享3-1~元禄12-9 戸田伊賀守、越前守、山城守忠昌 (6万石1千石、元禄7年~7万1千石=老中) 岩槻から。元禄12-9没、菩提所=新宿区松源寺

元禄12閏9~" 14-6 戸田日向守、能登守、山城守忠真 (6万7千石=寺社奉行) 高田へ。享保14-10没、菩提所=宇都宮市英蔵寺

つづく戸田忠昌も老中。大老堀田正俊のもと、将軍綱吉の専制体制確立に尽力し、1万石から6万石に栄進した。元禄の繁栄の一方で、相次いで生類哀れみの令が出された。老中在職中の元禄12年逝去。嫡子忠真は世子時代に1万石を得て若年寄にすすみ、元禄14年高田に移封となった。江戸役屋敷は一ツ橋御門内で佐倉とも関わり深い堀田正俊老中上がり屋敷、下屋敷は浜町、深川に置かれた。

天和2-4~元禄13-12 上屋敷⑦一ツ橋御門内=千代田区大手町1-③、④、丸紅ビル、竹橋ビル

御老中御役屋敷

元禄13-12~正徳4-9 " ⑧日比谷御門内=千代田区有楽町1-⑤、⑧パークビル、大正生命、丸の内署

貞享4-5~元禄10-5 世子邸 虎御門内=千代田区霞が関1-③、郵政省
 元禄8-5~" 8-7 " 牛込御門内=千代田区富士見2-⑦、⑧と⑥一部。飯田橋駅裏、飯田橋
 専門学校
 " 10-5~" 13-12 " 鍛冶橋御門内=千代田区丸の内2-⑦、三菱銀行本店
 貞享元-8~" 6-8 下屋敷 浜町=中央区日本橋蛸殻町2-⑩、有馬小学校、幼稚園、蛸殻町公園
 元禄6-8~延享3-11 " 深川高橋際=墨田区森川3-⑫、⑬ほか、高森公園、森下文化センター

元禄14-6~宝永4-8 稲葉丹後守正往、正通 (10万2千石=老中) 高田から。享保元-10没、菩提所
 =文京区養源寺

宝永4-8~享保8-5 稲葉美濃守、長門守、丹後守正知 (10万2千石) 淀へ。享保14-5没、菩提所
 =文京区養源寺

戸田忠真と入替に高田から老中の稲葉正往が10万2千石で入封した。浅野長矩の刃傷事件があった元禄14
 年老中に就任。赤穂浪士の討入り時は月番老中として初期対応にあたった。大老柳沢吉保とともに綱吉末期
 政權をささえたが、宝永4年、病いのため退任。次の正知のとき淀に国替えとなった。江戸役屋敷は坂下門
 前かつての堀田正盛跡で、中屋敷は築地と外桜田、下屋敷は渋谷の青山学院前に構えた。

元禄13-12~宝永6-3 上屋敷⑨和田倉御門内=千代田区皇居外苑②、坂下門前交差点周辺

御老中御役屋敷 上屋敷⑩小川町=中央区神田小川町1-⑧、⑩、2-②、④、⑥~⑭、スポーツ
 用品、書店、印刷店など

寛文元-7~延享3-11 中屋敷 木挽町築地=中央区築地5-②の一部、中央卸売市場の一部

" 9-5~享保6-1 " 外桜田=千代田区霞が関1-①、東京検察合同庁舎

寛永、明暦~明治維新 下屋敷 渋谷=渋谷区神宮前5-⑤~33、渋谷1-⑦~⑨青山病院、国際連合大
 学本部、区立渋谷小学校、児童会館など

享保8-5~延享2-10 松平大給和泉守、左近将監乗邑 (7万石=老中) 淀から。延享3-4没、菩提
 所=港区天徳寺

延享2-10~" 3-1 松平大給伊賀守乗佑 (6万石) 山形へ。のちに寺社奉行、大坂城代。明和6-
 9没、菩提所=岡崎市松明院

佐倉には続々と有力幕閣が配備される。享保8年からの松平乗邑は8代將軍吉宗、享保の改革下の首席老中。
 今なら総理大臣といったところだろうか。元禄以来膨大となった消費支出にはどめをかけ、農民の年貢を厳
 しくした。その専横は幕府の全権力を一身に集めたが、吉宗が引退して新將軍に家重が就任すると罷免。多
 病で廢人同様だった家重の將軍職就任に反対した乗邑にとって世代交代時の進退の誤りを思知らされる。西
 の丸下老中役屋敷は即日退去を命ぜられた。仕事一途の乗邑には与えられた屋敷しかなく、即刻退去の命令
 に裸同然、親戚に転がりこんで雨露をしのいだとも。蟄居中の翌3年不遇のうちに逝去。松平家は山形転封
 となった。

享保8-4~延享2-11 上屋敷⑩西の丸下=千代田区皇居外苑①、2重橋前交差点周辺

御老中御役屋敷

元文2-9~" 2-11 添屋敷 南隣西尾隠岐守添屋敷永預かり

延享2-11~宝暦5-2 上屋敷⑫南八丁堀=中央区湊1-③~⑥、2-①~⑨、3-①~③、⑧、入船1
 -④、⑤、⑧、⑨、2-⑥~⑪、3-⑦、⑧あたり、鉄砲洲小学校、鉄
 砲洲稲荷、鉄砲洲公園の一部

享保11-12~明治維新 中屋敷 白金=港区白金台4-④~⑫、白金ハイツなど高級マンション、住宅

延宝以前 ~" 下屋敷 南八丁堀=前出。上屋敷と同じ(上記期間を上屋敷と唱替え)

延享3-1~宝暦11-2 堀田相模守正亮 (10万石、宝暦10年~11万石=老中) 山形から。宝暦11-2没、
 位牌所=佐倉市甚大寺

宝暦11-3~文化2-7 堀田相模守正順 (11万石=天明3年~寺社奉行、天明7年~大坂城代、寛政4
 年~京都所司代) 文化2-7没、位牌所=佐倉市甚大寺

文化2-8~" 8-4 堀田相模守正時 (11万石) 文化8-4没、位牌所=佐倉市甚大寺

" 8-4~文政8-1 " 相模守正愛 (11万石) 文政8-1没、位牌所=佐倉市甚大寺

文政8-3~安政6-9 " 相模守、備中守正篤、正睦 (11万石=天保5年~寺社奉行、天保8年~大
 坂城代、天保8年~西の丸老中、天保12年~老中、天保14年退任、安政2年~老
 中上座、勝手掛、外国事務総裁) 元治元-3没、菩提所=佐倉市甚大寺

安政6-9~明治4-7 堀田鴻之丞、相模守正倫 (11万石) 廢藩置縣まで。明治43-1没、菩提所=佐
 倉市甚大寺

延享3年からは松平乗邑後の首席老中、堀田正亮11万石居城となった。堀田家は將軍家綱時代廢絶となった
 佐倉藩主堀田正信と同族。正盛の3男正俊にはじまり、佐倉では通称後の堀田家という。正俊は春日局の養
 子として大奥で育てられたともいう。4代將軍家綱継嗣騒動のとき5代將軍綱吉を擁立して大老にすむ。
 綱吉初期の幕政を補佐し、天和の治とたたえられた善政をしいたが、私怨のため江戸城内で刺殺された。こ
 の事件以後、数代にわたる辛苦の時代を経験するが、正亮に至ってようやく中央幕閣への復帰がかなう。寛
 延2年老中首座にすすんで、側用人の大岡忠光と病弱の9代將軍家重政權をささえた。

堀田家の時代は6代、江戸後期122年にもおよんだ。正順のころから藩財政は次第に欠乏し、天明大飢饉のときその極に達した。領内各地で一揆が続発して、佐倉城下近くまで迫った。堀田藩に限らず江戸後期の諸藩は米作中心経済の破綻から多額の借金をかかえて藩政の改革に迫られていた。

この家から開国の父と慕われた正睦がでた。13代将軍家定期安政2年、阿部正弘らの推挙を得て2度めの老中に就任して首席となった。安政3年、日米和親条約締結で開港した下田にアメリカのハリスが到着、星条旗を掲げた一行が江戸城に到着して通商条約の締結を求めた。正睦は開国のため京都に参内して勅許を要請したが尊攘派の反対で実現しない。将軍家定の継嗣騒動では一ツ橋慶喜の擁立をはかるが、大老に就任した井伊直弼が強権を発動して家茂を後継将軍に据え、正睦は罷免された。安政の大獄後、直弼が桜田門外に倒れたのはその翌万延元年のことであった。正睦はまた、藩政面でも大きな足跡を残した。農政と文武奨励を骨子とした天保の改革に取組み、藩校成徳書院を開校したり、蘭学を取り入れ、日本最初の私立病院順天堂を開設したりもした。最後の藩主は正倫。明治維新のとき苦節をへて恭順。明治2年、版籍を奉還した。正倫は佐倉藩知事に任じられ、4年に廃藩置県となった。

堀田藩の江戸上屋敷は西の丸下、虎御門内、数寄屋橋御門内、辰の口、小川町など12か所を占拠。最後が麻布日ヶ窪。中屋敷も変遷が激しかったが、南八丁堀、金杉で廃藩となった。下屋敷は初代正俊が寛文8年に拝領した渋谷下豊沢が、明治4年47,506坪で開拓使第3官園に引継がれた。

廃藩置県後の堀田家東京本邸は深川佐賀町におかれ、明治29年、佐倉厚生園に引上げたが、終戦まで別邸を東京に残した。現在の当主は正久氏。佐倉市長4期を勤め、佐倉市内の堀田家菩提寺、甚大寺の一画に居住されている。

堀田正俊（古河13万石＝老中、大老）

明暦3ころ～万治元-5	上屋敷	西の丸下＝千代田区皇居外苑①、2重橋前交差点周辺。明暦3年因加賀爪甲斐守邸跡地。大火後拝領か
万治元-5～延宝8-8	"	西の丸下＝千代田区皇居外苑①、2重橋前交差点周辺。内田出羽守邸拝領
寛文10-12～"	9-1	"
延宝8-8～"	9-1	"
"	9-1	西の丸下＝千代田区皇居外苑②、中央皇居側。本多美濃守邸拝領
"	9-1	一ツ橋御門内＝千代田区大手町1-③、丸紅ビル、竹橋総合ビル。松平伊豆守邸拝領
"	9-1	御老中御役屋敷
"	9-1	御老中御役屋敷
"	9-1	大手御門前＝千代田区大手町1-③、三井物産ビル、三井生命ビル、日本長期信用金庫、サンワ東京ビル。酒井雅楽頭邸拝領
"	9-1	御老中御役屋敷

堀田正仲（古河、山形、福島10万石）

天和2-1～貞享2-3	世子邸	神田橋内＝千代田区大手町1-⑨、日本経済新聞社、経団連ビル。稲葉丹波守邸拝領
貞享元-10～"	4-1	上屋敷
"	4-1	駿河台＝千代田区神田淡路町1、神田小川町1-②、④、⑥、神田駿河台3-②。淡路町交差点前、総評会館。内藤伊豆守邸拝領か
"	4-1	三河町＝千代田区内神田1-⑨、⑩、⑪、⑫、2-⑩～⑫、⑬。互助会ビル、ロイヤルプラザ、ヨシザワビル。松平対馬守邸拝領

堀田正虎（福島、山形10万石）

元禄10-6～享保元-8	上屋敷	南本所新大橋際＝江東区新大橋2-①～⑦、3-①～⑦、八名川小、八名川公園。前住者不詳
享保元-8～"	2-2	"
"	2-2	田安御門内＝千代田区北の丸公園②、清水門近く。御用屋敷跡拝領
"	2-2	大手前＝千代田区大手町1-①、大手センタービル一部。久世大和守邸拝領

堀田正春（山形10万石）

"	正亮（山形10万石、佐倉11万石＝老中）	
寛保2-6～延享2-11	上屋敷	数寄屋橋御門内＝千代田区有楽町1-⑪、2-⑨、⑩、交通会館、読売会館、有楽町駅の一部。井伊伊賀守邸拝領
延享2-11～宝暦12-1	"	⑬西の丸下＝千代田区皇居外苑①、2重橋前交差点周辺。松平左近将監邸拝領
"	"	御老中御役屋敷

堀田正順（佐倉11万石）

宝暦12-1～宝暦12-12	上屋敷	⑭大名小路＝千代田区丸の内1-⑦、⑨、⑩、東京中央郵便局、東京駅丸の内南口周辺、駅前ロータリー一部、井上河内守邸拝領
"	12-12～明和9-3	"
明和7-6～"	9-3	添屋敷
"	9-3	⑮虎御門内＝千代田区霞が関3-①、大蔵省一部。松平周防守邸拝領
"	9-3～天明元-9	上屋敷
天明元-9～文政元-8	"	⑯山下御門内＝千代田区内幸町1-①、帝国ホテル。井上伊予守邸拝領
"	"	⑰数寄屋橋御門内＝前出。千代田区有楽町1-⑪、2-⑨、⑩、有楽町駅の一部、交通会館、読売会館。井伊兵部少輔邸拝領

堀田正時（佐倉11万石）

"	正愛（"）	
文政元-8～文政4-3	上屋敷	⑱芝増上寺海手＝港区浜松町2-④、芝離宮庭園。大久保加賀守邸拝領

" 4-3~天保8-7 "	"	⑬芝金杉=港区浜松町2-③、④、貿易センタービル、JR浜松町駅。清水宮内卿邸拝領
堀田正篤、正睦 (佐倉11万石=老中)		
天保8-7~" 14閏9	上屋敷	⑭龍の口南角=千代田区丸の内1-③、⑤、東京海上ビル、新丸ビル。大久保加賀守邸拝領 御老中御役屋敷
" 14閏9~安政2-9 "	"	⑮小川町=千代田区神田神保町1-②④~40の偶数、44、48と⑭~②②の偶数の一部。神田北神保町郵便局、誠和ビル、清和ビル、大平紙商事、東京デザイナー学院6号館。阿部伊勢守邸拝領
安政2-9~" 5-9 "	"	⑯西の丸下=千代田区皇居外苑②、中央皇居側。松平伊賀守、松平玄蕃頭邸拝領 御老中御役屋敷
安政5-9~元治2-3 "	"	⑰浜町=中央区日本橋浜町3-①、②、⑦~⑩、⑬、⑭、日本橋中州⑬、⑰、高速6号向島線清洲橋ランプの一部、化学工業日報社、中央断裁所。安藤対馬守邸拝領 長谷部オキビル、中銀英子マゼン
堀田正倫 (佐倉11万石、伯爵)		
元治2-3~明治5ころ	上屋敷	⑱麻布日ヶ窪=港区六本木6-⑨、⑩、⑫~⑭と④、⑪の一部、テレビ朝日、公団北日ヶ窪住宅、アルゼンチン大使館、スエーデンセンタービル、REVLQNビル。毛利右京亮邸拝領
明治5-6~" 29-5	本邸	⑲深川=江東区佐賀町1-⑨、⑩、⑬、高速9号深川線沿い、東京コカコーラボトリング佐賀町営業所、製麦会館。松平備中守邸拝領。 明治23-7 佐倉別邸落成、同年暮佐倉別邸に移る。引続き別邸とする
寛文4-12~享保17-5	中屋敷	浅草寿町=台東区寿3-①~⑥と⑪~⑭の一部、永代信用組合浅草支店、大木ビル、寿町後藤ビル、荻原ビル、NTTデータ通信、鶴岡商店
享保17-5~明和8-11	"	本所2ツ目=墨田区千歳3-⑥~⑭、ライオンズマンション両国6、泰地マンション、ヴェルデ森下、戸田出羽守邸拝領。江戸図は文政後期まで継続
明和8-11~寛政8-4	"	巢鴨=豊島区巢鴨1丁目④、⑥、⑦と⑩の一部周辺、JR巢鴨駅前、ブリックレーン、中央理科工業、東邦ビルとアーバンハイツ巢鴨敷地の一部。酒井左衛門邸拝領
寛政8-4~文政元-8	"	深川新田=江東区白河⑤~⑧と①~④、⑨、⑭~⑰の一部、2-⑰の一部。柳沢ビル、深川鉄工所。京極加賀守邸拝領
延享3-10~文政12-6	中屋敷	鉄砲洲=中央区築地5-②の一部、都中央卸売市場築地市場の一部。森川出羽守邸の一部拝領
安政元-1~安政元-12	"	" =前出、再度居住。紀伊邸拝領
文政12-6~" 3-1	"	南八丁堀=中央区銀座2-⑪の一部、⑫~⑯、昭和通り一部、区立中央会館、富士火災ビル。紀伊邸拝領
安政3-1~" 3-4	"	深川小名木川=江東区北砂2-⑮の一部、小名木川貨物駅の一部。牧野備後守邸拝領
" 3-4~明治2-6	"	南八丁堀=前出、再度居住、紀伊邸拝領
明治2-6~" 3-5	"	金杉=港区芝浦1-①、②、③の一部、芝1-⑦、⑧、JR線、モノレール線の一部、区立新浜公園、シーパンスN、アモール第1勸業銀行、トワツェンナビル、区立心身障害者福祉センター。伊達遠江守邸拝領。一部はしばらくその後も使用
寛文8-3~" 4-11	下屋敷	渋谷下豊沢村=渋谷区広尾4-①、③、日本赤十字社、聖心女子大学、広尾ガーデンヒルズ
文化3-2~" 4-11	"	羽根沢村=同上。下屋敷囲込み
江戸前期 ~" 4-11	抱屋敷	渋谷下豊沢村=同上。下屋敷囲込み
不詳 ~寛延2-2	下屋敷	南本所=江東区横網2-④と②、③、⑤、⑥、⑨、⑩の一部。蔵前橋通り蔵前橋東詰、東京鋳業、協和、AXSビル
寛延2-2~寛政10-8	"	浜町=中央区日本橋浜町2-60~62と59の一部。品川不動産ビル(仮称)、東京中コクコと浜町運動場の一部。間部越前守邸の一部拝領
寛政10-8~文化3-2	"	青山=渋谷区渋谷1-⑮~⑰と②、⑧の一部、神宮前5-34~53、区立渋谷小学校、都立児童会館、区立美竹会館、阪急スポーツスクール、青山病院、国立総合児童センター、国際連合大学本部、RTCプラザ。青山大膳亮邸の一部拝領
文政ころ	不詳	広小路十番=調査中。麻布十番か

享和2-11~文化2-8 抱屋敷 砂村新田=江東区南砂2-③、④、⑧~⑭、⑱、⑳~㉓、35~37、2-②~⑥、⑧、⑨、住宅供給公社南砂住宅、都営南砂3丁目アパート、南砂グリーンハイツ、南砂中学校、第4小学校、倉庫街。毛利大膳太夫抱屋敷買取り

文化2ころ~" 9-5 " 下谷龍仙村水谷屋敷(東叡山領、年貢地)
" ~" 9-5 " " 間中元龍屋敷(東叡山領、年貢地)
" ~" 9-12 町並屋敷 下谷金杉町町田多膳抱屋敷、正覚寺(東叡山領、町奉行支配)
" ~" 9-12 抱屋敷 下谷坂本村町田多膳抱屋敷(東叡山領、年貢地)

以上4邸=台東区龍泉1-①~⑱、㉔~㉙、下谷2-⑮、㉑~㉔、3-②~④、①一部、②一部、入谷1-㉓~33、2-㉕~㉗、32~37、千束2-33~36。工場、マンション、住宅街、正覚寺、学校の一部
安政2ころ~安政5ころ 預地 一ツ橋門3番町明地=千代田区神田錦町3-③、⑤~⑨、⑪、⑰、興和一橋ビル、麴町神田税務署、東京電気大学5号館。講武場
嘉永ころ ~万延2年 借地 愛宕下薬師小路中屋敷=港区西新橋3-⑱~㉑、東京慈恵医科大学。大田備前守邸預かり

堀田家佐倉移転後の東京別邸

堀田正倫(伯爵)

明治29-5~大正はじめ 別邸 深川佐賀町=前出。本邸の継続

大正はじめ~昭和5年 " 本郷彌生町=文京区彌生1-①、東京大学農学部の一部。元徳川水戸藩下屋敷の一部

堀田正恒(伯爵)

昭和5年 ~昭和10年代 " 渋谷上智町=渋谷区広尾1-①、常陽恵比寿アパート、上智会館の一部。元牧野備前守邸の一部

" 10年代~" 20ころ " 目黒=目黒区目黒 確認中

明治6年、新政府は佐倉城に軍営所(のちの陸軍歩兵第2連隊)を設置、城郭建物はすべて棄却された。明治以降、わが国は軍事大国として列強入りをめざしたが、昭和20年敗戦。戦後、旧佐倉城跡は一般市民の憩いの公園として開放された。土井利勝築城後400年、佐倉城の変遷はまさにわが国近代史の縮図ともいえた。

注意) 参考までに後堀田家は歴代掲載。春日局邸を省略。正俊の初代藩邸を万治上がり屋敷としました。

堀田正盛、正順、正時、正愛菩提所の台東区金蔵寺、日輪寺には墓石がなく合祀の甚大寺を位牌所としました。

* 調査の進展で一部を修正追加することがあります。

以上

内島2-③、

明治期

堀田 八松園 = すみなく 堀田各邸 文書あり

佐倉藩江戸屋敷の変遷

江戸時代、諸大名は江戸に屋敷を構え、人質をおくとともに参勤の拠点とした。人質の起源は、まだ天下の形勢も定まらない慶長元年藤堂高虎の弟正高にはじまる。豊臣秀吉が亡くなった翌慶長4年には浅野長政、細川忠興、前田利長がこどもや母親を江戸へ差出し、関が原の合戦の勝利で徳川家康の天下が定まると競って人質を送って徳川家に異心のないことを証明した。家康は人質を歓迎、江戸に居住のための邸地を提供している。こうして江戸屋敷が登場することとなった。

江戸はじめのころ、有力諸大名は1国1城の主を意識した豪華絢爛とした桃山殿舎を競ったが、明暦大火以後幕府が華美を禁止した。江戸屋敷は通常、上屋敷、中屋敷、下屋敷などからなり、小藩で3邸、大藩では5～7邸におよぶこともあった。上屋敷は江戸城登城に便利な郭内やその周辺に置かれ、その構成は表、奥に別れた。表は公式の役所で、奥は私邸。江戸定住を定められた正室と子女が居住した。中屋敷は上屋敷の予備屋敷、世子の住居にあてられることが多かった。謀叛を恐れた幕府は世子も厳しく管理、家督相続まで江戸住まいを命じた。

下屋敷は河岸地や江戸郊外に置かれ、専用の荷揚げ場や倉地であったり、藩主の居屋敷や隠居所とされた。ここに回遊式の築山泉水庭園を作り、ワビ、サビの独自の文化を築いた。現存する小石川後楽園、浜離宮庭園、六義園、有栖川宮公園、清澄公園などが江戸屋敷庭園の名残りを今日に伝えている。

佐倉藩は江戸の東側面を守る要衝として10家が藩主に就任したが、うち8名が老中を勤めるなど、徳川將軍家とは特別の関係にあり、上屋敷も初代・土井利勝以来実に25か所を変遷している。江戸3百年、関東屈指の歴史の町として繁栄した佐倉藩江戸屋敷の歴史を振り返ることとしよう。

土井利勝の出自と家康の鷹狩

佐倉城創設者・土井利勝が同じ下総國小見川1万石から佐倉3万2千石に栄進されたのは徳川幕府成立間もなくの慶長15年2月のことであった。時に利勝36才。油の乗り切った青年時代であった。当時の佐倉陣屋は大堀館といい、現在はスーパーダイエーのハーバーマートとなっている。微高地だが、周辺は大きく様変わり、当時をうかがうことはできない。

佐倉藩藩邸の歴史を振り返る前に土井利勝のナゾ多い出自から紹介することとしたい。佐倉藩の歴史が利勝の出自と切離すことができない関係をもっているからである。幕府公式の人事録『寛政重修諸家譜』で土井利勝の項をひらくと、父を土井利昌、母は葉佐田則勝の女。「天正元年遠江国浜松に生まる。ときに東照宮（家康）より相州広正のご短刀を賜う。いとけなきより傍らに候し、7年4月7日、台徳院（秀忠）ご誕生のとき付属せられ、りん米240俵を賜う。ときに7才」とある。

『寛政重修諸家譜』は幕府が諸家から提出させた系譜をもとに編纂したものだが、短刀の拝領などナゾ多いとされてきた。諸家譜の元原稿となった土井家の『寛政呈譜』は「東照宮遠州浜松居城の節、御殿において出生。時に相州広正の短刀を拝領。（中略）母は葉佐田美作守則勝の女。東照宮お側に給仕、利勝出生ののち小左衛門利昌に賜う。ゆえに利勝は利昌の家に養育された」と記載している。古河市と古河市史編纂委員会の『土井利勝』はこれら資料を解析「利勝は家康の子であったと断定して誤りないと思う」。同市の郷土史家・早川和見も同様見解を『藩祖土井利勝について』にまとめて第18回郷土史研究賞特別優秀賞を受賞している。

家康落胤説は江戸時代の書物にも登場し、幕府は暗にこれを容認したようである。利勝が家康の落胤とすると、家康、秀忠、家光3代にわたった利勝への信頼と功績がよく理解できる。

利勝は徳川家康の命を受けて、転封翌16年、その南西方2キロ、鹿島台の地に築城を開始する。ここは千葉宗家が本佐倉に本拠を構えたとき、小田原北条氏の命令で鹿島城建設をすすめた半築城跡地でも

あった。豊臣秀吉小田原攻略時の千葉氏は北条氏の属将で、邦胤が家臣の謀叛で殺害されたのち、幼い重胤も小田原の人質とされたので、有名無実の存在となっていたらしい。鹿島城工事は重臣原氏の手で継承され、千葉一族の鹿島幹胤が居住したとされるが詳細はわかっていない。天正18年、小田原落城をもって廃城、千葉氏も北条氏とともに滅亡となった。

小田原攻略の論功行賞で徳川家康に北条氏の旧領が与えられ、この年、佐倉周辺に4人の大名が配備された。旧千葉氏の本拠、本佐倉城に三浦義次が入ったが、ほどなく家康の5男武田信吉が小金城から移る。信吉は山城の本佐倉城を嫌い街道に面して大堀館をひらいた。旧原氏の居城、臼井城には徳川4天王、酒井忠次の長男家次が、岩富城には北条氏勝が入った。久野宗能とその子宗朝も武田信吉に伝人として佐倉1万3千石をえ、その居所が鹿島城の通称下屋敷であったとされるがはっきりしない。慶長元年、宗朝が秀忠にしたがって京都入りしたとき三宅弥次郎を殺害、自らも死亡して廃絶となった。

土井利勝以前の佐倉周辺城主の江戸屋敷

三浦義次(天正18年～文禄元年=本佐倉城1万石)

江戸屋敷なし。慶長年中は西の丸下=千代田区皇居外苑①、2重橋交差点周辺

武田信吉(文禄元年～慶長7年=大館館4万石)

江戸屋敷なし

松平忠輝(慶長7年～12年=大館館5万石)

慶長年中 大手門前=千代田区丸の内1-①、NKKビル、UKビル(後出)

小笠原吉次(慶長12年～15年=大館館2万8千石)

江戸屋敷なし

酒井家次(天正19年～慶長9年=臼井3万石)

慶長年中 和田倉門内=千代田区皇居外苑②、坂下門前交差点周辺

久野宗能、宗久(天正19年～慶長元年=鹿島?1万3千石)

江戸屋敷なし

北条氏勝、氏重(天正19年～慶長19年=岩富1万石)

慶長年中 西の丸下=千代田区皇居外苑①、2重橋交差点周辺

(慶長12年図による)

利勝が鹿島台の地に築城を開始した経緯は『鹿島城御草分および御代々記』に「両御所様、お鷹狩と佐倉表へご出馬遊ばされ、鹿島山半築の城址ご覧遊ばされ、この地普請成就するにおいては天下に3つとなき城たるべし。再建いたすべし旨、大炊頭仰せ付けられ」た、とあり、『佐倉城旧記』は「東照宮(家康)の東金に遊ぶにあたりて、あらかじめこの城を宿城と定むる命ありしかば、にわかに小書院を造る。この時、江戸城普請の材木の不要に属せし檜の末木の細きものを賜い、ために功をあげれり」としている。家康は鷹狩り好きで佐倉近くもひんぱんに出歩いている。3代家光までの鷹狩を拾うと

慶長16年10月15日	家康	✓稲毛で狩り(実記)
" 18年12月 3日	"	✓稲毛あたりで狩り(実記)
" 12月 6日	"	✓明年、上総土気、東金狩り予告(実記)
" 12月12日	"	来正月、上総土気、東金の地に新鷹を捉飼する到命あり
" 12月	利勝	家康の命令を受けて御成街道、御成東金御殿着工
" 19年1月	"	御成街道、御成東金御殿完成
" 1月8日～16日	家康	東金渡御。狩り。13日は佐倉あたり狩り(実記)
元和元年 11月16日～23日	ころ"	東金渡御。狩り。(実記)
" 11月17日～23日	秀忠	17日佐倉渡御。狩り(実記)
" 12月4日～6日	家康	稲毛あたり狩り(実記)(2年4月、家康逝去)
" 3年 11月	秀忠	東金渡御。狩り(実記)
" 4年 10月29日～11月12日	"	"
" 5年 11月21日～12月5日	"	"
" 6年 9月16日	家光	"
" 7年 11月20日～12月3日	秀忠	"
" 9年 10月13日	"	"
寛永2年 12月6日～8日	"	"
" 4年 11月12日～12月3日	"	"
" 5年 11月	"	岩留(富)村に別館造営、渡御(実記)の3/4
" 7年 11月8日～12月3日	"	東金渡御。狩り(実記)

9. 12月

寛永元-1 小原信光 東金に別館、土倉築造(2/3)

実に17回を数える。この中でとくに注目すべき記述は、家康の命令を受けた利勝が江戸から天領、東金狩場への専用道路、御成街道と宿泊施設、東金御成御殿を造営したことだろう。この結果、家康の命令次第、いつでも狩りに供奉し、自領に家康を迎えることができることになった。家康がはっきり佐倉に入ったという記録が『徳川実記』の慶長19年1月13日にある。「土井大炊頭利勝、永井右近太夫直勝、松平右衛門佐正綱を武将として、近習の士百余人、吉田、佐倉あたりに狩りせしめられ、鹿2、猪4をえたり」。家康は同じ日、佐倉市の清光寺に訪れ、大樹院歯骨塚に参拝、子孫長久を祈って塚上にホウの木を植え、供養料として寺領20石を寄進している。こうした折、建設中の佐倉城に立寄って視察、小書院御成御殿に宿泊されたとすると『佐倉城旧記』などとも一致することになる。ほかにも家康ゆかりとされる地が佐倉にある。臼井台宗徳寺の権現水で、家康が訪れ清水でのどの渇きをいやしたという。『印旛郡史』は天正19年11月としているが、『徳川実記』での裏付けはできない。とはいえ、これだけひんぱん、しかも長期滞在もある家康が至近距離にあり実子かつもっとも信頼した利勝と気脈を通じていない方が不自然というものだろう。家康は佐倉周辺で狩りを楽しみながら、里見や旧酒井、千葉、原氏の動向に目を光らせては、ときに利勝相手に徳川3百年の基盤作りに密議をこらしたのではないだろうか。家康没後、秀忠、家光の東金鷹狩御成りはつづいたが、寛永10年、利勝の古河移封以降、將軍家が再び、佐倉、東金の地に足を踏み入れることはなかった。

土井利勝、佐倉城を竣工

佐倉城工事は「慶長16年正月佐倉城楯はじめあり、7年を歴て功をはる」（寛政重修諸家譜）とあり、竣工は大阪の陣をはさんだ元和2年（3年ともいう）であった。また寛永2年7月と5年3月に佐倉城修営の許可をえ、6年6月には江戸城山里の櫓を移築しており、その完成は寛永時代におよんだ。

佐倉城のおかれた鹿島舌状台地は印旛沼にそそぐ鹿島川を眼下にみおろす高台にあり、その先端は急崖と水濠を、本丸から北と東に広がる台地には3重、4重に連ねた空堀と城門を構えている。石垣のない土の城で中世城郭の匂いを色濃く残した本格的な平山城であった。

その構成は本丸、2の丸、3の丸、椎木郭、大手門から3の門までの高台などからなり、町人町までを城内に取込んだ総郭になっているのが特徴。本丸には本丸御殿、天守閣、銅櫓、角櫓があり、その虎口に1の門、台所門が置かれた。1の門は4間梁桁行8間、2階作り。現存古写真をみると櫓門に大入母屋屋根本瓦葺きで鬼瓦の上にシャチホコが乗っている。維新後の明治6年に取壊しになった。台所門は本丸の裏門で3間梁に7間、2階建ての櫓門であったが文化3年に大破、取壊した。

本丸御殿は「御本丸御屋形ノ絵図」「御城内間数書上」などから詳しい構造がわかっている。前出の「佐倉城旧記」によれば「小書院は上段、下段の間2間（中略）。上段、下段はみな金張り付きにして、雲谷風の着色の山水をえがき、柱は角材を用いて上段床柱棚はことに美材なり。（中略）これより廊にいつれば浴室あり、浴室は檜の美材にして節なしなり。（中略）これは正しく東照宮の浴せしところなり」と書き、「古今佐倉真砂子」は「本丸は権現様お腰掛けさせられしゆえ、恐れて代々居住せざるなり」としている。本丸御殿は將軍家の往訪に備えたお成御殿で、金の間、書院、溜の間、広間、料理、台所の間など畳数は404畳であった。代々の佐倉藩主は日常ここを使用することはなく、2の丸のご対面所、後期は3の丸御殿に生活した。

土井利勝、江戸城山里の3層櫓を拝領

御成御殿金の間の先を廊下つづきにすすむと銅櫓にでる。地元・佐倉ではこの櫓が家光から拝領した江戸城山里の3層櫓だとした説が有力である。拝領櫓の原典は『東武実録』で、寛永6年6月「伏見奉行

小堀遠江守政一にわかには召されて参府す。これ山里の新庭指揮せんがためとぞ。政一が好みにて庭中新に池をうがつ。(中略)茶室のかきりの間近くに3層の楼あり。庭上の松に障ればとてその楼をこぼち、土井大炊頭利勝に給りかば利勝おのが所領佐倉に運送して、これを補修して城内の天守となす」。

江戸城の山里郭は西の丸の裏、皇居の道權堀そばにあった。西の丸の第1期工事は慶長16年7月、家康の隠居城とされたが本人は駿府に居住したのでほとんど利用されず、その後世子時代の家光が居住した。寛永元年、家光の將軍職就任にあたり、本丸、西の丸両將軍の居城交換のための第2期工事が行なわれた。「この営造に西の丸山里の数寄屋またなりしものとみえ、寛永4年6月25日、秀忠ここに徳川(尾張)義直、同(水戸)頼房、藤堂高虎を召して茶を賜いしことあり」(東京市史稿)。3層楼はこの数寄屋かそれに関係したものだろう。寛永6年の江戸城工事は城門や石垣工事が中心となった利勝は工事の担当老中として、諸大名を指揮、自身も2番組の責任者として西の丸石垣の構築などにあたり、家光から不要となった築5年の3層楼を拝領したものだろう。

現存する古写真を見ると、銅櫓は通常の櫓建築と大きく違っている。金閣寺、銀閣寺風の方形づくりで楼閣風の古風の作りをしている。2階づくりだが、寛永時代の『土井利勝時代佐倉城絵図』では3層に描かれており、前出の『佐倉城旧記』は途中で2層に作り直し、「この櫓の結構、奇にして精巧なることさらに驚くべし。2層に登る階は良材にして欄干はことに精巧を極めたり。(中略)いずれにしても4百年のものならん。銅瓦の厚きこと意外に出で、高価なりたり」と続けている。

ほかに3重4階の天守ご3階と3重の角櫓があった。天守は城の中心となる高層の櫓で、城の象徴とされた。佐倉城の天守閣は基部が7間に8間、3層4階建てで城外からみると3階にみえたことからご3階の名で親しまれた。シャチホコを含む全高が27.5メートル、延べ坪数は213坪あった。飾り破風のない質実なもので、水戸城、古河城と同形。利勝がかかわった元和の一国一城令などの城郭縮小政策を率先したものといわれる。とはいえ佐倉城は10万石、老中城として関東屈指の格式を誇った。

華美を競った江戸屋敷が並ぶ

利勝の上屋敷は神田橋門内。現在の千代田区大手町1丁目2番地、3番地で、大手町合同庁舎2と三井生命ビル一部にあたる。神田橋際に立つ千代田区の神田橋史蹟板によると「この辺りは昔芝崎村といって神田明神の旧社地でした。その跡地が土井大炊頭の屋敷となって、門、矢倉なども預けられ子息の遠江守の代まで門に土井家の水車の紋をつけた幕を張り巡らしていたといいます。そのころ大炊頭殿橋ともいわれたそうです」。慶長8年拝領。その坪数はおよそ3千坪であった。

この年、関が原の合戦に勝利した家康が征夷大將軍に就任、江戸の第1期工事を開始している。日比谷入江として海中にあった東京駅から有楽町、銀座一円を埋め立て、江戸城の本格工事がはじまった。当時、利勝は小見川1万石の大名に取り立てられたばかりだが、すでに秀忠の宿老として幕政にも大きな影響力をもつようになっていた。慶長10年、家康は2代將軍の座を秀忠に譲り、自ら駿府に引退して大御所政治を開始する。本多正信、正純父子を中心に成瀬正成、安藤直次らの新参譜代、伊奈忠次、大久保長安らの代官に、天海、崇伝、林羅山らの僧侶、学者、民間からは茶屋四郎次郎らの豪商、外国人ウィリアム・アダムスら多彩な側近勢力で構成した。強力な指導力で政治の動向を決定。元和2年には大阪冬、夏の陣で豊臣秀頼を殺して後顧の憂いを一掃した。

秀忠政権になると幕閣の中心は酒井忠世、土井利勝、安藤重信、板倉勝重らに引継がれた。門閥エリートによる幕府の運営体制がはじまり、利勝は徐々にその頂点に向かって歩みだした。

慶長、元和、寛永時代の有力大名江戸屋敷は聚落第、伏見城を模した桃山建築で華美を競いあった。加藤清正、伊達政宗、前田利常、細川忠興、上杉景勝、蒲生秀幸、毛利秀就、鍋島勝茂らの有力外様大名

邸、御3家邸、駿河大納言、結城秀康、松平忠輝邸ら徳川一門邸の豪華さが伝えられている。

慶長19年の『当代記』には「この1両年中、諸大名江戸屋敷、屋敷の家作美を尽くし、門は上総主江戸一番なり。家は加賀国松平筑前1番なり」としている。家江戸1番の松平家は加賀前田100万石だが、門1番の上総介は徳川家康の6男松平忠輝。大堀館時代に5万石藩主の座にあり、佐倉城とも関係が深い。川中島をへて高田45万石にすすむが、兄秀忠の將軍就任に支障あるとされて廃絶となった。改易後の忠輝邸は福井藩主の松平伊予守に引き継がれる。佐倉市の歴史民俗博物館所蔵の国宝「江戸図屏風」は最盛期を誇った寛永時代の江戸城を描いている。さんぜんと輝く本丸天守閣、本丸御殿を中心に、大手町、丸の内、日比谷、霞が関に有力大名邸が連なったが、ここでも大手門に面した松平伊予守邸が一段とめだっている。

屋敷の周囲を白壁長屋で囲み、その4隅に2重の隅櫓をあげる。正面に大きな門が2こ。左が將軍の御成りに備えた御成門。切妻造り軒唐破風檜皮葺き。日暮門と呼ばれるように一日見てもあきないほど華麗な彫刻で飾られたという。右の門は4脚門で大棟門型式の瓦葺き表門。主人の出入り口になる。松平越前家の建築図「伊予守殿屋敷図」が岡山大学に現存している。これによると3千5百坪敷地の左3分の1が御成御殿で中門・上段の間つき大広間、上段の間つき書院、能舞台、数寄屋、年寄衆（老中）の間、料理の間、馬屋などからなる。もちろんこの御殿は將軍御成り以外に使用されることはない。生殺与奪の権利を持つ將軍家との友好関係は大名家にとっても存亡にかかわる大事。式成御成りがいかに重大であるか間取り面からもうかがえる。

大棟門の方は入って玄関、遠侍、色代と続く。遠侍は番所で、色代は応接間、使者を迎え口上を聞く。手前が表とよばれる役所で、すすんで主人の生活する中奥。黒書院、小書院、料理の間などからなる。黒書院の上段の間で執務、家臣と面談する。さらにすすむと奥で、大名の妻子が生活した。

有力大名屋敷と徳川家門の江戸屋敷が豪華を極める一方で、利勝ら譜代大名家の藩邸はどうだったろうか。大半は『江戸図屏風』にも登場せず、史料もほとんど現存していない。外様大名とくらべて敷地も小さく建物も地味で、周囲の長屋には隅櫓はなく、表門も長屋門が多かった。表、中奥、奥の構成は松平家のそれと大差がない。土井家の上屋敷もきっとこんな状況であったことだろう。

繰り返される土井家お成り

利勝は官吏としても優秀であったが、歴代將軍の恩寵も一方ならぬものがあつた。『寛政重修諸家譜』

「徳川実記」から土井家のお成りを拾うと

慶長16年11月	秀忠	上屋敷渡御。前年家康より賜る茶入開き	(茶入は16年2月利勝邸へ)	来邸
寛永6年8月28日	家光	上屋敷渡御	(カセイフ) トルカシテ	(美す)
" 9月2日	秀忠	来た渡御	カセイフ	(カセイ)
" 14年11月	家光	駒込下屋敷渡御	カセイフ	トギヨウシ(カセイ)
" 16年4月18日	"	上屋敷渡御	カセイフ	17-11月、利勝邸へ(カセイ)

を数えている。將軍の御成りを再現すると、まず予告。將軍から何月何日に往訪する旨の仰せがでる。大抵は数か月間の準備期間があり、この間、大名家では御成御殿を修築して来駕に備える。大変な名誉だが経費が莫大、元禄14年の前田家綱吉御成りでは棟数48にまたがる御成御殿を造営、当日経費を含めた総費用は36万両にもおよんだという。

当日は未明に江戸城に登城して事前にお礼を言上し、朝早く到着する將軍の行列を門前でお迎えする。將軍は本丸大広間に横づけされた駕籠で大手門から出、神田橋の土井邸へ。この間、距離はわずか1キロだが、供が格別に多い。総勢数百人におよぶ行列がつづいたことだろう。この日のご相伴役は弟・駿河大納言忠長、藤堂高虎、立花宗茂の3人。早めに来邸してお成りを待つ。將軍は主人、重臣らの出迎えを受けて御成門から御成御殿へ。案内された上段の間で一服。最上級の茶菓がでる。とくに家族の拝

謁が許可され、将軍からそれぞれに土産物の交換がある。席を御成書院か庭園の数寄屋に移して宴席。能か猿楽を見学して、夕方帰城といったスケジュールが基本パターンである。『大ゆう院殿（家光）御実記』によると、この日、広間において猿楽見学、演目は白鬚、清経、野の宮、葵上、桜川、舍利、祝言の7番。終わって家光の所望で喜多七太夫が橋弁慶を演じた。

将軍のみやげは金森正宗の脇差、銀500枚、あわせ50領、利勝もまた長光の太刀、左文字の刀、吉光の脇差、印子金20丸などを献上、お礼参上のため登城した利勝は将軍家所蔵の硯箱、雪村の屏風、千利休手作りの茶杓を拝領した。同じ年9月2日には大御所・秀忠の御成りがあった。ご相伴役は御三家・水戸頼房と今度も藤堂高虎、立花宗茂。数寄屋で昼食、花、炭遊び、一服の後猿楽。饗宴のとき利勝に大内正宗の脇差、金50枚、小袖50、世子利隆に刀、2男勝政に脇差を拝領、利勝もまた正恒の刀、印子金20丸などを献上している。

明暦の大火、江戸を焼く

土井家の神田橋上屋敷は2回火災焼失した。最初は慶長17年6月1日、自邸が火元で全焼。家康から作事料の一部千両を拝領して再建した。2代利隆の明暦3年1月18日、本郷丸山の本妙寺から出火。この日は朝から強い西北の風がふきまくり、たちまちのうちに火の手は江戸の町中に広がった。火は本郷、湯島、駿河台から神田方面を焼いてあと一步の神田橋まで迫ったが、濠が防波堤となって類焼は免れた。いったんおさまった火災は翌19日再び出火。焼残った住居をなめ尽くすように北の丸郭、吹上郭に飛火、内濠の平川濠、道権濠をこえた火が不燃と信じられた江戸城のシンボル天守閣に燃え移ると引きずられたように本丸御殿、2の丸も炎に包まれた。煙硝蔵の爆発音が轟き、由比正雪残党の放火説がとびかう中を、提灯に先導された将軍家綱の駕籠が西の丸に逃れた。夕方には丸の内郭と大手前郭が類焼、土井邸も一瞬にして灰埃となった。火災は3日にわたって江戸市中のはほぼ全域を焼払い、死者は10万2千余人にもおよんだ。

町中の橋は焼落ち、逃げまどった人々は猛火をさけて川に飛込んだり、町に放たれた馬の暴走に蹴散らされた人も多かったという。翌20日は大雪。「一昨夜より火を避けて広野に露生せし細民など凍死するもの、また少なからず（徳川実記）」。まさに、踏んだりけったりの大災害であった。振袖火事の別名で知られる明暦大火は、日本橋の呉服問屋が丙午生まれの一人娘の菩提を弔おうと、護摩をたいて打掛けをかざしたところ、それが舞い上がって大火となったともいう。面白いが史実とはいえない。

明暦3年大火時の大手前郭は住友ビル、一ツ橋総合ビル、パレスサイドビルの地に4代将軍家綱の実弟でのちに次期将軍に迎えられた徳川綱吉、丸紅ビル、気象庁、合同庁舎1、3の地に知恵伊豆こと老中松平信綱、三井物産ビルには4代将軍家綱のころ専権をふるい、下馬将軍と恐れられた大老の前橋15万石酒井忠清、協和太平洋ビル、大手センタービル一部に館林5万5千石の松平乗久、パレスホテルは高崎5万6千石の安藤重長、2列目は三井生命ビル一部と日本長期信用銀行に郡上5万石の井上正利、大手町センタービルの一部に郡山19万石本多政任、NKK本社、A UUビル越前福井45万石の松平光通と、土井邸の回りには、徳川家門、幕府要職者などそうそうと上屋敷が並んでいた。

「明暦3年3月3日土井家2代目利隆、柳原元誓願寺跡地拝領。神田橋内屋敷へ55年間住居。神田屋敷、松平乗寿へ下さる」（東京市史稿）。利勝なきあとの土井家は江戸城近くに居住する理由もなく、明暦3年、神田橋門の警備も解かれて柳原元誓願寺跡移転の命令を受けた。跡地はのちに佐倉藩主にすむ松平形原家となった。

下屋敷の発達と土井家原屋敷

江戸時代はじめの諸大名屋敷は江戸城近くにおかれたが、敷地も平均3千坪程度と狭く、ほかに河岸地に蔵屋敷をおいた大名もあったが、多くは狭隘で不便を困っていた。慶長後期、元和、寛永と幕府政治が安定し、江戸の繁栄がすすむにつれて別荘地ともいえる下屋敷が拝領されるようになる。その第1号が土井利勝の原屋敷であった。「東京市史稿」などによる原屋敷は、慶長18年3月の拝領、たて9町の横4町、87, 325坪で、隣接した大塚添屋敷が1, 705坪、あわせて9万坪ほどになる。原屋敷は元禄10年1万5千坪を公用に、宝永元年9千坪を柳沢吉保下屋敷六義園に、享保6年1万8千坪を6者相對替えて霊岸島箱崎の下屋敷と交換したので、維新時には46, 761坪となった。また、添屋敷は享和3年に相對替え上地となった。

利勝時代の敷地はJR山の手線駒込駅から少し南にさがった本駒込1丁目④、⑨から⑬、⑭から⑯、2丁目の①から⑦番地、6丁目①から③、そして⑬番地の六義園一部に相当する地域にあたる。旧白山通りと本郷通りに挟まれた閑静な住宅街で、小石川高校、日本原子力研究所、駒込署、昭和小学校のほかは1戸建て住宅とマンションが立ちならぶ。六義園は大老にすすんだ柳沢吉保が8年の歳月をかけて作庭、信任を独占した5代將軍綱吉のお成りがつづいた。国の特別名勝に指定された2万5千坪におよぶ庭園が保存され一般公開されているので一見の価値がある。添屋敷は道路一本をはさんだ現在の白山5丁目の東洋大学周辺にあたる。江戸後期こそ、大名下屋敷や旗本屋敷がならんだ武家地だが初期のころは周辺もまだまだ拓けていなかったらしく、利勝にちなんで大炊原ともよばれた。土井家の原屋敷は利勝のあと、江戸幕府が倒れた明治維新以後もつづき、昭和8年、古河市の正定寺に屋敷の黒門が寄進されて現存している。薬医門の立派な構えだが建造年などは不詳という。

江戸下屋敷は利勝に続いて、元和2年、加賀の前田利常が東京大学地を拝領。以下、細川忠利、水戸頼房をはじめ諸大名の下屋敷賜邸がつづいた。下屋敷には池泉を配した広大な庭園を中心に数寄屋づくり2階建ての楼閣や茶室が作られた。寛永6年4月の將軍家光と大御所秀忠加賀前田下屋敷お成りでは準備期間が3年。御成御殿と庭園、数寄屋を構築して接待した。家光がすっかり気をいったかどうか、これを契機に將軍家のお成りは上屋敷式成お成りから遊興を主体とした下屋敷お成りへと変わった。

利勝原屋敷への3代將家光お成りは古河移封後の寛永14年11月1日にあった。「土井大炊頭利勝の別業にならせられ、利勝御膳を献ず。そのとき利勝、則国の脇差を献じ、また包永のお刀を給う」(徳川実記)。当時のお成りは茶事を中心に行なわれており、庭に降り立った家光が築山や泉水をめぐるせた深山幽谷の趣きにひたったことだろう。

蔵屋敷は水天宮近くの中央区蠣殻町1丁目⑭から⑯、38番地と新大橋通りをまたいだ日本橋人形町1丁目⑤～⑩番地で、区立蠣殻町公民館、区日本橋特別出張所、社会教育会館、公会堂などがある。「東京市史稿」は寛永18年利勝拝領としているが、もっと早い寛永9年図にも記載されているので佐倉時代からのものであろう。谷蔵屋敷、土井堀などといった。蔵屋敷は年貢米や国産品を売りさばいて換金したり、保管するために作られた倉庫で、藩から派遣された役人のほか蔵元、掛屋といった商売人が製品や代金の管理などにあたった。屋敷地の北側が道路のほか3方が入堀という典型的な蔵屋敷構造。船で国元を結び水路を江戸橋、日本橋に上ると道三濠と外濠が交差する一石橋をへて神田橋の上屋敷に通じた。周辺は武家地で酒井雅楽頭、安藤対馬守などの蔵屋敷が並んだ。江戸はじめは1万6千坪ほどあったが刈谷、大野両藩が分家したとき分割譲渡、最終坪数7, 845坪であった。9代將軍家重時代の延享4年相對替えて上げ地。跡地に寛政12年、不正事件を起こした銀座が京橋から移された。銀座の語源となった幕府の銀貨鑄造所だが、名称は旧地に引継がれた。

佐倉時代の利勝は、幕政の中心におかれたのでほとんど藩政をみる余裕がなかった。利勝は弟の土井内

蔵元政に8千石を与え、城内3の門内の家老屋敷に住まわせて国元の管理をまかせた。のちの古河時代「寛政分限帳」によれば、国詰めの家臣370人に対して江戸詰めは237人。江戸常勤だった利勝時代は、足軽、中間、又者を含め江戸藩邸居住者は、数千人にも達したことだろう。

江戸屋敷の構成についてはこれまで紹介した。上屋敷は式正御成御殿と藩主邸宅が全体の8割を占め、下屋敷も広大な庭園を中心に数寄屋がめぐり、藩主御殿が大部分を占有していた。また、隠居藩主に隠居御殿、世子の婚礼で新婚御殿を造営することも多かったという。將軍家の姫君を迎えるときは新築御殿と朱塗りのご主殿門が必要。嫁入り後も生涯將軍の娘として扱われたことから、拝領にあたって見返りを要求するなどの駆引きもあった。残り敷地に馬場や馬屋、蔵、それに重臣屋敷、役職者住居が確保され、下級藩士や足軽、中間、臨時やといなどは周囲に回された2階建の長屋に生活した。長屋は単身向け雑居寮といったところだろうか。1部屋に数人が起居した。生活にも厳しい管理があった。開門が明け六つ（午前6時ころ）から暮れ六つ（午後6時ころ）。通行証を掲示してやっと外出がなかった。

利勝、古河に移封。大老に就任

利勝の佐倉時代は、家康、秀忠、家光3代にわたって幕府の要枢に關与している。初期の江戸、駿府2元時代は両宮の意思の疎通をはかり、大阪夏の陣では秀忠の旗下にあった。側近として家康、秀忠両將軍の葬儀を奉行、秀忠、家光数次の上洛に供奉するなど、常に將軍のお側近くで幕政に参画している。元和、寛永期には有力外様大名の改易、転封がめだったが、利勝が影の演出者ともいわれた。豊臣家滅亡直後の元和元年、秀忠は酒井忠世、青山忠俊と利勝に当時12才の世子家光もり役を命じた。世に伝えられる寛永の3輔であった。それぞれの特徴を生かした指導は家光の人格形成に大きく影響した。

寛永10年4月、利勝は1万8千石の加増、あわせて16万石をもって古河に榮転となった。こえて15年1月、最初の大老に就任。常勤を免除されて特別な用向きだけの登城となった。翌16年ころから健康がすぐれず、病状は一進一退をくりかえす。正保元年（寛永21年）7月7日、いよいよ臨終近いとの報告をうけた家光が、みずから病床に見舞いたいと申出るが、利勝はこれを固辞（寛政重修諸家譜）、將軍が臣下を見舞うという上意はまさに異例のことであった。

薬石効なく7月10日、原屋敷において逝去。72才であった。葬儀も原屋敷においてしめやかに執り行われた。遺骨は秀忠の遺命で自らの眠る芝増上寺の別当寺・安蓮社に置かれ、神田誓願寺にも分骨された。安蓮社は港区芝公園3丁目①番地、JR浜松町駅から10分ほど歩いた御成門小学校の真ん前で歴代の増上寺門主の墓が並んでいる。その奥まった一角に宝きょう印塔を置いたが、平成2年、土井家の菩提寺古河市の正定寺に移葬された。渡良瀬川の河川敷に消えた古河城からほど近い旧武家屋敷街の真ん中。これより先、誓願寺から移葬した利勝と夫人の墓と同じ石囲いにおかれている。

佐倉市の松林寺も土井家の菩提寺で、数少ない利勝の遺跡の1つである。利勝佐倉城主時代の寛永年間に創建。「松林寺古絵図」によれば本堂を中心に観音堂、び沙門堂など大規模な寺域だったことが知られ、万一のとき戦闘施設にも使えるよう寺の周囲に土塁を巡らせている。一隅に利勝の養父土井利昌、母葉佐田氏、夫人松平氏の3基の宝きょう印塔がひっそりとたたずんでいる。

土井大炊頭利勝。生没=天正元年3月、正保1年7月。在任=慶長15年2月~寛永10年4月。菩提所=古河市正定寺。役職=慶長15年8月~寛永15年11月老中。~正保1年7月大老。石高=32万4千石。寛永2年9月~142千石。領地=香取、埴生、印旛、匝瑳、相馬、海上、上総国武射、常陸国鹿島、信太、河内、近江国蒲生、甲賀12郡のうち

参考) 土井佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

神田橋門内上屋敷*慶長6年~明暦3年=土井利勝、利隆。~元禄6年=松平乗久、乗春、乗邑。~正徳5年=松平輝貞。~元文5年=酒井忠音、忠存、忠用。~延享4年=松平輝貞。~明和4年=秋元涼朝。~天明6年=田沼意次。天明7年~寛政4年=鳥居忠意。~天保7年=一ツ橋卿向屋敷。~14年田安卿下屋敷。~安政4年=松平福井藩中屋敷。~明治維新=酒井姫路藩囲込み

原下屋敷*慶長18年~明治維新=土井藩下屋敷

蟬殻蔵屋敷*寛永ころ~延享4年=土井藩蔵屋敷。寛文3年ころ~寛政2年=土井刈谷藩蔵屋敷。天和ころ~文化ころ=土井大野藩蔵屋敷。延享4年~明治維新=戸田宇都宮藩蔵屋敷。寛政2年~寛政12年=酒井姫路藩蔵屋敷。~明治維新=銀座

石川忠総、7万石で入封

利勝の古河移封後の佐倉は後任者が決まらず、封地は1年余り幕府直轄地とされ、代官の間宮忠次、市川定吉、彦坂吉成が統治した

間宮氏は代々北条氏につかえ、父直元のととき秀吉の小田原攻略で主家が滅亡したが、家康に召出されて下総の印旛、千葉両郡で千石の朱印をえた。大阪夏の陣は井伊直孝に与したが戦死。嫡子の忠次が父の遺領を継ぎ、本牧領代官にすすんだ。市川定吉も北条氏の臣で、落城後、大久保長安、將軍秀忠、家光につかえて代官を勤めた。彦坂吉成も代官で4百俵をえたが、のち孫平九郎のととき租税に滞納あり、私したとして三宅島に追放された

寛永10年6月、石川忠総が7万石で入封。その後、領主はめまぐるしく交代する。利勝の移封後しばらく藩主が定着しなかったのは幕府基盤の安定と無関係ではないだろう。関が原の合戦後、関東に唯一残った里見忠義も改易、房総の多くは幕府天領と旗本領に分割された。

石川氏は清和源氏の流れ。清兼、家成のととき家康につかえ、その子康道が家康の関東入府にしたがって同じ千葉県の成東2万石を知行した。康道は番頭として家康に近侍し、関が原の合戦では清洲城守衛のあと佐和山城を攻略、その功績で大垣5万石に榮進となった。

康道には嗣子がなく、家康の命令で大久保忠隣の子を養子に迎える。忠隣を筆頭とする武断派と本多父子、官吏派の勢力争いに端を発した忠隣の私婚事件では、実父に連座して蟄居を命ぜられたが、大阪の冬、夏の陣で大功をあげて、家康、秀忠の信任に応えた。寛永10年、日田6万石をへて佐倉7万石にすすむ。佐倉在任はわずか1年。寛永11年閏7月、膳所へ転封となった。

石川家の江戸屋敷は幕閣と譜代重臣の立並ぶ皇居外苑の中央部、馬場先門から二重橋へのちょうど真ん中、内堀通りのあたりにあった。寛永図では姫路15万石の本多忠政、白河12万石の本多忠義、小倉15万石の小笠原忠真、加納3万石の大久保忠職、勝山2万石内藤正勝の6邸が1ブロックを形成している。いずれも徳川譜代の功臣邸である。「江戸図屏風」にみるこの1画は、周囲に白壁長屋を巡らしているが、隅櫓、御成門、櫓門がなく、門は1つで長屋門のようにみえる。外様大名の結構にくらべその落差があまりにも大きかった。石川家上屋敷はのちに老中役屋敷とされ、稲葉正利、松平武元、松平定信、阿部正外らが居住、明治維新後は太政官代、正院、外務省などをへて、明治21年から宮城前広場、昭和23年皇居前広場と改称された。下屋敷も道路1本をへだてた南隣に置かれた。

石川主殿頭忠総。生没=天正10年、慶安3年12月。菩提所=京都市本禅寺。在任=寛永10年6月~11年閏7月。石高=7万石。領地=佐倉周辺

参考) 石川佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

西の丸上屋敷*慶長年中=大久保忠隣。元和、寛永ころ~11年=石川忠総。~天和元年=稲葉正則。~宝永元年=阿部正武。~正徳4年=秋元喬知。~享保2年=阿部正喬。~15年=水野忠之。~延享3年=松平信祝、信復。~天明元年=松平武元、武寛。~7年=久世広明。~寛政8年=松平定信。~享和元年=大田資愛。~文化14年=牧野忠精。~文政6年=阿部正精。~8年=松平輝延。~9年=松平乗保、乗美。~天保6年=松平康任。天保7年~12年=脇坂安薫。~14年=井上正春。~14年=間部詮勝。嘉永4年=戸田忠温、忠明。~文久2年=内藤信思。~2年=脇坂安宅。~元治元年=板倉勝静。~慶応元年=阿部正外。~3年=板倉勝静

松平形原家、佐倉就封

寛永12年2月から17年9月まで5年間、佐倉城は松平家信4万石、康信3万6千石城下となった。松平形原家は家康の3祖の5男からはじまる。家信は幼少のころから家康にしたがい、小牧の戦い、小田原攻略などに陣出した。江戸入りのとき五井に5千石を拝領。現在の市原市JR五井駅周辺に居住し

たが居館跡は定かでない。五井駅前、守永寺にある慶長13年建立という母理安大姉の宝きょう印塔が唯一形原藩の名残をとどめている。

慶長5年の関が原の合戦は江戸城留守居役をつとめ、戦後故郷の形原に戻って大名に列した。高槻2万石をへた寛永12年佐倉移封。2万石の加増となった。ときに71才の高齢、2年後の寛永15年1月佐倉で逝去。遺骸はいったん佐倉市の光忠寺に葬られたが、のちに篠山の光忠寺に改葬されている。

康信は家信2男として五井で誕生したが、長男が早世したので嫡子となった。大阪の陣は父の名代として出陣。就封にあたって弟2人に2千石ずつを分知、3万6千石となった。形原家は家康の縁につながって出世街道をすすむ。寛永17年、高槻へ復帰。慶安2年、1万4千石の加増をえて篠山5万石に栄進して明治維新を迎えた。

形原家の江戸屋敷も西の丸下、現在、皇居外苑①番地の楠 正成邸あたり。慶長期の長岡7万4千石の牧野忠成、寛永13年前橋12万2千石、大老・酒井忠世邸の跡地で、のちに若年寄役宅、間部詮房邸をへて、明治維新後、中山忠能邸、右院、左院、元老院などとされた。

松平形原紀伊守家信。生没=永禄8年、寛永15年1月。菩提所=亀岡市光忠寺。在任=寛永12年2月~15年1月。石高=4万石。領地=佐倉周辺

松平形原若狭守康信。生没=慶長5年2月、天和2年6月。菩提所=亀岡市光忠寺。在任=寛永15年5月~17年9月。石高=3万6千石。領地=佐倉周辺

参考) 石川佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

西の丸下上屋敷*慶長年中=牧野忠成。寛永13年=酒井忠世。~天和元年=松平家信、康信、信利。延宝2年=堀田正盛。貞享3年~3年=大田資直。~元禄8年=永井直敬。~宝永3年=松平忠周。~享保2年=間部詮房。~17年=寿光院。~寛保元年=板倉勝清。~延享2年=松平正貞。~宝暦3年=堀田正盛。~12年=土岐頼おき、定経。~天明元年=鳥居忠意。~文化9年=井伊直朗。~文政11年=京極高備。天保14年=堀親しげ。14年~文久3年=酒井忠ます。~慶応4年=平岡道弘

再び老中城に。堀田正盛、6人衆として活躍

寛永17年9月からおよそ2年間は公領で、野村為重、南条宗右衛門、八木重糸が代官をつとめた。野村家は浅井長政の臣で、父為勝が秀忠につかえ、関が原の合戦や大阪の陣の功績で320石をえた。東金、千葉領の代官をつとめ、秀忠の鷹狩にあわせて茶屋御殿を造営した。為重は寛永10年に父の後を継いで代官にすすみ、八木家は家康の関東入府以来小田原、金沢などの代官をつとめた。

寛永19年7月、元老中で家光の寵臣、堀田正盛が松本10万石から佐倉11万石城主に移封された。正盛の父は織田信長、浅野長政、小早川秀秋をへて家康に仕えた堀田正吉で、西の丸目付、使番など千石を知行した。正盛の母は春日局の夫、稲葉正成とその先妻の間に生まれた娘であったことから、11才のとき3代将軍家光の近習として仕え、家光将軍就任後の寛永3年、小姓番頭にすすんで1万石の大名に取立てられた。家光にとって母とも慕い、自らの将軍就任に功績のあった春日局の血縁で、家族同然に育った正盛への信任は主従の域を超えたものだったことだろう。こえて寛永12年、川越3万石、15年松本10万石に栄進。松平信綱、酒井忠世、阿部忠秋らとともに寛永期の幕政の中心となった。

寛永19年、再度加増があって佐倉に入封。当時、正盛はすでに老中を退任した後であったが、家光は大事政務に関しては幕政に参与するよう老臣会議への参加を命じており、いわば大老格ともいえた。

藩政にもみるべきものがあった。正盛は家臣団の拡充と軍事力の増強につとめ、15万石軍役を確立している。「広報さくら=城下町3」によれば「軍役15万石とは、知行高は13万石であっても出陣に際しては15万石の軍役を受持つということである。15万石の軍役は馬上3百騎(物頭)、兵卒3千人。鉄砲5百丁、人数646人。弓百張、人数130人。長柄2百本、人数240人。旗50本人数110人。主従都合4,426人の編成である。(堀田正盛佐倉分限帳)正盛の入封以前の佐倉の城下町は土井利勝3万2千石(のち14万3千石)、石川氏7万石、松平氏4万石という知行高を対象とした商家の町であったが、城下町としての規模は土井氏時代にはほぼ固定されていたものと思われる。それを

正盛の時代に再整備し、町並みを間町、弥勒町、本町までのばし、13万石にふさわしい町造りを行なったという。つまり「佐倉新町誰がたてた、日の本ひびかす加賀様が」とうたわれたと伝えられているのは加賀守正盛がこのように佐倉新町を拡張発展させたことを称えたものであろう。

慶安4年4月20日、3代将軍家光が逝去。行年48才であった。正盛も後を追って殉死。『徳川実記』によれば、「わが身は少年から格別の寵をこうむってかく登用していただいた。今度は殉死して昇天のお供することに決めました。されば心中とくにおだやかです」とのべた。これを聞いた一座の人々が我もわれもと殉死を申出たが、これを制止し「大恩を慕うみんなが殉死したら誰が幼主を補佐するのですか。ここは思いとどまってこそ忠義というものです」と押しとどめたという。このころはまだ殉死を忠義とする風潮があった。正盛は春日局の後継という事情もあり、周囲はこの殉死を当然のことと受止めたという。遺骸は同じく殉死した三浦正次らとともに台東区上野公園⑮番地の上野寛永寺内現龍院に埋葬された。JR山手線の鶯谷駅から徒歩5分。国立博物館東洋館の隣だが、施錠されていてお参りはできない。「玄性院殿心隠宗ト大居士」と書かれた正盛の宝きょう印塔にならんで酒井忠勝5女、正室阿要の五輪塔が建ち、品川区北品川3丁目⑩番地の宗家堀田藩菩提寺・東海寺には「臨川院殿前拾遺賀州大守心隠宗ト大居士」と記された3メートルをこす笠塔婆夫妻2基が静かにたたずんでいる。

正盛の上屋敷は西の丸下郭、皇居外苑②番地の和田倉御門内にあった。東京駅丸の内ま正面の行幸通りを進み、内堀通りとの交差点から皇居側の一角。江戸時代、桔梗門、坂下門に接した要路で、桔梗門から入り、大手3の門、中雀門をへて本丸に通じた。のちに老中の牧野成貞、稲葉正通邸をへて松平会津23万石藩邸となり、明治維新後、軍務官、兵部省、陸軍大学校などがおかれた所である。

下屋敷は浅草、浅草寺雷門先の一画で拝領は寛永13年、方2町とも5万坪以上ともいう。16年冬に多景楼を築いた。関8州の名勝を集めたという庭園は、伊豆や鎌倉、箱根などの四季を表し、池泉に面した数寄屋は高樓、月の都もかくやと見まがう美しさであったという。3代将軍・家光は「千代田城からの眺望ではなおりず、ここの下屋敷を訪れるごとにまずもって多景楼に上り、深呼吸を十数回試みたあとでなければ（中略）食物も喉を通らぬほど、この辺の景色が気に入っていた」（江戸から東京へ）という。正保2年12月14日失火。火は下屋敷を焼いて浅草米蔵1棟、通町20丁を類焼した。

正信の改易後、和田蔵門内上屋敷は没収され、嫡子正休が下屋敷に移住した。寛文元年11月、邸内の塩硝蔵で爆発事故、修理職人の煙草火が引火した。死者7、負傷者多数、堀田邸をはじめ近辺大小名邸や寺院あまたを崩壊した。さしも壮麗を誇った堀田邸跡地は一夜にして堀田原ともよばれた草原と変わる。寛文9年2月、屋敷地のうち2万坪を返還。『御府内沿革図集』による返還後延宝年中図はほぼ3万坪で、寿町1丁目の①から⑨、⑮、⑯番地と⑩番地の一部、3丁目⑦から⑩、⑮から⑳番地と⑪から⑮番地の一部、4丁目④から⑦番地、駒形①、②番地と⑤番地の一部にあたる。享保17年大火後敷地の大半を相対替え、明治維新当時の宮川藩は堀田豊前守正誠1万石。3丁目⑮番地。坪数2,893坪であった。下屋敷の一部、寿3丁目⑯番地に浅草宗吾霊堂が現存している。史蹟表示によると享和5年忽五郎の150回忌に建立したものではないかという。明治12年堀田家が一般の参詣を許可し、以来劇場関係者や庶民の信仰を集めている。現在の堂宇は昭和28年に再建された。

寛永時代の江戸屋敷は、譜代門閥の台頭と外様大名の没落という時代背景のうえに新しい展開を迎えていた。寛永9年、加藤忠広が領内不統一、家臣の内紛と駿河大納言將軍擁立問題などの疑いで改易。豪華絢爛を誇った桜田上屋敷と赤坂喰違下屋敷を井伊直孝が、11年、無嗣廃絶となった豪邸の蒲生忠郷邸を酒井忠勝が拝領。西の丸御殿も留守居役の名目で酒井忠世に預けられた。諸大名は將軍家の威光にそむけばどのような処分をうけるかわからぬという恐怖感を身をもって味わう一方、譜代門閥のエリート大名が幕政の中心に位置し、江戸屋敷も結構をきわめるようになった。

家光、ひんばんに正盛邸お成り

正盛が家光から家族的な付合いを受けたことから、正盛邸へのお成りもひんばんにくりかえされた。「

寛政重修諸家譜」と「徳川実記」によると

寛永14年	7月24日	居屋敷渡御 (寛政譜)	邸渡御 (実記)
"	8月14日	" *	"
"	9月2日	"	"
寛永15年	11月6日	邸渡御 (寛政譜)	" *
寛永16年	12月14日	浅草別荘渡御 (寛政譜)	
"	12月21日	渡御 (寛政譜)	
寛永17年	1月13日		浅草別墅渡御 (実記)
"	1月21日		別業渡御 (実記)
"	3月29日	渡御 (寛政譜)	"
"	4月10日	"	"
"	5月21日	居屋敷渡御 (寛政譜)	"
"	6月3日	渡御 (寛政譜)	"
"	8月5日	居屋敷渡御 (寛政譜)	"
"	8月9日		"
"	8月19日		"
"	8月25日		"
"	10月9日		"
"	11月27日		"
"	12月16日		"
寛永18年	1月16日	浅草別荘渡御 (寛政譜)	"
"	1月21日	別荘で御膳献上 (寛政譜)	"
"	2月14日		"
"	9月28日		"
"	10月15日		"
"	11月7日		"
"	12月8日		"
寛永19年	1月22日	浅草別荘渡御 (寛政譜)	"
"	2月12日		"
"	2月27日		"
"	3月25日		"
"	4月9日		"
"	5月12日	邸宅渡御 (寛政譜)	別墅渡御 (実記)
"	6月1日		別業渡御 (実記)
"	6月18日		"
"	7月12日		"
"		寛永19年7月、正盛、佐倉移封	
"	8月5日		別業渡御 (実記) *
"	9月10日	居屋敷渡御 (寛政譜)	"
"	閏9月7日	浅草別荘渡御 (寛政譜)	"
"	閏9月28日	居屋敷渡御 (寛政譜)	"
"	10月16日		"
"	11月5日		"
"	12月7日		"
"	12月21日		"
"	12月27日	居屋敷渡御 (寛政譜)	別墅渡御 (実記)
寛永20年	1月4日		"
"	2月12日	居屋敷渡御 (寛政譜)	浅草別荘渡御 (実記)
"	3月27日		別墅渡御 (実記)
"	4月21日	別荘渡御 (寛政譜)	"
"	5月5日		"
"	6月21日		"
"	6月22日	渡御 (寛政譜)	"
"	7月22日	"	"
"	8月13日	"	"
"	8月27日		"
"	9月10日		"

"	10月19日		別業渡御 (実記)
"	11月29日	別荘渡御 (寛政譜)	"
"	12月12日		"
"	12月18日		"
正保元年	1月4日		別墅渡御 (実記)
"	2月8日		"
"	2月18日	居屋敷渡御 (寛政譜)	"
"	3月15日		"
"	4月1日	浅草邸渡御 (寛政譜)	別業渡御 (実記)
"	4月21日		別墅渡御 (実記)
"	4月28日		"
"	5月12日		別業渡御 (実記)
"	6月1日		"
"	6月14日		"
"	7月23日	渡御 (寛政譜)	浅草別業渡御 (実記)
"	8月9日		別業渡御 (実記)
"	8月30日		"
"	12月25日	浅草別荘渡御 (寛政譜)	浅草別墅渡御 (実記)
"	12月27日		浅草別業渡御 (実記)
正保2年	1月18日		"
"	3月22日		別業渡御 (実記)
"	4月1日	別荘渡御 (寛政譜)	" *
"	11月19日	渡御 (寛政譜)	浅草別墅渡御 (実記)
正保3年	11月28日		別墅渡御 (実記)
正保4年	10月12日		"
慶安元年	1月5日	大炊台渡御 (寛政譜)	
"	閏1月5日	"	
"	10月22日	居屋敷渡御 (寛政譜)	
慶安2年	9月22日		邸渡御 (実記)

慶安4年4月、家光逝去、正盛殉死 (*詳細記載あり)

と確認できただけで83回を数えた。その内訳は上屋敷が4回、浅草下屋敷が73回、不明6回。庭園でくつろぐ下屋敷への遊興お成りが中心になっていることが興味を引く。ついでのお成りも多かった。鷹狩りなどの帰途の立寄りだが、事前に上意を受けて万端の用意があった。将軍一行は数十人から数百人におよび接待も大変なことだろう。家光の家臣邸お成りは酒井忠勝、土井利勝、井伊直孝、永井直政邸などにもみえるが正盛邸お成りが圧倒的に多く、歴代将軍中第1位となっている。

「佐倉史談」に正盛邸お成りの一文がある。「将軍家光の正盛を寵することはなほだ厚く、その邸に臨駕せしことただに一再にとどまらず。寛永14年8月14日、はじめてその邸に臨む。正盛の光栄いうべからず、饗膳善をつくし、供帳美を尽くし、猿楽数番を奏して台覧に供す。15年11月6日、また浅草の別墅に臨む。陪従せるもの井伊掃部頭直孝、立花飛騨上宗茂、土井大炊頭利勝、柳生但馬守宗短らをはじめ、みな当時の名臣なり。家光まず数寄屋にのぞみ、直孝、宗茂、利勝の3人その席に陪す。茶事終わってさらに書院に臨む。正盛は国宗の太刀1振、鞍馬1疋、綿300ば、巻物50を捧げ、長子与一郎正信はしょうじょうひ10間、太刀目録、次子久太郎正俊は太刀目録をささげて調す。正盛まず猿楽3番を台覧に供し、終わって盛せんをささぐ。家光このとき正盛に左文字の刀、正信に左安吉の脇差、小袖10重、正俊の室にひじりめん30反をたまう。正盛また貞宗の刀、則国の脇差を献ず。家光とくに家臣植松庄左衛門吉寿、植松主殿頭吉忠 (中略) の七人を召して調をたまい衣物をたまわる。家光感悦ななめならず、深く飲をつくして帰る。世人伝えて無比の盛事と称する。

その後、正保元年7月、別墅における茶亭新たになる。この月23日午の刻、家光とくにここに臨み、正盛に行平の脇差、時服20重、長子正信に脇差1振、時服10重をたまう。正盛茶を献じてなお太刀をささぐ。このほか放鷹の帰途に臨駕せしこと、ほとんど歴挙にいとまあらず、正盛の光栄、真に大なりというべし」。

正信、幕政を非難して狂気廃絶

慶安4年8月、殉死した正盛の遺領を長男の正信が就封した。正盛の男子は5人で、2男の安政はすでに脇坂淡路守家に養子となっていたので、3男正俊に新田1万石を分知、4男正英に5千石、5男勝直に3千石をそれぞれ分与えた。正俊はのち、古河16万石、大老にすすんだ後佐倉藩の藩祖で、正英も堀田佐野藩を興している。

正信は気性がはげしく、精神分裂症ぎみなどころもあったようである。父の殉死にともない当然自らも幕府の重臣に取立てられるという期待があった。ところがいつまでたっても登用されない。いらだちが過激な行動に走らせたのだろうか。万治3年10月、將軍補佐役の保科正之と老中阿部忠秋に幕政批判の意見書を提出して、単身佐倉に帰ってしまった。参勤中の無断帰国は謀叛とみなされる。当然幕法違反である。正信ときに36才であった。意見書の内容は家綱が4代將軍に就任して10年たったが、將軍を補佐すべきものに人をえず、悪政のため人々は疲弊、幕臣は困窮しているとし、松平信綱個人を攻撃している箇所が多かったという。意見書はさらに旗本や御家人救済のため、自らの領地を幕府に返上したいとまとめた。幕府は父正盛の功績を配慮、家族縁者に罪がおよばないように狂人として処分した。

『徳川実記』は「(將軍家綱が)かの上書台覧あるところ、いとまも申しこわずして封地に行き、かつ申書もまた所用せらるべきなし。よりに嚴重のご沙汰におよばるべしといえども、父正盛のことおぼしめされ所領を没収し、弟脇坂中務少輔安政にめじあずけられる」。

正信のその後の生涯も波瀾に富んだものであった。脇坂家の飯田配所に11年間をすごしたあと、国替えにともなって酒井小浜藩に預替えとなったが、このとき配所を拔出し京都の清水寺に参詣したことが表ざたになって蜂須賀阿波藩に再度預替えとなった。延宝8年、4代將軍家綱の訃報に接して訣をもって自害。2代連続での殉死であった。享年50才。遺骸は江戸に入ることを許され、浅草下屋敷に接した寿1丁目⑩番地の金蔵寺に埋葬されたが、墓石塔は震災、戦災の被害を受けて残っていない。

正信の家臣は1か月以内に佐倉城下を立退くこととされたが、領内にとどまることは自由。うち何人かは正信の配所に同行し、また、弟正俊などに召変えられたものもあった。堀田家の名跡は正信の嫡子正休が1万俵で継承、吉井1万石をへて子孫は宮川1万3千石で明治維新を迎えた。

正信の時代、圧政に苦しんだ農民を救おうと佐倉惣五郎が江戸に直訴して死罪となった義民伝が知られている。惣五郎伝説は『地藏堂通夜物語』『堀田騒動記』『佐倉義民伝』などが原典だが内容はまちまち。老中に就任した正信はワイロが多く、役人もこれにならって領民にせびり、重税を科した。そのため農家は困窮し、先祖伝来の田畑や山林を売払い他国へ離散するようになった。困った名主らは相談、幕府に訴えることを決める。惣五郎は密かに国を拔出し、ついに上野寛永寺に参詣する將軍家綱に直訴をはたす。訴状は正信に下げ渡され、正信は面目を失って租税の減免を行なうが、明暦元年2月、惣五郎夫婦と男子4人は直訴の罪で処刑、家は欠所となった。その後、惣五郎のたたりか夫妻は乱心、城地も没収されるというのがほぼ共通のストーリー。幕末の嘉永4年、芝居として上演され、判官びいきの庶民の気持ちをつかんで有名になった。『人物叢書・佐倉惣五郎』などによれば、公津村に惣五郎が実在し、子供とともに刑死されたこと、正信が寄進した将門山鳥居の祠が惣五の宮と称され、後の堀田家が将門山で祭祀や供養を行なったことは事実だが、創作が多く史実とはいえないという。

明暦3年1月、明暦の大火は江戸全市を焼失した。『東京市史稿』には、火災2日目の19日午上刻(正午ころ)新鷹匠町から出火。折からの烈風にのった火は、代官町、雉子橋、一ツ橋に伸び、城内の徳川綱重、綱吉邸を焼いた。「午下刻(午後1時ころ)ご天守より火入る。ご本丸、2の丸残らず、神田橋内、大名小路、麴町、桜田筋炎上。(將軍家綱を)西の丸へ渡御申上げる。類火の面々。(中略=西の丸下)阿部豊後守忠秋、堀田上野介正信、稲葉美濃守正則、水野監物忠膳」とある。午後1時ころ天

守閣が焼け、同じ時刻に和田蔵門内の堀田藩上屋敷も焼失していることが分かる。

明暦3年3月、大火後の割替えがあり「西角切り、東方に替地下さる」（明暦日記）。正信邸は、このとき旧邸から若干の敷地移動があったものと思われる。上屋敷は拝領屋敷だが、土地を預かるだけで屋敷内の普請や造作は大名の負担であった。堀田家でもさっそく再建工事を起こしたが、その経費は莫大であった。上屋敷は慶安4年正信の改易をもって没収。以後、阿部正春、牧野成貞、稲葉正通などの老中役屋敷をへて松平会津藩邸のとき明治維新を迎えた。

堀田出羽守、加賀守正盛。生没＝慶長13年、慶安4年4月。菩提所＝台東区上野寛永寺内現龍院、品川区北品川東海寺。在任＝寛永19年7月～慶安4年4月。役職＝寛永10年3月～6人衆（若年寄）、寛永12年3月～老中。石高＝11万石。領地＝佐倉周辺

堀田上野介正信。生没＝寛永8年～延宝8年5月。菩提所＝台東区浅草金蔵寺。在任＝慶安4年8月～万治3年11月。石高＝11万石。領地＝佐倉周辺

参考）前堀田佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

和田倉御門内上屋敷＊慶長年中＝鳥居忠政、石川康通。寛永ころ＝井上正利。寛永後期ころ～万治3年＝堀田正盛、正信。～天和2年＝阿部正春。～元禄10年＝牧野成貞、成春。～13年＝小笠原長重。

～宝永6年＝稲葉正通。～慶応4年＝松平正容、容貞、容のぶ、容住、容衆、容敬、容保
浅草下屋敷＊寛永13年～明治維新＝堀田宮川藩下屋敷（寛文2年、享保17年大幅削減）

防災都市計画で江戸屋敷に規制

明暦の大火の被害のあまりもの大きさにこりた幕府は、ただちに大火後の復興計画に取りかかった。なにしろ想像を絶した大災害だけに対策も名案が浮かばない。とりあえず北条正房、渡辺信貞に詳細な市街実測を命じ、防災都市計画が練られた。吹上郭にあった御3家邸は、本丸近くに広大な邸宅があれば飛火しやすいということで火除地とされ、密集した大手前郭や丸の内郭は屋敷地や道路をひろげて人口密度を下げた。市街地を拡大するため周辺にあった寺社を郊外に移し、神田川や日本橋川にそって防火堤や火除地をひらき盛り場に広小路を作った。消防体制も強化された。半蔵門外、飯田町、御茶の水、市ヶ谷、代官町などに定火消を設置。旗本からとくに家柄や資質のすぐれた若者を選んでその長に任命した。実際の消火活動はガエンと呼ばれた火消し人足が当たった。ガエンはクリカラモンモンを背負ってわがもの顔で町中をねり歩き、ゆすりたかりの嫌われ者であったが、イザ火事場では下帯1本で火の中に飛込む命知らずが多かった。

江戸屋敷建築にも制約が加わる。明暦大火の翌4年1月、幕府は諸大名、旗本に対して、本格再建を控え、当分小屋掛けかろき作事を指示、2階門、3間梁など華麗な門、御殿の建造を禁止した。ひきつづく規制で制約がますますエスカレートする。寛文8年に長屋塀下石垣、塀腰板、付書院、長押などを、貞享年間に屋敷門型式を、元禄6年には大名、旗本屋敷地規模の定めを発令している。

一方、明暦の大火以後、諸大名に広大な屋敷地を与えられたことが下屋敷の発達、とりわけ大名庭園の整備につながっていく。明暦以前の大名庭園は徳川水戸邸、徳川尾張邸、前田利常邸、蒲生忠郷邸、堀田正盛邸などが知られるが、まだ大規模、豪華なものではなかった。明暦の大火は上中下屋敷制度を確立、その数は千邸、旗本を含めた武家地は江戸市中の8割にもおよんだ。それぞれが大小さまざまな庭園をもったが、下屋敷のそれはとくに贅をこらした。茶事や園遊のために広大な庭園には泉水をしつらい数寄屋を設けた。幕府体制の安定化とともに各藩の庭園整備がすすみ、水戸小石川後楽園、尾張戸山荘、柳沢吉保六義園、徳川綱重浜離宮、松平定信浴恩園などの完成された名園が誕生している。

松平大給家、6万石で就封

堀田正信改易後の佐倉は三たび公領とされ、関口作左衛門、岡上次郎兵衛、深谷吉政が代官を勤めた。岡上氏は天正18年、家康江戸入り以来3代の代官だが、のちの貞享4年、村境騒動の取扱いに私曲が

あったとして切腹。深谷氏は小田原北条氏没落のあと家康につかえ父盛吉のとき2百俵で代官となり、甲府綱重付きの代官をつとめた。吉政が父遺領を継ぎ、弟盛忠も甲府代官となるが、綱重の子家宣が6代将軍に就任するにおよんで栄進した。

4代将軍家綱の寛文元年閏8月、松平乗久が6万石で就封、佐倉は4か月ぶりに新領主を迎えた。松平大給家は18松平の1つで、家康3祖の孫乗元が大給に居住して大給家を興したのがはじまり。家乗が家康の江戸入りにしたがって1万石をえ、父乗寿のとき幼少の将軍世子、家綱に付属されて老中にすすんだ。家光が48才で逝去したとき家綱は11才であったが、生来の病弱体質で将軍就任後もしばらく女だけの奥で育てられた。乗寿は3代将軍時代の老中、酒井忠勝、松平信綱、阿部忠秋らに加わる形で幕政に参画、この間岩村2万石、浜松3万5千石、館林6万石と栄進。承応3年、51才、現職で病死するまでの間、家綱に最も近い側近として仕えた。

乗久は寛永10年、乗寿の長男として誕生、父の逝去にともなって5万5千石の遺領をついだ。家綱のおぼえもめでたく、寛文元年5千石の加増をえて佐倉に栄転となった。乗久は在封18年、延宝6年1月再び1万3千石の加増をえて唐津7万3千石に転じ、大給家はその後老中にすすんだ孫乗邑のとき再び佐倉復帰をはたすことになる。

大給家の江戸上屋敷は大手前郭の神田橋御門内、千代田区大手町1丁目②、③、佐倉城の創設者・土井利勝邸の跡地、現在の手町合同庁舎2、三井生命ビル一部などの一角にあたる。明暦大火のとき、①番地協和太平洋ビルと大手センタービルの地においた上屋敷を焼失、大火後の割替えて土井邸跡地の大半を拝領した。元禄6年10月まで、20年後跡地を拝領した酒井小浜藩の『神田橋御殿屋敷絵図』が小浜市立図書館に保存され、藩主、藩士の生活ぶりをうかがうことができる。北側外濠の方が正面で、右手の表御門は5間1戸、軒が少し飛出ている。あるいは薬医門でもあろうか。表門を入って庭風の空間があり表御殿に入る。広間、溜の間、時計の間、台所など30室ほど、西側が大書院、小書院、南側奥まったあたりに藩主が居住したお座の間、居間があり、庭園が作られ池泉がある。中央やや左側の台所門側は奥御殿で正室の住む居間を中心に次の間、2の間、3の間、対面所とつづく。屋敷周囲は長屋が囲み、東側には上級藩士住居、役向者長屋などがある。表奥をあわせた役所と藩主居住区が全体の80%で敷地いっぱい建物にひしめく感じがする。典型的な大名上屋敷の姿を描いている。

松平大給和泉守乗久。生没=寛永10年2月、貞享3年7月。菩提所=港区虎の門天徳寺。在任=寛文元年閏8月~延宝6年1月。石高=6万石。領地=下総国印旛郡98か村、相馬郡35か村、埴生郡33か村、香取郡31か村、千葉郡18か村、葛飾村18か村、匝瑳郡7か村、常陸国筑波郡25か村、上総国山辺郡13か村、武射郡2か村

参考) 松平大給佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷
神田橋御門内上屋敷*前出。土井利勝邸参照

大久保忠朝老中、華ひらく元禄絵巻

病弱だった4代将軍家綱は延宝8年5月に逝去、継嗣騒動はあったが、5代将軍には弟の綱吉が就任して元禄時代を迎える。江戸幕府設立後百年をへた元禄時代は、すでに戦がなくなって久しく、武士にも町人にも農民にも平和は当然のように考えられていた。江戸は急激に発展し、人口はすでに100万を数えたという。消費は拡大し、貨幣経済がすすんだ。佐倉藩もまた、大久保、稲葉、松平大給と老中家が就封、華麗に繰り広げられた元禄文化のなかに絢爛たる絵巻を演出するのであった。

松平乗久後の佐倉は延宝6年、堀田家改易以来27年ぶりに老中の大久保忠朝を迎えた。大久保家は藤原氏の流れで関白道兼の後胤からでる。9代康藤のとき松平家に仕え、忠世が家康の重臣となった。譜代最大の家柄で、嫡子忠隣が家康の江戸入りにしたがって小田原6万5千石にすすんだが、武断派として家康の謀臣本多正信と対立。大久保長安事件、自らの謀叛の噂がひろがって配流となった。

大久保家は孫・忠職の私市2万石に引継がれたが、加納3万石、明石7万石をへて唐津8万3千石に復帰する。忠朝は寛永9年、忠隣の子の2男に生まれたが、寛文10年、忠職の末期に養子となった。幼きから4代將軍家綱に近侍し、つづく5代將軍綱吉時代も恩寵をえて出世街道を歩む。九州の諸大名には国防という任務があり、幕府の要職につけない決まりであったが、老中にすすんだ翌延宝6年佐倉に転封、1万石の加増となった。先代將軍とのかかわりから家綱葬儀警護、家綱廟塔造宮総奉行、家綱33回忌奉行などを勤め、佐倉勤務は8年、貞享3年、忠職以来72年ぶりに小田原復帰をはたした。隠居後の正徳2年9月逝去。長寿の81才であった。世田谷区太子堂4丁目⑤番地、教養院の小田原藩墓所の一際大きな五輪塔が忠朝の墓になる。

大久保家の江戸屋敷は上屋敷が西の丸下の老中お役屋敷で、下屋敷は芝増上寺海手にあった。西の丸下の役屋敷は千代田区皇居外苑②の2重橋前交差点あたり。慶長時代、高力忠房、三浦重次が居住した。延宝5年8月、老中就任にともなって永井伊賀守、久世大和守の2邸を拝領。あわせて7,288坪。元禄元年11月、三枝摂津守邸を添地、6年12月、御成御殿建築のため隣接する曾我播磨守邸と道路敷を添地として拝領した。忠増、忠方とつづいた正徳4年9月まで。

綱吉のお成り好きは有名。貞享5年から宝永5年までの20年間で合計148回をかぞえるという。お成り先と回数を『江戸城を読む』に拾うと、ダントツの1位が側用人から大老にすすんだ柳沢吉保で58回、2位が側用人の牧野成貞29回、3位同じく側用人・松平輝貞25回と綱吉中後期の政治姿勢を物語っている。ついで4位が本庄宗資11回、5位黒田直邦4回。大久保忠朝と戸田忠昌、甲府綱豊、土屋政直などは2回であった。

小田原移封後、大久保家お成りの模様が『寛政重修諸家譜』にある。「7年2月みそか、常憲院殿（綱吉）、忠朝が邸に渡御のとき大学三綱領を講じさせたまを拝聴し、正宗のお刀および時服30領、馬1疋をたまひ、また忠朝、論語を講じてお手づから松風と名づけられたる文琳の茶入れを恩賜あり。このとき家族および親戚家臣なども台顔を拝し賜りあり。忠朝も山城国行の刀および綿300把、馬1疋たてまつり、また一文字の刀、松風の茶壺、ご書棚などを献じ、家族もまたものをたてまつる」。

「ところで、献上品の1つとして忠朝が書棚を差上げているのはなかなか含蓄に富んでいる。何しろ綱吉の儒学癖は相当なものであった。この日も、綱吉は大学三綱領を講義して居並ぶ者に聞かせ、忠朝には論語の講義を命じているのである。これは別の折のことではあるが、綱吉に御前講義を命ぜられて忠朝の次に講釈した阿部豊後守が「どうでした」と聞いたところ、同僚たちは「上手でしたよ」と答えたが忠朝ばかりは扇をバタバタさせ、大汗を拭きふき「私もこりごりしたものですから、豊後殿もさぞや難儀のことだろう。もし間違いでもしたらどうしようと手に汗を握っているばかりでした」といったというのである」（旧芝離宮庭園）。上屋敷跡地は引続き老中役屋敷とされ、のちに佐倉藩主となった松平乗邑、堀田正亮や鳥居忠意、土井利位、久世広周らの邸地となった。

潮入りの芝離宮庭園今に伝わる

忠朝の芝増上寺海手下屋敷拝領は延宝6年2月で、坪数は10,378坪であった。JR山手線・浜松町駅新橋側出口を下車、ガードをわたった海側隣の港区浜松町2丁目④番地で、現在は旧芝離宮恩賜庭園になっている。この先、5百メートルが竹橋棧橋だが、百余年の昔はJR線から海。砂浜の海岸がつづいた。寛永9年の『豊島郡江戸庄図』にアシと丹頂鶴があり、明暦3年の『新添江戸図』は海中で、漁師が船で網を入れている姿も描かれている。このあたり、波静かのどかな海岸線だが、江戸はじめての將軍家狩場でもあった。忠朝はここに邸地を拝領、堀割をして石垣をつんでいる。南北西の3方が入船で東側は海。北西隅にかけた土橋がつないだ。はじめ島の西南隅に1,452坪の山崎勘解由邸があっ

たが宝永4年添地拝領、元禄9年、海側水面1,890坪、天明2年、入船の一部800坪を添地したので最終坪数は14,778坪余になった。

現存する旧芝離宮恩賜庭園は大久保邸の遺構をよく残している。地形はおおむね旧屋敷跡で、西側の1割ほどを新幹線々路敷に、北東と西南の端一部を民間地やバレーボールコートとしたほか、庭園部分がそっくり保存されている。正面入口前の児童遊園の一部が掘割りされ、東側の倉庫や会社はすべて江戸湾だった。200円の入園料を払って入ると発券所を兼ねた事務所前に藤棚がある。このあたりが御殿跡で役所兼大名居屋敷、殿様とその家族が居住した。下屋敷から上屋敷に唱替えあと、現存する「大久保加賀守芝金杉上屋敷之図」によるとその構成は表と奥にわかれ建坪は千坪ほどになる。JR敷地に取込まれたあたりとモノレール側は長屋が連なり、庭園以外、建物が隙間なく埋められた。

突然、目の前に大庭園と大泉水が開ける。かつて楽寿園とよばれた名園で、江戸湾の潮水を取込んだ潮入りの池として知られている。「京都のように背後に山をひかえた土地は水が豊富であったが、江戸は当初から水不足であった。飲料水の確保にさえ苦勞した江戸では、池泉を設けるのにそれなりの工夫を必要としたのである。隅田川に沿う庭園、あるいは品川の海に接する庭園では海水の導入という方法を採用し、これが江戸庭園の特徴ともなったのである。潮入りの池の技法は潮の干満によって景観を様々に変化させる効果を生んだ。この庭もその典型であるが、惜しいかな、海とのつながりを絶たれたいまは、潮の干満による変化と、池水の自然浄化は望むことはできなくなっている。」ここからみる景観は大久保家上屋敷の時代に描かれた絵図の視点とほぼ同じである。正面には浮島を前にして中島がみごとな石組をみせ、右手には西湖堤が端整な姿をみせている。絵図の遠景にみられた白帆のかわりに自動車がビルの谷間にみえる高架高速道路の上をせわしなく右往左往している」(旧芝離宮庭園)。

大泉水をぐるりと一周する周遊式遊園だが、中島へは3方から橋がかかって対岸にも渡れる。橋は湖の水位で景観が変化したという。ギヤマン障子を使ったビードロ茶屋が知られ、馬場や弓場、鴨場、つり場も作られた。芝生地、築山、枯滝、珍奇な石、趣のある松などが旧態をよく残している。大久保邸はのちに佐倉藩の堀田正愛上屋敷と変わり、ご3卿、ご3家下屋敷のとき明治維新を迎えた。

大久保出羽守、加賀守忠朝。生没=寛永9年11月、正徳2年9月。菩提所=世田谷区太子堂教学院。在任=延宝6年1月~貞享3年1月。役職=延宝5年7月~元禄11年2月老中。石高=8万3千石。領地=下総国佐倉周辺

参考)大久保佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

西の丸下老中役屋敷*慶長年中~寛永8年=三浦重次、重勝。寛永ころ~明暦4年=内田正信、正象。~天和元年=堀田正俊。~3年=内藤重頼。~延宝5年=久世重之。慶長年中~寛永15年=高力忠房。~万治元年ころ=加賀爪直澄。万治元年~延宝5年=永井尚庸。延宝5年~正徳4年=大久保忠朝、忠増、忠方。~享保8年=井上正峯、正之。~延享2年=松平乗邑。~宝暦11年=堀田正亮。12年~明和元年=井上正経。~6年=阿部正右。~安永9年=阿部正充。天明元年~7年=鳥居忠意。~8年=阿部正倫。~文化元年=松平信明。~天保8年=青山忠裕、忠良。~9年=松平信順。~15年=土井利位。~安政4年=牧野忠雅。~5年=松平忠優。~万延元年=間部詮勝。~文久2年=久世広周。~慶応2年=水野忠精。~同年=稲葉正邦

芝増上寺海手下屋敷*延宝6年~正徳4年=大久保下屋敷。~文政元年=大久保忠方、忠興、忠由、忠頭、忠真。~4年=堀田正攻。~6年=御用屋敷。~弘化3年=清水卿下屋敷。~明治4年=紀伊卿下屋敷

ひきつづく老中城、戸田忠昌

老中大久保忠朝が小田原城に復帰した5代將軍綱吉下の貞享3年から16年間、戸田忠昌、忠真父子が佐倉城主となった。戸田氏は忠治のとき家康の関東入府にしたがい、尊次、忠能が田原1万1千石を領有した。忠昌は忠能の弟戸田忠治の長男であったが、忠能に子がなかったので養嗣子に迎えられた。寺社奉行、京都所司代のエリートコースを歩んで天和元年、老中昇進をはたす。「土芥こうしゅう記」は「その立身のしだい、例えに龍の雲にあがるたりがごとし」と書く。將軍家綱、綱吉の信任があつたたびたび加増の結果、5万5千石の岩槻城主をへて佐倉7万1千石に栄進となった。

綱吉の初政で、幕閣は將軍就任に貢献のあった大老・堀田正俊、老中・大久保忠朝、阿部正武、老中待遇の側用人が館林時代の家老牧野成貞の布陣であった。綱吉は堀田正俊の補佐をえて綱紀を改革し、一時は天和の治とたたえられた善政を布いた。貞享元年8月、堀田正俊殺傷事件が起こる。忠昌は同役の大久保、阿部とともにその場に駆けつけ、犯人の稲葉正休を討ちはたした。正俊の横死を契機に綱吉の政治は大きな転機を迎える。側用人の牧野成貞、柳沢吉保、松平輝貞などを重用し、仏教にのめりこんでいく。生母桂昌院や僧侶隆光のいいなりに世界に例をみない悪法「生類哀れみの令」を連発、華美な生活に耽って寺院の造営に巨費を投じた。財政は窮乏し富士山の大噴火で世情は騒然した。人々は元禄の繁栄の中に、自然災害におののき悪政に泣いた。

政治は上意下達、側用人の柳沢吉保を通じて行なわれた。ゴマすりの代表と悪口された柳沢だが、綱吉のような個性の強い独裁者には、素直にしたがうのが一番と考えたのだろう。逆に、柳沢や牧野のような家臣でなければつとまらなかったのかもしれない。吉保は1千6百石の小姓番頭から甲府15万石城主に栄進、大老となった。忠昌はこんな時代背景のなか、綱吉政権も末期の元禄12年9月、老中現職のまま逝去。行年68才であった。墓所は中野区上高田丁目⑦番地の松源寺で唐破風型墓石が3基並んでいる。うち2基が忠昌夫妻で、1基が歴代藩主の合祀になっている。

戸田家の役屋敷は一つ橋門内にあった。千代田区大手町1丁目④番地と③番地の一部、丸紅ビル、竹橋合同ビル、気象庁の一画にあたる。寛永時代、知恵伊豆とうたわれた老中・松平信綱の旧邸。老中時代の堀田正俊が半年ほど居住し、のちご3卿の一つ橋邸となった。天和2年4月拝領。元禄6年12月、綱吉のお成りに備えて、隣接する③番地の大手町合同庁舎3の地、小姓5千俵、山名泰豊邸とその間の道路敷を添地拝領してお成り御殿を造営した。綱吉の上屋敷お成りは元禄7年、3月25日と8月9日の2回あった。綱吉自筆の色紙と茶入などを拝領（寛政重修諸家譜）。このときのご褒美かどうか、4月21日に河内国内で1万石の加増があった。

戸田家の北隣は松平保科正容邸、東隣は柳沢吉保邸で、裏側一つ橋門の外は護持院であった。護持院は綱吉とその母・桂昌院の信任をえた知足院の住職・隆光がおねだりした官製の大伽藍。徳松死後、綱吉に子供が生まれないのは前世における殺生の報いで、殺生を慎み生類を哀れまねばならないと説いた。護持院には、綱吉、桂昌院以下幕閣、大奥女性らが足しげく参詣したが子供はできず、加持祈禱とともに生類哀れみの令がますますエスカレートした。

戸田家では嫡子の忠真も早くから綱吉の引立てを受けた。部屋住み時代の貞享2年に奏者番をつとめて寺社奉行にすすみ、相馬、豊田などに1万石を拝領している。奏者番は大名や旗本が將軍に謁見するとき取次、進物を披露するとともに殿中での礼式を取扱い、寺社奉行は全国の寺社を取締り、訴訟裁判の事務を担当した。元禄12年、父忠昌死去にともなって遺領のうち6万7千余石を相続。弟の忠章に3千2百石と新田3千8百石を分知、世子時代の1万石を収められた。元禄14年6月、佐倉城を老中稲葉正往に譲って高田に所替えとなるが、のちに加増をえて親子2代老中にすすんだ。

忠真の世子上屋敷は虎の門にあった。千代田区霞が関1丁目③番地の郵政省本庁舎、霞が関官庁街の大蔵省真ん前である。貞享4年5月、柳生但馬守の上屋敷跡地1,987.6坪を拝領したが、手狭のため元禄8年5月にはいったん千代田区富士見町2丁目⑦、⑧と⑥番地のJR飯田橋駅裏側2,597坪を拝領するが、移転には至らなかったらしい。2か月ほどで森川紀伊守に再賜邸された。元禄10年5月改めて鍛冶橋門内、東京駅にほど近い千代田区丸の内2丁目⑦番地の三菱銀行本店の一画3,692坪、松平遠江守邸を拝領。のちに6代將軍家宣の弟・松平清武が居住、慶応4年には鳥羽伏見の戦いに敗れた新選組、最後の屯所とされた。同じ藩で上屋敷が同時に2邸置かれることはめずらしいが、高齢になった幕閣の世子を、奏者番や若年寄に登用するケースは多く、幕府は役高と役屋敷を与えた。

就封後の元禄13年12月、父の拝領した一ツ橋門内老中役屋敷と鍛冶橋門内邸を上地、数寄屋橋門内の千代田区有楽町1丁目⑤、⑧番地パークビル、大正生命、丸の内署の一画、稲葉丹波守邸の上げ屋敷4、129坪に再度移転した。箱庭政策ともよばれる江戸屋敷の拝領制度は、役職就任に合わせて、江戸城に近い官邸を与えるが、離任と同時に没収、次の担当者に交換させた。忠真は將軍家継下の正徳4年、老中就任で再び一ツ橋の老中役屋敷に復帰、跡地は秋元川越藩5万石のあと、江戸中後期、本多岡崎藩が113年、7代にわたって上屋敷を構えた。

戸田家の下屋敷は貞享元年8月から浜町にあった。現在の中央区日本橋蛸殻町2丁目⑩番地。区立有馬小学校、幼稚園、蛸殻町公園などの一画で4、700坪あった。元禄6年ころ、弟忠章の屋敷地として譲渡したらしく、清水宮内卿下屋敷をへて、松平三河守下屋敷のとき明治維新を迎えている。公園入口の『蛸殻町公園由来記』には「この蛸殻町公園は、江戸時代の切絵図によると周囲を堀割に囲まれた武家地で、大名の下屋敷が立並ぶ静かな落ち着いた町並であったと思われます。蛸殻町公園のあるこの場所も江戸時代、松平三河守（津山藩主）の下屋敷があったところで、その後、京都出身の豪商・杉村甚兵衛氏の屋敷となり、現在、公園内にある大イチョウも当時かなりの大木として育っていました」。

元禄6年8月深川高橋際拝領。この先、隅田川をこえた江東区森下3丁目⑫、⑬番地などの一画で、区立の森下文化センター高森公園を中心に、倉庫やマンションなどが立並んでいる。かつて小名木川に接した蔵地で水運を利用した舟の上り下りで賑わった所である。屋敷拝領記録によれば、関東郡代・伊奈半十郎支配地。東西83間、南北120、5間、敷地面積が1万坪。奥田八郎右衛門など3人が立会って、境界杭を確認したが、図面のとおりに間違いありませんでした、としている。関係者が集まって予め杭打ちされた測量地を計測する。測量機器の進歩はあるが、今日のそれとあまり変わっていない。

戸田伊賀守、越前守、山城守忠昌。生没=寛永9年、元禄12年9月。菩提所=新宿区松源寺。在任=貞享3年1月～元禄12年9月。役職=老中。石高=6万1千石、元禄7年～7万1千石。領地=佐倉周辺、河内国内

戸田日向守、能登守、山城守忠真。生没=慶安4年11月、享保14年10月。菩提所=新宿区松源寺、宇都宮市英巖寺。在任=元禄12年閏9月～元禄14年6月。石高=6万7千8百石。領地=同じ

参考) 戸田佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

一ツ橋御門内老中役屋敷*慶長年中=蔵地など。寛永4年～延宝8年=松平信綱、信輝。～9年=堀田正俊。天和2年～元禄13年=戸田忠昌、忠真。～正徳元年=小笠原長重。～4年=阿部正喬。～享保15年=戸田忠真、忠余。～元文5年=松平輝貞。～慶応4年=一ツ橋宗尹、治済、斉敦、斉礼、斉位、慶昌、慶寿、昌丸、慶喜、茂栄

虎の門御内世子上屋敷*寛永ころ～貞享4年=柳生宗矩、三厳、宗冬、宗在。～元禄10年=戸田忠真。～15年=神保元茂。～宝暦11年=鍋島小坡藩中屋敷。～文政9年=毛利萩藩中屋敷。文政10年～明治維新=御用屋敷

鍛冶橋御門内世子上屋敷*慶長～元禄10年=松平忠頼、忠重、忠慎、忠喬。～13年=戸田忠真。宝永3年～宝暦3年=松平清武。～天明7年=松平信復、信礼、信明。～文化3年=水野忠昭。～文政11年=堀親しげ。～天保はじめ=京極高備。～嘉永4年=堀田正衡。～安政4年=鳥居忠挙。～5年=本郷泰固。文久元年=稲垣太篤、太清。～2年=加納久徴。元治元年=松平乗膜。～慶応元年=土岐頼之。～2年=稲葉正巳。3年=秋月種樹。4年=新選組屯所

牛込御門内世子上屋敷*正保ころ～元禄8年=稲垣重昭、重富。同年=戸田忠真。～宝永7年=森川俊胤。～安永6年=米倉昌照、忠仰、里短、昌晴。～天明8年=小堀政方。～明治維新=米倉昌賢、昌由、昌俊、昌寿

数寄屋橋御門内上屋敷*慶長9年ころ～19年=奥平家昌。～延宝7年=奥平忠昌、昌能。～元禄元年=土屋政直。～13年=稲葉正往。～正徳4年=戸田忠真。～延享4年=秋元喬房、喬求。～万延元年=本多忠良、忠ひさ、忠みつ、忠肅、忠典、忠顯、忠考。～文久2年=本多忠紀。～3年=有馬道純。～元治元年=松平信義。同年=本多忠紀。～慶応3年=永井尚服

浜町下屋敷*寛永ころ～寛文ころ=阿部福山藩下屋敷。～貞享元年=阿部佐貫藩下屋敷。～元禄6年ころ=戸田藩下屋敷。～宝暦11年=戸田忠章。～安政2年=清水卿下屋敷。～明治維新=松平津山藩下屋敷

深川高橋際下屋敷*江戸はじめ～元禄6年=伊奈半十郎支配地。～延享3年=戸田下屋敷。～明治維新=田安卿下屋敷

春日局の縁に連なった稲葉正往

元禄14年から佐倉城主は10万2千石の老中、稲葉正往を迎える。稲葉氏は越智氏の流れで一鉄の2男娘ムコからはじまる。正成は織田信長、豊臣秀吉につかえ、小早川秀秋の家老を勤めたあと家康についた。正成の妻は3代将軍家光の乳母をつとめた春日局で、3男の正勝が江戸城に上がって家光に付けられたが、この正勝が春日局の縁につらなって異例の出世をとげる。老中にすすみ、柿岡2万石、真岡4万石をへて小田原8万5千石に栄進している。

次の正則も老中で、正往はその長男に生まれた。世子時代の延宝9年に寺社奉行、京都所司代をつとめて3万石を拝領。天和3年、父の隠居にともなって高田10万2千石を継承、3万石は収められた。寺社奉行、京都所司代、大阪城留守居役をへて、元禄14年1月に老中にすすむ。佐倉への栄進5か月前のことだが、就任早々の3月14日に浅野長矩が殿中松の廊下において吉良義央に刃傷におよんだ。年賀恒例の勅使、院使はすでに10日夜には辰の口の伝奏屋敷に到着。12日に天皇、上皇からの年始の詔を将軍に伝達、13日に城内での饗応も受けて、この日は帰京挨拶と答礼のための登城日であった。ちょうど勅使、院使が玄関に到着したときに事件が起こった。吉良に切付けた浅野は梶川与曾兵衛らに取押さえられ、綱吉への報告は沐浴後、装束を改めるのを待った側用人の柳沢吉保から行なわれた。将軍の勅使、院使との対面は、会場を白書院から黒書院に改め、饗応役も佐倉城主の戸田忠真に変わった程度で予定どおりに行なわれた。赤穂義士伝に老中の稲葉正通が深く関連している。刃傷事件直後に綱吉は全老中を招集した。集まった老中は阿部正武、土屋政直、小笠原長重、秋元喬知に正通を加えた5人。しかし、綱吉の意思とは反対に浅野への同情論も出る。綱吉は不興をあらわに席をたち、改めて側用人の柳沢に浅野の切腹を指示したという。

翌15年12月14日の討入り時は月番老中にあたった。吉良家から討入りの報告を受けた正通は泉岳寺の浪士らの処置を指示し、目付・阿部式部、杉田五左衛門を吉良邸に派遣した。「また、上杉家が吉良家との関係から出兵して赤穂浪士を討つようなことになれば、広島浅野本家もそのままではすませないだろう。そうすると上杉、浅野の対決ともなると面倒になる、と丹波守は高家の畠山下総守を上杉家に派遣して「浅野の家来の処理についてはすでに幕府の手にあるのだから一指だに手出しすることは幕府に謀叛することとなる。この際は軽率な行動にでないように。吉良家の喧嘩に上杉でかかって出ることはなかり」と諭告したので、浪士一同が泉岳寺にいるのがわかっていながら上杉としてはどうすることもできなかった」(赤穂義士事典)。旧主の仇を討取った大石良雄の快挙に江戸市民が酔いしれたとき、元禄の幕が静かに下ろされた。

正往は宝永元年、上野寛永寺での家綱の25回法要総奉行を花道に8月老中を退任隠居、享保元年10月江戸屋敷において逝去した。享年77才であった。正往の墓所は文京区千駄木の養源院にある。春日局の麟祥院ともかわり深い寺で、開基は稲葉正勝。藩祖夫妻など5基の墓石が残るが、正往のものは昭和20年の戦災で損傷が激しく、現在は「稲葉家累代の墓」に合祀されている。

正知は貞享2年、正往の2男として誕生。すでに長男は早世していたので、嫡子として一門の期待を担った。元禄9年12才のとき将軍綱吉に目見え、14年雁の間に伺候するように命ぜられた。目見えは一定の年代に達した世子をはじめて将軍に謁見させる儀式で、大名の採用面接試験ともいえる。また、父正往は健在だが、正知も老中世子として登城するようにとの指示で、雁の間を控え座敷として与えられた。雁の間は板倉、青山、阿部、牧野、水野といった新参譜代の詰めの間であり、稲葉氏の譜代大名としての格式が固まったともいえた。綱吉末期の宝永4年、正往の隠居にともなって10万2千石を相続、弟の正佐には新田の3千石が分知された。正知の初国入りは7年8月。大名世子は人質として江戸滞在が義務づけられたので、この日がはじめての佐倉入りとなった。正知の佐倉在藩は21年におよび

享保8年淀10万2千石に移封。このころ家臣の渡辺昌言が『総業概録』と『佐倉風土記』を、渡辺守由が『古今佐倉真佐子』を著した。江戸前期の佐倉を知る貴重な資料として高い評価がある。

正知の佐倉城主時代に徳川家は5、6、7、8代と4将軍がめまぐるしく変わった。犬公方とあだなされた5代将軍綱吉が病死したのは宝永6年1月のことであったが、実子に恵まれなかった綱吉があらかじめ兄甲府宰相綱重の子家宜を養嗣子と決めたので、混乱もなく新将軍がスタートした。家宜の最初の政策は百年間の継続を遺言された生類哀れみの令の廃止で、甲府藩から付従った側用人の間部詮房と侍講・新井白石を登用、2人は車の両輪として幕政を展開、正徳の治とよばれる善政をしいた。

家宜の治世はわずか4年、正徳3年に逝去すると満4才になったばかりの家継が7代将軍に就任した。政治は先代を継承、大奥勢力がからんだ側近政治であったが、新参の甲府グループと旧来からの幕臣が対立、確執を生ずるという事態もつづいた。折しも起こった大奥の大疑獄、絵島・生島事件がこの時代を象徴した。病弱だった幼将軍家継はわずか7才で逝去すると大奥を中心に後継騒動が起こり、生母月光院のおす紀伊吉宗が決まった。享保元年、8代将軍となった吉宗がただちに間部詮房と新井白石を解任。数々の行政改革を実行していくことになる。

正往の上屋敷は和田倉門内の老中役屋敷で、前堀田正盛の旧邸跡である。正信改易後、側用人の牧野成貞、老中小笠原長重が居住、高田時代の元禄13年12月、老中就任にともなって拝領している。西の丸坂下門、本丸内桜田門前の交通要路で、のちに松平保科正容上屋敷となった。正容は将軍秀忠の隠し子正之の直孫。正之の時代は秀忠の正式認知はなかったものの次の家光は弟として厚遇、病弱の家綱補佐役を命ぜられ、ご3家につく家柄とされた。松平家時代、安政2年の邸地書上げによると、拝領上屋敷は9、150坪あり、正往時代も同じだったものとみられる。

正知に変わった宝永6年3月、小川町の保科邸上げ屋敷に移転。現在の千代田区神田小川町2丁目の北側、②、④、⑥～⑭番地と1丁目⑧、⑩番地、本郷通りと靖国通りの交わる小川町交差点前あたりにあたる。通りに面して大きなスポーツ用品店が軒をならべ、裏側は書房、印刷店などが建ち並んでいる。津軽藩最初の江戸屋敷で3代信義のとき、藩内を2分したお家騒動が起こった。稲葉家は以後、明治はじめまでの約170年間、小川町に邸地を置いた。

中屋敷は外桜田と木挽町築地にあった。外桜田は千代田区霞が関1丁目①番地で、現在は東京検察合同庁舎になっている。江戸はじめの仙石秀久邸で、寛文9年5月、渋谷下屋敷のうち、13、917坪と桜田仙石邸60間×70坪の地、およそ4千2百坪を相対替えした。相対替えとは、本来、官有物である拝領屋敷を、当人同士の希望で交換しようというもので、等価交換が原則だが、ぴったりと合わないとき差額を金銭で補填した。2者で交換ができないときは球突き、その余波は3者、4者、ときに8者におよびこともあった。大名同士の交渉は、仲介役に旗本を立てた。知り合いの顔ききに調整役を依頼し、合意に達すると幕府へ相対替え願いを提出、幕府はほぼ無条件でこれを許可した。5月25日願出の通り許可、7月27日邸地を引渡した。

木挽町築地中屋敷は寛文元年拝領。中央区築地5丁目②番地の中央卸売市場の北半分ほどにあたる。明暦大火直後、いったん本庄に屋敷地を拝領したが、建物の建設にはいたらなかったらしい。改めて木挽町海手への地所替えを申請し、寛文元年に許可が下りた。当時の木挽町一帯は堀割をめぐらせた蔵地で伊達家、保科家、尾張家などの下屋敷がならんだが、卸売りセンターのあたりは遠浅の砂浜と海中であつたらしく、江戸市民が釣りや貝拾いに出入りしている。正往は10、160坪を拝領。翌2年2月さらに添地拝領、最終敷地面積は21、560坪であった。普請はこの年にはじまり、潮入りの池をもった庭園と江風水月楼とよばれた数寄屋を作った。享保2年1月7日、尾張町から出火、築地中屋敷を類焼。将軍家重の延享3年11月、一ツ橋卿の下屋敷に池地を含む半分以上にあたる19、400坪を相

対替え上げ地、一ツ橋家は蔵屋敷とした。寛政4年、さらに一ツ橋家は一部を松平定信下屋敷に分与、定信はここを大改造、浴恩園と名付けて老中引退後の隠居所とした。墨田区向島5-③番地の弘福寺境内に稲葉邸内におかれたというセキのじじばの石像がある。のどや痰に靈驗新たかであった。

下屋敷は渋谷。現在の渋谷区神宮前5丁目およそ33番地～50番地、渋谷1丁目の⑪～⑳番地になる。青山学院大学前の青山病院、国立総合児童センター、国際連合大学本部、区立渋谷小学校、都立児童会館、区立美竹公園などの一画にあたる。明暦3年、旗本の長谷川久三郎屋敷と相對替え取得したもので、青山下屋敷、青山別業ともいった。老中をつとめた正則の隠居所で、「青山十五境詩」には「霧湘八景、西湖十景、古今絶景なり」とある。ヒツ形をした琵琶池を中心に臥龍棚、追風埒、かん裳橋、三笠閣、風詠台などがつらな。露地の三笠閣は釘なしの茶屋造りで、元和元年、徳川家光上洛のみぎり二条城の茶屋を春日局が拝領して、江戸へ移築したものだという。敷地面積はおおよそ5万坪。稲葉家ではここを明治維新まで下屋敷とした。

稲葉丹後守正往。生没=寛永17年、享保元年10月。菩提所=文京区千駄木養源寺。在任=元禄14年6月～宝永4年8月。役職=老中。石高=10万2千石。領地=佐倉周辺
稲葉美濃守、長門守、丹後守正知。生没=貞享2年、享保14年5月。菩提所=文京区千駄木養源寺。在任=宝永4年8月～享保8年5月。石高=10万2千石。領地=佐倉周辺

参考) 稲葉佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

和田蔵御門内上屋敷*前出。堀田正盛邸参照

小川町上屋敷*寛永以前～元禄元年=津輕信枚、信義、信政。～6年=松平忠之。～宝永5年=酒井忠挙、忠相。～6年=保科正容。～慶応2年=稲葉正知、正任、正恒、正親、正益、正弘、正のぶ、正なり、正発、正守、正誼、正邦

外桜田中屋敷*慶長8年～寛文9年=仙石秀久、忠政、政俊。～享保6年=稲葉藩中屋敷。～13年=稲葉正方。～元文元年=牧野忠列。～明治維新=大岡忠相、忠宣、忠恒、忠興、忠移、忠愛、忠敬

木挽町築地中屋敷*寛文元年～明治維新=稲葉藩中屋敷

渋谷下屋敷*明暦3年～明治維新=稲葉藩下屋敷

松平乗邑、享保の改革を推進

稲葉家の後任に老中の松平乗邑が淀から入封、6万石となった。乗邑は先に佐倉城主を勤めた乗久の子乗春の長男として、貞享3年江戸屋敷で誕生した。父が元禄3年、37才の若さで亡くなったのでかぞえ6才のとき、弟乗興に5千石、次弟乗住に3千石を分知して、唐津6万石を相続。その後、鳥羽、淀城主を歴任、大阪城代をへて享保8年、8代将軍吉宗の老中に就任した。

吉宗の治世は享保の改革とよばれる行財政改革にあった。元禄以来膨大になった消費経済に歯止めをかけるため自ら質素儉約につとめ、短期、中期、長期にわたる財政再建策を次々と実行していった。その政策は上米制、足高制、5公5民制の採用、新田の開発、株仲間の育成などであったが、吉宗のなりふり構わぬ政治姿勢が乗邑たち幕閣におしつけられた。勘定奉行が語ったとされる「百姓とゴマの油は絞れば絞るほどでるものなり」がいみじくもその厳しい農民政策を物語っている。吉宗時代の幕閣は前期が勝手掛老中水野忠之を中心に戸田忠真、安藤信友と乗邑。後期は老中首座にすすんだ乗邑を中心に老中酒井忠音、松平信祝、松平輝貞、本多忠良、勘定奉行神尾春央、南町奉行大岡忠相らであった。乗邑はこれの実行部隊長として吉宗の政策遂行にあたった。徳川中興の祖と賞される吉宗の経済改革はこうして大きな成果を上げたが、乗邑がやがてその歪みのツケをただ1人背負わされることになる。

乗邑の佐倉時代はすべての期間が老中職だったことから、江戸詰めが多く国元の政治は家老を中心に勝手方用人、郡奉行、町奉行、勘定奉行にまかせた。幕府の要職にあって年貢増徴策を推進したことから地元の取立も厳格をきわめたという。

乗邑の上屋敷は西の丸下の最前列、千代田区皇居外苑①番地の2重橋前、交差点を含めた皇居正門石橋側、松の植えられた芝生地あたりにあった。江戸はじめの高力忠房、三浦重成邸跡で延宝5年以降は大

久保忠朝、忠増父子、井上正峰と老中役宅になっていた。乗邑は筆頭老中だから、さしづめ首相官邸といったところであろうか。跡地はやはり筆頭老中にすすんだ佐倉藩主の堀田正亮が継承、鳥居忠意、土井利位、間部詮勝、久世広周、稲葉正邦らが居住して、維新後は近衛5番大隊、騎兵中隊兵舎が作られた。明治16年、皇居造営工作場とされ、21年の明治新宮殿完成後は、芝張工事をへて宮城前広場、昭和23年に皇居前広場と改称されて現在にいたっている。

西の丸下は老中、若年寄ら幕閣首脳の役屋敷がつらなり、松平保科家と忍10万石の松平奥平家が一門を代表する形で邸地をおいた。明治になってからの測量図で比較的旧態をとどめているとみられる建物をみると、小規模な庭園と池が認められるものの、役所部分と藩主の居住区を中心に敷地周囲に2階長屋が囲んだ役宅がみとれる。ここは後任堀田正盛の引継ぎ記録が残っているので、細かい構成がわかる。拝領地は東面が64間、西面94間、南面51間と40間、北面が92間で7,280坪。ほかに永預かり地が1,073坪あり、あわせて8,353坪。西の丸下でも一際めだつ大きさがある。建屋と長屋、土蔵あわせた建坪は2,938坪で、畳数が4,271畳。ほかに門扉18枚、戸2,392枚、障子2,272枚、襖716枚、梯子159丁、植木511本、石280こ、石手水鉢1こ、石灯籠6こが記載され、これを間違いなく引継いだという、担当藩士の署名捺印がある。

享保12年1月、乗邑は白金村に大久保佐渡守下屋敷を拝領、中屋敷とした。現在の港区白金台4丁目④～⑫番地で白金ハイツなどの高級マンション街などになっている。南側が国立白金自然教育園となった松平高松藩の下屋敷で、北側は下渋谷村、白金村・今里村入会などに囲まれた閑静な村だった。敷地面積は6千坪で、のちに抱え屋敷およそ1万坪を取得した。「建長屋建具置植木石目録」によると門は竹扉でくぐり付きとも4枚、畳66畳、戸56本、襖13本、石大小45こ、植木は大木800本、小木数知れずとあり、庭園を備えた風流な造りだったことがうかがえる。

下屋敷は南八丁堀にあった。中央区湊1丁目③から⑥番地、2丁目①から⑨番地、3丁目①から③、⑧番地、入船1丁目④、⑤、⑧、⑨番地、2丁目⑥から⑩番地、3丁目⑦、⑧番地のあたりになろう。一帯は江戸時代はじめの埋立地で、北側と東側は江戸湾河口にのぞみ、西側と南側は堀割に面している。大名蔵地で井伊、本多家などの下屋敷が続いた。宝暦8年5月、蜂須賀徳島藩下屋敷に相對替え。文政13年の大火は蜂須賀家の土蔵13棟すべて類焼した。敷地面積は9,800坪と11,693坪としたものがある。跡地は現在、鉄砲洲小学校、鉄砲洲稲荷、鉄砲洲児童公園の一部を中心に会社、商店、マンションなどになっている。

乗邑の過酷な年貢取立は、幕府財政を潤しはしたが、農民たちを困窮の底に突き落とし、幕政への不信感を増大させていた。乗邑の行なった幕府の勝手政策は、農民町民ばかりか旗本、大奥の反発をも買う結果となっていたのである。延享2年9月、吉宗が引退、変わって家重が本丸に入った。乗邑は吉宗のすすめもあって引続き新將軍の幕閣中枢に身をおくこととなったが1か月たった10月、突然江戸屋敷に家重の上使がやってくる。その口上は江戸城出仕の停止であった。翌日、老中酒井忠恭邸に呼出しを受け、老中の罷免、蟄居、加増1万石の没収、西の丸下役屋敷の即日退去という家重からの処分を言い渡された。まさに青天の霹靂。世代交代にあたって引退か継続か進退の過ちを知らされたことだろう。乗邑は何の反論もなく甘んじて受けた。乗邑の罷免の理由はその後明らかにされていない。「寛政重修諸家譜」はかねてから権威をふるい、吉宗の戒めにも改めず、勝手な計らいが多かったとし、「徳川実記」は「そのことの仔細は、秘して伝えざれば知る者なし」すべてが闇の中に葬られた。しかし、病弱で廢人同様だった家重の將軍就任に反対し、2男の田安宗武を推した乗邑の留任は家重とその側近にとって耐えがたいことだったものに違いない。

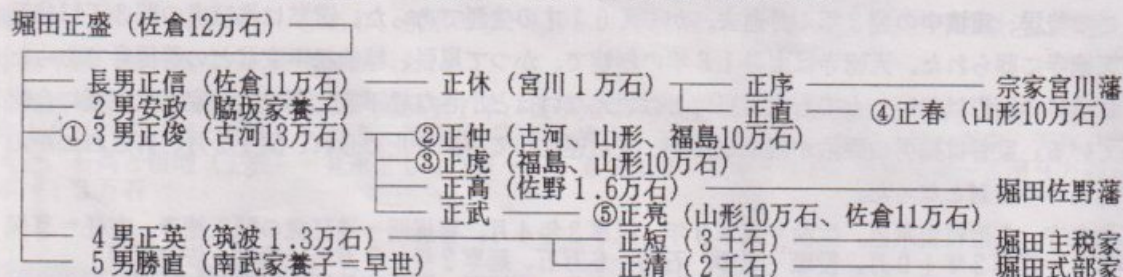
老中からの伝達は八ツ時というから現在の午後2時ころである。限られた短い時間の中で、あたふたと

引越しが行なわれた。「仕事一筋に打込んできた乗邑は本邸や別邸をもつことなく、与えられた屋敷で暮らしていたために、即刻退去の命令を受けて、裸同然に親戚の家へ転がり込んで雨露をしのいだという。幕閣一の実力者としてはあまりにも哀れな顛末であろう」（徳川15代と一族の系譜）。役宅は松平伊豆守にお預けとなったが代地が与えられず、父子は八丁掘下屋敷に仮住まいすることになる。乗邑はここで蟄居、謹慎中の翌3年4月逝去。かぞえ61才の生涯であった。遺骸は港区虎の門3丁目③番地の天徳寺に葬られた。天徳寺は慶長16年の創建で、かつて尾張、越前松平家などの菩提寺であったが今は昔日の面影はない。とても大名墓碑とは思えないほど小さな松平家之墓、大給家累代之墓に合祀されている。家督は嫡男の乗佑が継承したが、父に連座して拝調を止められ、閏12月、許されたが山形6万石への移封となった。

松平和泉守、左近将監乗邑。生没＝貞享3年、延享3年4月。菩提所＝港区虎の門天徳寺。在任＝享保8年5月～延享2年10月。役職＝老中。石高＝6万石、延享2年～7万石。領地＝佐倉周辺
松平和泉守乗佑。生没＝正徳5年9月、明和6年9月。菩提所＝岡崎市松明院。在任＝延享2年10月～3年1月。石高＝6万石。領地＝佐倉周辺
参考）松平大給佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷
西の丸下役屋敷＊前出。大久保忠朝邸参照
南八丁掘下屋敷、上屋敷＊延宝以前～延享2年＝松平大給藩下屋敷。～宝暦5年＝松平乗佑。～8年＝松平大給藩下屋敷。～明治維新＝蜂須賀徳島藩中屋敷
白金中屋敷＊宝永5年～享保12年＝大久保烏山藩下屋敷。～明治維新＝松平大給藩中屋敷

老中・堀田正亮の入城とその家系

松平乗邑失脚後、変わって佐倉藩主に迎えられたのは乗邑のあと老中首座にすすむ堀田正亮であった。堀田家は正信の乱心で取潰しとなった前堀田家と同族で、3代将軍家光に近侍した正盛の3男正俊からはじまっている。その関係は複雑なので分かりやすいよう系図にまとめた。



正俊は寛永11年生まれで正盛の3男。8才で3代将軍家光にお目見え、世子家綱の小姓にすすんだ。10才のとき家綱の命令で稲葉正則の娘と婚約、春日局の養子となり、寛永20年春日局の逝去で神奈川県内の3千石の遺領を拝領した。慶安4年には父正盛が病死、新田1万石の分知を受けて1万3千石となった。正俊は家光、家綱将軍の引立てを受けて出世街道を邁進する。寛文4年安中2万石、天和元年古河9万石に栄進、この間、若年寄をへて老中の要職にあった。当時の幕政は大老酒井忠清を頂点に稲葉正則、久世広之、土屋数直、大久保忠朝、土井利房が老中を勤めた。病弱の4代将軍家綱はいわば床の間の飾り、下馬将軍と噂された酒井忠清の専横がきわまっていた。

家綱の正室は浅宮といい、伏見宮貞清親王の姫君であったが病滅、側室も子宝に恵まれない。世継ぎをめぐる早くから後継問題が取り沙汰されていた。こうした中の延宝8年5月、家綱が原因不明の病魔に冒され、中奥に引籠もってしまった。将軍家の継嗣騒動がはじまる。候補者は家綱のすぐ下の弟綱重の子綱豊ともう一人の弟綱吉であったが、年令などから綱吉の方が有利な情勢であったという。ところが、大老の酒井忠清が思わぬ人物を担ぎだした。後西天皇の第2皇子、有栖川宮幸仁親王であった。忠清の綱吉嫌い、家綱の子を妊娠中の奥女中がいたなどともされるがその真意は計り知れない。鎌倉幕府の故事にならったとした幕府最大権力者のこの提案に一時は大勢も決したかにみえた。

このとき、幕閣にあってただ1人綱吉将軍を主張したのが正俊であった。正俊は逝去2日前、密かに家綱の病床に伺候して綱吉の養子縁組について了承をえると、即刻綱吉を江戸城に呼入れて後事を託させる。正俊独断のクーデターが成功、5代将軍綱吉が誕生することとなった。

新将軍に就任した綱吉は、酒井忠清を免職、老中も次々に退任していった。一方、綱吉擁立の功労者正俊は次第に登用され大老を命ぜられる。綱吉の初政は幕閣が精勤したことで安定期を迎える。それは堀田正俊の補佐に負うところが大きかったのは多くの史書が認める所であった。正俊は綱吉の信任をえて不正を働いた役人を処罰するなど綱紀を粛清、その期間を天和の治という。しかし、時間がたつにつれて、正俊の剛直さが綱吉に嫌われるという一面も露呈してくる。

貞享元年10月、一族でもある若年寄の堀田正休が江戸城内で正俊を刺殺。あっけない終末を迎えた。原因は私恨とも正俊の専横をいさめたともいわれて定かでない。綱吉は事件後、側用人の牧野成貞、柳沢吉保を登用、母桂昌院、僧侶隆光のいいなりに政治を私物化していった。

正俊の遺骸はいったん上野寛永寺の父正盛墓所近くに葬られたが、これが裏目に出る。寛永寺お成りの綱吉が嫌って衝立でを囲ませてしまう。綱吉にとって正俊の死はうるさい監視役がいなくなってホッとしたばかりか、その報復が孫子の代におよぶことになる。伝え聞いた堀田家では即刻台東区金蔵寺に改葬。現在は佐倉市の甚大寺堀田家墓所の中央に据えられている。大きな石塔に「不きょう院殿又新業翁大居士」と刻まれ、市教育委員会の史蹟案内表示板が、故人の功績をしっかりと伝えている。

正俊の江戸屋敷は春日局邸につながるか、遅くも慶安4年の父遺領1万石拝領時と思われるが裏付けはない。記録は万治元年これまでの西の丸下屋敷が永井伊賀守に与えられ、新たに同じ西の丸下内田長十郎邸を拝領したという『万治遺録』が初見であろう。この前年、明暦3年の大火は江戸市中を焼壊と化した。罹災記録もなく、この西の丸下邸は明暦3年図の加賀爪甲斐守邸跡地を大火後拝領した。ときに正俊、かぞえ25才であった。

西の丸下の最初の2邸は皇居外苑の皇居北側最前列で、寛文10年、手狭のため中央部最前列の本多美濃守邸を拝領、その後栄進の結果、一ツ橋の松平伊豆守邸、大老就任で酒井忠清邸を拝領した。正俊上屋敷の変遷を纏めると下記の通りであった。

明暦3ころ～万治元-5	西の丸下=千代田区皇居外苑①、2重橋前交差点周辺。明暦3年図加賀爪甲斐守邸跡地。大火後拝領か
万治元-5～延宝8-8	西の丸下=千代田区皇居外苑①、2重橋前交差点周辺。内田出羽守邸拝領
寛文10-12～" 9-1	西の丸下=千代田区皇居外苑②、中央皇居側。本多美濃守邸拝領
延宝8-8～" 9-1	一ツ橋御門内=千代田区大手町1-③、丸紅ビル、竹橋総合ビル。松平伊豆守邸拝領。御老中御役屋敷
" 9-1～貞享元-10	大手御門前=千代田区大手町1-③、三井物産ビル、三井生命ビル、日本長期信用金庫、サンワ東京ビル。酒井雅楽頭邸拝領。御老中、大老御役屋敷

正俊時代の中屋敷は浅草寿町で、父正盛下屋敷の一部とみられる。台東区寿3丁目①～⑥番地、⑪～⑭番地の一部で現在は会社、商店などが並んでいる。寛文4年12月の拝領だが、『御府内沿革図書』は延宝年間から元禄はじめ図を堀田対馬守としている。弟正英筑波1万3千石だが、相続のとき嫡子正親が認められず、弟2人が3千石と2千石の旗本に降格された。『寛政重修諸家譜』はゆえありて父の加恩の地を収められたとあり、正俊一族への処分の一貫といえよう。享保17年5月、大火後割替え、本所2ツ目戸田伊勢守邸のうちと相對替え移転。最終坪数は5,646坪であった。跡地は火除明地、小普請大的稽古場、諸向大的稽古場、黒船町続高麗屋敷拝領町家などをへて明治維新を迎えた。

下屋敷は寛文8年3月、渋谷下豊沢村に6,200坪を拝領。延宝7年12月には8,725坪の添地があり、正俊の代はおおよそ1万4千坪ほどであった。現在の渋谷区広尾4丁目の一部だが、その後下屋敷の添地や抱屋敷の取得がひんばんに行なわれており、変遷の経緯は改めて幕末期の項で詳解することにする。

堀田家12代目ご当主にあたる堀田正久氏は佐倉市長4期をつとめられた。その著書『堀田3代記』の中に正俊の下屋敷について触れている。「正俊の下屋敷は当時下渋谷村という純農村の広尾台地であって、榎、椎の巨木や、櫟、檜などの雑木が繁茂して武蔵野の面影を色濃くとどめる所であった。渋谷川の支流筈川が東の崖裾を南に流れ、南方には渋谷川の本流が西北から東に流れていた。筈川には北から筈橋、広尾橋がかかり、渋谷川の本流には、西から恵比寿橋、山下橋、天現寺橋などがかかっていた。山下橋は別名水車橋ともよばれたが、そのあたりには水車がかけられていた。渋谷川の下流は古川と呼ばれ、狸橋、古川橋から増上寺に沿って江戸湾に流れ込む。

閑静な広尾台も堀田の下屋敷と祥雲寺ができたことから、寺の門前や広尾橋あたり、堀田家の正門あたりに少しずつ民家、商家が建ちはじめた。祥雲寺の建物は江戸名所図絵にも壮大に描かれている。文政年間の火災で類焼、その後再建されたのが今日見られる堂宇であるという。この門前町は第2次大戦の折りにも罹災しなかったもので、明治、大正時代の面影を伝える商店がまだ幾分残されている。

広尾橋は今は橋はない。筈川は完全に埋められてしまったが、環状4号線から地下鉄広尾駅の所で分岐し、広尾4丁目、日赤台地の裾を北に川の蛇行の形跡をとどめた旧道となっている。その旧川の道を筈橋の方へ北上してから左に戻るように登って行く坂がある。これが堀田坂である。1メートルくらいの文で25センチ角くらいの木杭に防腐剤を塗った標木の表に堀田坂と墨書してあり、裏面に江戸時代には大名堀田家の下屋敷に向かって登る坂になっていた。昭和56年1月港区とある。堀田坂は緩い勾配

で途中右折してから真っ直ぐ日赤医療センターの横をその正門の方へつづく。(中略)

門を入ってから、中央南寄りの奥屋敷へ行く間に馬場が中央と西方の桜堤寄りとに2本とられている。さだめし馬の数も多かったであろうし、正俊が時々ここに来るのも馬で来たことであろう。車寄せには矢場もっており鉄砲も練習できた。邸内には鬱蒼とした杉、松、榎などの巨木林があり、櫟、櫟の雑木林もあり、紅葉あり、桜あり、泉水あり、起伏にも趣があった。春秋色とりどりの景色に恵まれ、小鳥や蝶、蛾、蛭などの虫も多かった」。

堀田備中守、筑前守正俊。生没=寛永11年、貞享元年8月。菩提所=佐倉市甚大寺。在任=寛永20年12月(春日局の養子)~貞享元年8月。役職=寛文10年~若年寄、延宝7年~老中、天和2年~大老。石高と領地(主要)=寛永20年~3千石、寛文4年~安中2万石、天和元年~古河9万石、2年~13万石

將軍綱吉の報復人事に泣く

正俊の遺領は嫡子正仲に相続されたが、その待遇はこれまでとは手のヒラを返した過酷な仕打ちとなった。大手町役屋敷と神田橋屋敷は没収され、就封直後の翌2年6月、領地を古河から山形に、さらに翌々3年7月再び福島へ転封となった。いずれも表高は10万石であったが実収が下回る。2年つづきの左遷は堀田藩に大きな打撃を与えることとなった。元禄7年7月病いをえて逝去、33才であった。

正仲には嗣子がなく、大宮2万石を領有、同じ年の弟正虎が養子に迎えられた。正虎は福島10万石を継承、2万石は収められた。元禄13年1月、山形10万石に復帰、ようやく堀田家にも一筋の明かりがみえはじめる。宝永6年、將軍綱吉が逝去、6代將軍の家宣、7代將軍家継が短命で、享保元年には紀州吉宗が將軍職に就任する。こえて13年遅咲きの正仲に最後のチャンスがやってきた。享保の改革を推進する吉宗からの大阪城代任命であった。正虎は正俊横死後およそ50年、堀田一族の復讐をかけて気力を振り絞って江戸を出立するが、龜山宿において力つきる。68才の生涯であった。遺骸は中仙道をへて江戸に到着、浅草日輪寺に葬られた。正仲にも嗣子がなく、家督は養子正直の嫡子正春がついだがわずか2年で病死。17才の若さであった。

正仲、正虎、正春3代と正亮のはじめ山形、福島時代の上屋敷は、神田橋、駿河台、三河町などを転々とした。その変遷は次の通りであった。

堀田正仲(古河、山形、福島10万石)

天和2-1~貞享2-3 神田橋御門内=千代田区大手町1-⑨、日本経済新聞社、経団連ビル。稲葉丹波守邸拝領。世子時代の上屋敷

貞享元-10~" 4-1 駿河台=千代田区神田淡路町1、神田小川町1-②、④、⑥、神田駿河台3-②、淡路町交差点前、総評会館。井伊伊賀守邸拝領

" 4-1~元禄10-6 三河町=千代田区内神田1-⑨、⑩、⑪、⑫、⑬、2-⑩~⑫、⑮。互助会ビル、ロイヤルプラザ、吉沢ビル。松平対馬守邸拝領

堀田正虎(福島、山形10万石)

元禄10-6~享保元-8 南本所新大橋際=江東区新大橋2-①~⑦、3-①~⑦、八名川小学校、八名川公園、マンション、住宅。前住者不詳

享保元-8~" 2-2 田安御門内=千代田区北の丸公園②、清水門近く。御用屋敷跡拝領

" 2-2~寛保2-6 大手前=千代田区大手町1-①、大手センタービル一部。久世大和守邸拝領

堀田正春(山形10万石)

堀田正亮(山形10万石、佐倉11万石)

寛保2-6~延享2-11 数寄屋橋御門内=千代田区有楽町1-⑪、2-⑨、⑩、交通会館、読売会館、有楽町駅の一部。井伊伊賀守邸拝領

この間、正亮時代の享保17年5月に中屋敷が本所二ツ目の戸田伊勢守上げ屋敷を相対替え拝領。両国橋をわたった南側、墨田川の向井将監船蔵近くで豎川二之橋。深川松井町2丁目に接した武家地だが、元禄ころまではたんぼや畑地だった。現在の墨田区千歳3丁目⑥~⑭番地あたり、東西46間、南北52間8寸余のはほぼ正四方形で坪数が2,400坪あった。「東京市史稿」堀田家資料は明和8年11月

中葉鴨に移転としているが原典はわからない。各種の江戸図はその後、文政後期まで堀田相模守を載せている。

堀田下総守正伸。生没=寛文2年、元禄7年7月。菩提所=佐倉市甚大寺。在任=貞享元年10月～元禄7年7月。石高と領地=古河10万石、貞享2年6月～山形10万石、3年7月～福島10万石

堀田伊豆守正虎。生没=寛文2年、享保14年1月。菩提所=佐倉市甚大寺。在任=元禄7年8月～享保14年1月。石高と領地=福島10万石、山形10万石

堀田内記正春。生没=正徳5年、享保16年2月。菩提所=佐倉市甚大寺。在任=享保14年3月～16年2月。石高と領地=山形10万石

堀田正亮、將軍家重を補佐

堀田正亮は正俊の5男で部屋住みのまま亡くなった正武の長男に生まれた。享保16年、正春の臨終にあたって宗家を相続、吉宗享保の改革の後期、寛保2年に寺社奉行に就任、延享元年大阪城代に転じて翌2年に老中に就任した。堀田家にとっては正俊以来実に60年ぶり、念願の幕閣復帰であった。

延享2年、將軍吉宗の隠居、老中首座・松平乗邑罷免のあとをうけて、享保改革後の幕政の中心に据えられる。翌延享3年、山形10万石を転じて佐倉に栄進、のちに1万石の加増があって堀田藩佐倉11万石が確立した。

寛延2年老中首座、翌3年勝手掛老中に昇進。現職で逝去する宝暦11年までの11年間、家重將軍下で現在の総理大臣職をつとめた。正亮の政治は先代享保の改革路線の踏襲で新政策がなく、田沼時代との過渡期との評価もある。病弱で政治的にも無能力であった家重は人前にでることをきらって大奥に引籠もった。式日の謁見も欠席、諸大名は無人の上段の間に向けて平服した。小便が極端に近く上野寛永寺への参詣のとき、將軍のそそを恐れておよそ500メートルごとに仮設トイレを作ったので、小便公方の陰口がささやかれた。

普段は老中ら幕閣とも顔をあわせることがない。言語障害に加えて癲癇持ち、いらだって奇声を発するのでますます意味がわからない。ただ一人間分けることができた御用取次の大岡忠光の信任はますます高まったという。忠光は將軍の意思を正亮らの老中に伝えられる唯一の人物であったが、政治の表面に出ることはなく幕閣に協力してよく家重を補佐した。宝暦10年、忠光がなくなると家重も引退、大御所となったが翌11年に逝去。同じ年、正亮も亡くなっている。正亮の墓所は台東区浅草の日輪寺に置かれたが、昭和55年ころ佐倉市の甚大寺に改葬された。法名は青雲院陵阿松山月溪惟心、佐倉小学校側の堀田家歴代の墓に合祀されている。

正亮の佐倉藩政では元文の財政改革がめだっている。当時の藩財政は山形からの移封の出費や家臣の増加、江戸屋敷経費など諸経費がふくらんで極端に窮乏していた。正亮はこれまでの借財を、長年賦返済による凍結などで整理、また、藩内の治世にもあたり、後堀田家の基礎を確立している。

正亮の上屋敷は山形時代が大手門前と数寄屋橋門内で、佐倉時代は西の丸下の松平乗邑役屋敷を拝領している。大手門前は下馬所、従者待合所の前、現在の大手センタービルの一画、数寄屋橋門内は南町奉行所隣、有楽町駅の北半分などにあたり、のち正順のとき再びここを拝領することとなる。

延享2年11月、老中就任にともなって西の丸下に移転。馬場先門を皇居にすすんだ車道の先、玉石が敷詰められた広い通路と松の植込まれた芝生地の前になる。役屋敷が東64間、西94間、南51間、北92間の変形四角形で延べ面積7,280坪、預かり地が東西26間、南北40間で1,073坪。両屋敷を含めた建坪は2,938坪、畳数4,271帖という記録が残っている。。西側二重橋にむけて正門を構えた。

中屋敷は前出の本所2ツ目と鉄砲洲、下屋敷は渋谷下豊沢村、南本所にあった。鉄砲洲中屋敷は中央区築地5丁目の②番地の一部、東京都中央卸売市場の東南部、海幸橋側になる。当時は江戸湾と墨田川、

入堀に接した下屋敷街で周囲に町家もある。江戸図は延宝のころまで川口町、南本郷町、南小田原町1丁目、2丁目としており、元禄ころの米蔵の跡地を森川生実藩などが下屋敷とした。延享3年10月、広尾下屋敷のうち3,000坪を森川兵部少輔と、1,400坪を小普請組牧野清兵衛と、400坪を近習問番辻市太郎と相對替え、さらに宝暦6年12月には稲葉紀伊守邸1,400坪を相對替えしたので、安永2年の屋敷改役届出書上げは6,210坪余となった。文政12年6月、紀伊家から相對替えの申出があり、いったん断つたらしく『江戸幕藩大名家事典』によれば「紀州家で堀田佐倉築地下屋敷7千坪を引料7千兩を支払い、さらに紀州家築地3万坪と相對替えの話があったが、堀田家で断つたためお上から紀州の切坪7千坪と屋敷替えを命ぜられ大損となった。しかし、紀州家より心付けとして3千兩を進物にした」。紀伊家ではこの年、築地下屋敷を火災焼失、建屋付きの堀田家中屋敷を希望したらしい。相對替えの話が進まなかったので強権を発動、幕命をもって邸地を取替えた。堀田家ではこの正陸時代、安政元年再び紀伊家と相對替えで復帰、およそ1年間を中屋敷としている。

南本所下屋敷はJR兩國駅、国技館近くの墨田区横網町2丁目④番地と②、③、⑤、⑥、⑨、⑩番地の一部で、蔵前橋通り蔵前橋東詰に敷地の大半、その北側、東京鋌兼、協和、AXSビルと横網町公園にわずかにかかったあたりになる。2,480坪のほぼすべてが池泉と庭園という典型的に下屋敷であったが、寛延2年2月、下屋敷と渋谷下豊沢下屋敷のうち3,600坪をあわせ、浜町加納遠江守下屋敷3,400坪余と相對替えした。浜町下屋敷は現在の中央区日本橋浜町2丁目60～62番地の品川不動産AVビル（仮称）、千代田生命東京中コクヨの一画と59番地浜町運動場の北東部およそ半分くらいにあたる。墨田川近くの武家蔵地で少し北に上ると兩國橋に出た。寛政10年8月まで。

堀田相模守正亮。生没＝正徳2年、宝暦11年2月。位牌所＝佐倉市甚大寺。在任＝享保16年2月（山形就封）、延享3年1月（佐倉移封）～宝暦11年2月。役職＝老中。石高＝10万石、宝暦10年4月～11万石。領地＝下総国7郡、上総国6郡、武蔵国3郡、常陸国3郡、上野国1郡、下野国3郡、相模国3郡のうち

参考）堀田佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

数寄屋橋御門内上屋敷＊慶長9年ころ～寛永6年＝桑山元晴、貞晴。元和年中＝水野忠善。寛永7年～寛保2年＊井伊直勝、直好、信武、直朝、直短、直陽、直員、直存。～延享2年＝堀田正亮。～天明元年＝井伊直在、直郡、直朗。～文政元年＝堀田正順、正時、正愛。～10年＝松平信順。～明治維新＝蜂須賀徳島藩囲込み

西の丸下役屋敷＊前出。松平乗邑邸参照

本所2ツ目中屋敷＊不詳～享保17年＝松平松江藩中屋敷。～明和8年＝堀田藩中屋敷。～明治維新＝酒井庄内藩中屋敷

鉄砲洲中屋敷＊元禄ころ～享保2年＝米蔵。～延享3年＝森川生実藩下屋敷。～文政12年＝堀田藩中屋敷。～安政元年＝紀伊藩中屋敷。同年＝堀田藩中屋敷。～3年＝講武所。～明治維新＝軍艦操練所

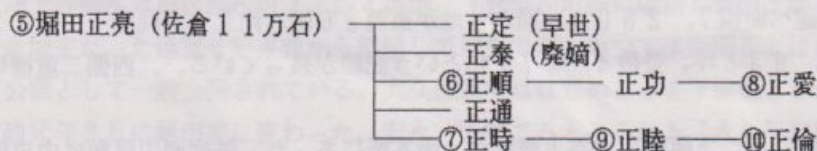
渋谷下豊沢村下屋敷＊寛文8年～明治4年＝堀田藩下屋敷

南本所下屋敷＊不詳～寛延2年＝堀田藩下屋敷。～文政5年＝加納一宮藩下屋敷。～安政元年＝大久保小田原藩下屋敷。～5年＝加納一宮藩下屋敷。～明治維新＝米蔵囲込み

浜町下屋敷＝延宝以前～元禄ころ＝松平大多喜藩下屋敷。～正徳4年＝牧野長岡藩下屋敷。～享保15年＝間部鯖江藩中屋敷。～寛延2年＝加納八田藩下屋敷。～寛政10年＝堀田藩下屋敷。～明治維新＝一ツ橋卿下屋敷

天明大飢饉で一揆が佐倉城に迫る

正順は正亮の6男に生まれたが、嫡子が早世し4男も病弱で廃嫡となったので、宝暦11年に11万石の遺領を継承した。



10代將軍家治の治世。家重時代からはじまった側用人政治はこのころ田沼意次の登場で最盛期を迎え

ていた。意次ははじめ900石であったが累進、相良3万石の大名に取立てられ老中にすすむ。將軍と幕府高官との間を取次ぐとともに昇給昇格人事に尽くし、自ら金銀財宝を惜しげもなくばらまいた。意次の大手町上屋敷は千客万来。連日山のような贈物で埋まったという。意次は収賄政治家の代表でもあったが、もっとも進歩的な政治家との評価もあった。新田の造成、物産の開発などをすすめた。正順は田沼時代の安永3年奏者番、天明3年寺社奉行にすすむ。

天明7年、10代將軍家治が急死。後継將軍に一つ橋家から家斉が養子として迎えられた。家斉の子女は男女あわせて55人。迎合じょうずの取巻きに囲まれ、大奥での消費生活にひたった類廃政治家として有名だが、就任当時は老中首座に松平定信を登用、寛政の改革に取り組むなどの治績も残している。老中に就任した定信は、諸悪の根源であった意次一派を処断して人心の一新をはかる。正順も定信派の一員として改革に取り組み、天明7年大阪城代、寛政4年京都所司代にすすんだ。改革は享保の改革にならった復古的理想主義であったが、労多く改革の実があがらない。やがて光格天皇の父尊号事件が起こって志しなからで失脚する。

正順も老中目目の寛政10年、病のため退任。正順の佐倉治世45年間の多くが幕府要職で、後半は京阪にいて皇居造営などの任にあたった。この間、幕府から日光東照宮本坊修復を命ぜられて13万両の出費がかさんだほか、江戸屋敷の火災、飢饉が続いて藩財政はいっそうきびしいものになった。このため、領民に賦課金を課し、7年間にわたって藩士の俸祿をカットした。天明3年大飢饉のとき領内各地で一揆が続発、ムシロ旗が佐倉城の田町門や大手門まで押寄せた。しかしまた一方で、上方文化を藩内に取り入れ、藩士子弟のために学問所を設けてもいる。のち正睦のとき開花する佐倉藩の勉学の気風は正順によって作られたのであった。文化2年逝去、57才。遺骸は浅草の金蔵寺に収められた。

正順には嫡子正功があったが、正順の代が長かったこともあって父に先立って逝去。正功の子供はまだ幼かったので、45才になっていた弟の正時が養子に入った。正愛は兄の子供正愛が成人するまでのつなぎ役と割り切っていたこともあって、幕府の幕閣打診も断わりもっぱら趣味の俳句に没頭した。藩政も家臣にまかせきりでとくにめだった業績もなく文化8年、51才で逝去。浅草の金蔵寺に埋葬された。正時が亡くなったとき正愛はかぞえ13才になっていた。文化8年5月、正時の遺領11万石を継承。正愛の時代は堀田藩がもっとも停滞した時代で、かつもっとも経済的に苦しかった時代でもあった。文政3年の総借金22万1千余両、全体の約9割が江戸屋敷の借財であったという。正愛の正室は小倉15万石の小笠原忠固の女であった。朝昼晩の食事はご飯に味噌汁とつけものだけ。何不自由なく裕福に育てられたお姫さまにとって、貧乏大名の生活は耐えがたいものだったのだろう。実家に逃げ帰って離婚となった。後添は松平治郷の女幾千姫。俳句をよくした。

正愛は年寄向藤左衛門に命じて財政改革に乗出す。三分の一を借金の返済にあてるという三ツ割の法と歩引き法を採用、藩債の整理、蔵元制度の変更、質素儉約をすすめるが、向が失脚、改革は挫折した。文政4年には房総海岸警護を命ぜられた白河11万石の松平定永が佐倉転封を願い出た。正愛は幕府要人に反対を陳情してことなきをえたが後任警護を命ぜられ、亥鼻山の千葉城跡に台城を築いた。佐倉城の天守閣が炎上したのもこの正愛時代。文化10年3月夜半、本丸下の水濠をたらいで渡った泥棒が天守閣に忍込み、置き去りにした灯火が点火した。実は天守閣が狙われたのは初めてのことでなかった。55年前にも武具などを取られた苦い経験があった。1度ならずとも簡単に天守閣が破られ、しかも焼失という最悪の事態に。天下泰平、警備の形骸化もさることながら藩の士気低下が指摘できた。文政7年12月正愛逝去。まだ若い26才であった。遺骸は金蔵寺に埋葬、現在は佐倉市の甚大寺代々の墓に合祀されている。

正順、正時、正愛3代で上屋敷6か所を變遷

正順、正時、正愛3代の間に上屋敷は大名小路、虎の門内、山下門内、数寄屋橋門内、芝増上寺海手、芝金杉と變遷した。大名小路上屋敷は千代田区丸の内1丁目⑦、⑨、⑩番地で、東京中央郵便局、JR東京駅の南口周辺と駅前ロータリーなどにあたる。江戸時代ははじめの黒田長政邸跡だが、森津山藩、松平水戸高松藩をへて、側用人、老中などの邸地となっていた。宝暦12年1月、正亮の西の丸下役屋敷を差上げ、井上河内守邸を拝領、敷地坪数は7,180坪あったが、居住は1年に満たない。同年12月に松平周防守へ引渡した。のちの老中役屋敷で、最後が稲葉淀藩邸。維新後は民部省、司法省をへて大正3年12月に東京駅が誕生した。

虎の門内上屋敷は千代田区霞が関3丁目①番地の大蔵省一部にあたる。宝暦12年12月、松平周防守邸を拝領、翌13年1月引渡を受けたが、坪数4,686坪と狭く、添屋敷として明和7年4月、同所内藤能登守邸のうち3,000坪を追加拝領した。明和9年(安永元年)2月29日、西南の風急。目黒行人坂大円寺、本郷丸山菊坂道具屋から出火。町数934、橋170、寺院382を焼失、死者1万5千人、行方不明4千人をだした。この火災で虎の門上屋敷を焼失。翌3月、同じく被害にあって家作のない井上河内守邸と入替えとなった。

山下門内上屋敷は千代田区内幸町1丁目①番地で現在の帝国ホテル。池田輝政の3男でのちに岡山藩主にすすんだ忠雄からはじまり伊達政宗の中屋敷などになった。安永元年3月、井上河内守邸7,836坪を拝領、4月普請奉行から敷地を引継ぎ、ここで新屋敷を造営するがここも9年にすぎない。天明元年9月、今度は数寄屋橋門内の井伊兵部少輔邸と交代、跡地は阿部白河藩が明治維新まで居住した。維新後博覧会事務局、農林陳列所をへて明治23年から帝国ホテルになった。

数寄屋橋門内上屋敷は旧堀田正亮邸への再度の入居になる。現在の千代田区有楽町1丁目⑩番地、2丁目⑨、⑩番地、交通会館とそごうの入っている読売会館、JR有楽町駅の北半分。江戸時代は銀座側と外堀と石垣で隔離された江戸城内で、隣の駅前商店街あたりに南町奉行所が置かれた。天明元年井伊兵部少輔邸を拝領、在住は37年をかぞえた。天明4年12月26日夜半、八代洲河岸西尾壱岐守邸から出火。西北の風烈。火は大名小路から築地方面にのびた。こんどは数寄屋橋上屋敷と築地中屋敷の両方を焼失した。文化2年8月正時就封。この年、上屋敷門番所の新築について幕府に伺いをたてたことが『紀氏雜録続集6』にみえる。類焼後、新築の節としているので、この年にも火災があったのだろう。「文化2年12月表門番所10万石格の破風造りにいたしたく旨届出」許可のただし書きは唐破風無用のこととなっている。

明くる文化3年3月4日またまた江戸大火。芝車町からでた火は西南の風によって大名小路、京橋、日本橋、神田、浅草を焼いた。巾700メートル、長さおよそ8キロ。大名屋敷が80余、神社寺院80余、町数530余、焼死者1,200余人という。数寄屋橋上屋敷も焼失した。『佐倉史談』によれば「文化3年3月、数寄屋橋の邸、火災にかかりたるため築地の中屋敷に移る。屋舎狹隘にして燕居にあつるべき室なくやむをえず庭内に一小楼を造りてここにおる」としている。相次ぐ藩邸の火災焼失は苦しい藩財政を一段と圧迫していく。跡地は松平伊豆守邸ののち蜂須賀徳島藩邸に囲込み、明治5年の大火焼失後、東京鎮台、陸軍練兵場をへて三菱所有地となった。

芝増上寺海手は港区浜松町2丁目4番地、JR浜松町駅に隣接した旧芝離宮恩賜庭園で、大久保忠朝が佐倉城主だった延宝6年家光から拝領して埋立てた。かつて楽寿園とよばれた名園。今日に保存され都立公園として一般公開されている。大久保家でははじめここを下屋敷としたがのちに上屋敷と唱替え、文政元年8月に堀田家が変わった。安永、天明ころとみられる「大久保加賀守芝上屋敷之図」が現存して屋敷内の詳細が知れる。四方は海と入堀で囲まれ、入口の橋は2か所。正門を入れてすぐが表御殿で

藩の役所兼藩主居住区。つづいて藩主家族が生活する奥御殿。南西角のもう1つの橋をわたると家臣邸や長屋が林立している。邸の中心から東側の海手の方に大きな池泉があり、海水を取入れた潮入りの回遊式庭園になっている。「江戸幕府大名家事典」の真田家表門図では大久保家芝海手上屋敷表門同図としている。図は独立型入母屋屋根5間1戸、両番所唐破風石垣畳出しの本格的なもので、さらに表門の外に冠木門があり二重門にも似たりと書込みがある。

文政4年2月29日火災類焼、同月幕府からの命令で隣の芝金杉屋敷と入替え。上がり時の引継ぎ記録によると、敷地面積が14,778坪でうち長屋土蔵とも77坪余、建具目録は門扉が8枚、戸277枚、障子23本、襖4枚、畳52帖、梯子33丁、石灯笼6こ、植木大小、庭石大小となっている。御殿はすでに焼失しており、建具目録は焼残った長屋土蔵分ということになる。

芝増上寺海手屋敷は堀田家のあと御用屋敷とされ、文政6年からはご3卿の清水家下屋敷となった。当時の清水家当主は11代将軍家斉の21男斉かつで、この斉かつがさらに紀伊家に再養子となったとき屋敷地も紀伊家に付けられた。弘化4年8月、嘉永3年6月と2回兄将軍家慶がお通抜け。お成りを通抜けと称しているところがまた面白い。経費節減のためたんに通抜けただけといいわけをした。

このころ幕末の風雲がようやく急を告げてくる。隣の国清国がイギリスと戦った阿片戦争で敗れる。世界最強と信じた清国の敗戦は幕府に大衝撃を与える。諸外国の軍艦が日本近海にも出沒、海防のため屋敷内に砲台が築かれた。嘉永6年、ペリー黒船の浦賀入港に先立つ7年のことであった。

維新後の明治4年、兵部卿有栖川たる仁親王邸、8年には皇太后の非常立退所となり芝離宮と命名、迎賓館として米国前大統領グラント将軍など明治天皇の多くの賓客を迎えた。大正12年9月1日、突如として襲った大地震は帝都の多くを灰埃と化した。離宮も建物のすべてを焼失、翌13年2月に邸地は東京都に下付され、都立公園として再スタートしている。

次の芝金杉上屋敷は隣接する港区浜松町2丁目③、④番地で、現在のJR浜松町駅と貿易センタービルの一画になる。芝離宮と同じ延宝年間、加藤明成が拝領して下屋敷を築いた。東側の入堀をはさんで旧邸がのぞめた。東西103間、南北97間のはば正四角形で坪数が10,011坪、屋敷の南側に池泉が作られた。拝領引継ぎ記録によれば、門扉が9枚、戸296本、障子218本、襖82本、畳321帖など。住居276坪、長屋少々とあり、ここも4年2月の火災での大きな被害がうかがえる。文政4年2月拝領、3月普請奉行より引渡し。正愛をへて正睦に変わった天保8年7月、老中就任で辰の口役屋敷拝領までの16年間、ここに上屋敷をかまえた。

拝領屋敷を相對替え名目でやりとり

中屋敷は正亮時代の本所2ツ目と鉄砲洲からはじまり、やはり変遷があった。明和8年11月本所2ツ目邸を転じて巢鴨中屋敷に変わる。現在の豊島区巢鴨1丁目④から⑦、⑨番地のJR巢鴨駅前、アーバンハイツ巢鴨の一部、ビルクレーン、中央理科興業などであたろう。藤堂津藩下屋敷に接した武家地で巢鴨徒3組上げ地、酒井左衛門中屋敷のうち2,360坪で寛政8年までの25年間居住し、京極加賀守に引継がれたが、変遷が激しく江戸末期の松平豊前守邸あたりとみられるものの特定できない。

寛政8年4月、相對替えて京極加賀守深川新田中屋敷に移ったが1,706坪と狭く、隣接する藤堂和泉守抱屋敷、神保備前守抱屋敷の両屋敷を借用、屋敷つづきとした。文化2年書出は深川海辺新田西淳甫抱屋敷2,977坪。江東区白河2丁目の⑦番地、3丁目①から⑧番地あたりになる。清洲通りと3ツ目通りの交差点から西に100メートルほど入った道路の両側で、アパートやマンション、町工場などが多い。かつて小名木川沿いの下屋敷街で、文政元年8月京極加賀守へ貸地、安政年間の江戸図をみると松山15万石の松平隠岐守抱地などになっている。

文政12年6月、築地5丁目東京都中央卸売市場の鉄砲洲中屋敷を八丁堀の紀伊藩中屋敷の内と交換。中央区銀座2丁目⑪番地の一部、⑫から⑮番地、昭和通りの一部と区立中央会館、富士火災ビルなどがある。ここの江戸時代は堀割の入組んだ蔵地で、紀伊家ははじめここを蔵屋敷とした。北側の入堀に接して木挽町、南隣に備前松山板倉隠岐守中屋敷があった。東側64間、西側65間、南側139間、北側65間の変速四角形で坪数が8,548坪、同年9月に永預かり地132坪が追加された。拝領の経緯は紀伊家の下屋敷焼失にともなう替地、強硬手段がとられたことは既述した。その後、正睦時代の安政元年2月から3年4月まで再び紀伊家の中屋敷と交換するが、またまた復帰して堀田藩中屋敷が明治維新までつづいた。

下屋敷は渋谷と青山にあった。渋谷の下屋敷は増減があるものの先代からの継続で、寛政10年8月に浜町下屋敷が青山に相對替えとなった。渋谷区渋谷1丁目の一部⑮から⑳番地、㉑、㉒番地の一部と神宮前5丁目の一部、ほぼ34から53番地に相当している。青山学院大学の青山通りをはさんだ反対側で、区立渋谷小学校、都立児童会館、区立美竹会館、阪急スポーツスクール、青山病院、国立総合児童センター、国際連合大学本部、国際連合大学RTCプラザがある。青山大膳亮下屋敷の一部3,289坪を拝領。青山通りからちょっと入組んだ東43間、西41間、北73間、68間の4角形だが、通りまで4間巾の通路が34間ほどつづいてその4間巾に表門があった。文化3年2月渋谷羽根沢村上田弥右衛門3,084坪と相對替え、文化12年5月追加地を下渋谷大貫治右衛門支配所、井上左太夫抱え屋敷1,196坪に拝領した。羽根沢下屋敷は渋谷下豊沢下屋敷に囲い込み、井上屋敷は筭川をはさんだ飛地だが、ともに明治維新までつづいた。

10万坪におよぶ抱屋敷も財源確保で売却

正順時代、享和2年11月から文化2年8月までの3年間、砂村新田に実に10万2千坪を超す抱屋敷と町並屋敷を確保している。抱屋敷は藩の個人資産で、町並屋敷は借家といったところだろうか。江東区南砂2丁目の③、④番地、⑧から⑭、⑮、⑲から㉑、35から37番地と明治通りとJR越中島貨物線をはさんだ3丁目②から⑥番地、⑧、⑨番地に相当しよう。都住宅公団南砂町住宅、都営南砂3丁目アパート、南砂町グリーンハイツなどの高層マンションと倉庫が並び、区立南砂小学校、第4南砂小学校、さくら幼稚園、南砂緑道公園、NTT東京総合グラウンドなどがある。砂村新田は摂津出身の砂村新左衛門が開拓した土地で、江戸時代の中後期は江戸湾をま近に控えた下屋敷街となっていた。

享和2年毛利藩抱屋敷を買取り、文化2年に行徳村百姓太郎右衛門、大和田村百姓作兵衛に譲渡、のち再び毛利藩をへて松平松江藩抱屋敷、町並屋敷になった。毛利家資料でははじめ71,418坪、町並屋敷と抱地をあわせて102,153坪とし、表向きは35,474坪であったという。これをいったん堀田家に売却している。再入居後の文政7年秋、本格庭園造営に着手、翌8年春完成。鎮海園と称した名園で、明治の測量図に江戸湾から引込んだ巨大な潮入り庭園が載っている。幕府の要職をつとめた正順が購入、正時時代、江戸藩邸の再建経費などの理由で手放したものであろうか。

『紀氏雜録続集』に龍仙村抱屋敷、町並屋敷4か所の記録がある。抱年月は不詳だが、その原典が文化2年9月の屋敷改川井次郎兵衛宛書出とみられることから、この年砂村新田抱屋敷の居住者の一部を収容したものとみられる。

下谷龍仙村抱屋敷。水谷右膳屋敷、上野東叡山領、	年貢地	3,828坪	文化2ころ～文化9-5
間中元龍屋敷、	"	2,449坪	" ~" 9-5
下谷金杉町町並屋敷。町田多膳屋敷、	町奉行支配地	120坪	" ~" 9-12
正覚寺			
下谷坂本町抱屋敷。町田多膳屋敷、	年貢地	2,013坪	" ~" 9-12

寛政江戸図をみるとこれらの4屋敷はいずれも地つづきで、現在の台東区龍泉1丁目①から⑩番地、⑫から⑭番地と入谷1丁目⑮から33番地、2丁目②⑤から⑦番地、32から37番地、千束2丁目33から36番地、昭和通りを挟んで下谷2丁目⑮番地、②④から⑥番地、3丁目の⑨、⑩番地、①、②番地の一部にあたる。ビルやマンション、一般住宅がならぶ下町で、一画に台東小学校、下谷中学校、下谷幼稚園があるが入組んで一部は屋敷内、一部は邸外と微妙な位置にある。下谷金杉町町並屋敷に正覚寺も加わり1か年金9両の契約で借受けたと書いている。寺の宿坊か本堂に宿泊りしたものであろうか。正覚寺は入谷1丁目⑮番地に現存、その後2百数十年間の変遷をみつめている。

ところで『佐倉市史』には、文化元年8月江戸詰めとなった佐治三左衛門江戸広小路十番長屋の間取図と渡帳が紹介されている。佐治家は500石で代々年寄をつとめた。広小路十番は港区の麻布十番と思われるが、裏付けとなる資料がみあたらない。武家屋敷の造りで、建坪およそ40坪、敷地図がなく庭や畑を含めた全体像はわからない。式台をへて玄関が8帖、客用の座敷10帖、仲口4帖、主人が生活する小座敷6帖、家人の住む居間11帖、若党・下男部屋、女部屋などがある。主要部分はすべて接客スペース、座敷には床の間、廊下がつき、庭も作られたことだろう。江戸屋敷の生活を知る貴重な資料といえよう。

堀田相模守正順。生没=寛延2年9月、文化2年7月。位牌所=佐倉市甚大寺。在任=宝暦11年3月~文化2年7月。石高=11万石。役職=安永3年2月~奏者番、天明3年7月~寺社奉行、寛政7年4月~大阪城代、寛政4年8月~10年11月京都所司代。領地=下総、上総、出羽のうち
堀田相模守正時。生没=宝暦11年、文化8年4月。位牌所=佐倉市甚大寺。在任=文化2年8月~8年4月。石高=11万石。領地=下総、上総、出羽国のうち

堀田相模守正愛。生没=寛政11年1月、文政8年1月。位牌所=佐倉市甚大寺。在任=文化8年1月~文政8年1月。石高=11万石。領地=下総、上総、出羽国のうち

参考) 堀田佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

大名小路上屋敷*慶長ころ=黒田長政、池田輝興。寛永~元禄10年=森 忠政、長継、長武、長成、森津山藩中屋敷。~宝永2年=松平頼常、頼豊。~正徳元年=松平忠周。~享保19年=本多忠良。~寛延2年=土屋篤直。~宝暦8年=松平輝高。~10年=本多正珍。~12年=井上正経。同年=堀田正順。~寛政元々ころ=松平康福。~5年ころ=松平乗完。~文化12年=安藤信成。~文政11年=酒井忠進。~天保2年=牧野忠精。~11年=松平宗発。~12年=井上正春。~弘化2ころ=松平乗全。~嘉永元年=酒井忠義。7年ころ=久世広周。~文久2年=水野忠寛。~元治元年=井上正直。~慶応2年=松平宗武。~4年=稲葉正邦

虎の門御内上屋敷*寛永ころ~21年=柳生宗短。~宝暦12年=松平康映、康官、康員、康豊、康福。~明和9=堀田正順。~天保11年=井上正定、正甫、正春。~明治維新=松平宗秀、宗武
山下御門内上屋敷*慶長18年~元和7年=池田忠雄。~寛永13年=伊達忠宗。~明暦3年=伊達仙
台藩中屋敷、~天和2年=本多利長、土岐頼行、頼殷。~明和元年=安倍正邦、正福、正右。~明和9年=井上正経、正定。~天明元年=堀田正順。~7年=阿部正敏。~元治元年=阿部正識、正由、正権、正篤、正瞭、正備、正定、正ひさ、正外。同年=板倉勝静。~慶応4年=阿部正外、正静。~明治3年=清水昭武、篤守。~4年=奥平昌ゆき

数寄屋橋門内上屋敷*前出。堀田正亮邸参照

芝増上寺海手上屋敷*延宝6年~文政元年=大久保小田原藩下屋敷、上屋敷。~4年=堀田正愛。~6年=御用屋敷。~弘化3年=清水卿下屋敷。~明治維新=紀伊家下屋敷

芝金杉上屋敷*寛永以前~貞享3年=加藤明成、明英。~宝暦10年=加藤水口藩下屋敷。~文政4年=清水卿下屋敷。~天保8年=堀田正愛。~明治維新=大久保忠なお、忠礼

巢鴨中屋敷*不詳

深川新田中屋敷*不詳

八丁堀中屋敷*延宝以前~文政12年=紀伊家蔵屋敷、下屋敷。~安政元年=堀田藩中屋敷。~3年=紀伊家中屋敷。~明治維新=堀田藩中屋敷

渋谷下豊沢下屋敷*寛文8年~明治4年=堀田藩下屋敷。先代からの継続

青山下屋敷*不詳

砂村新田抱屋敷*寛政2年~享和2年=毛利荻藩町並屋敷、抱屋敷。~文化2年=堀田藩抱屋敷。不詳
~安政4年=立花柳川藩抱屋敷。~元治元年=毛利荻藩町並屋敷、抱屋敷。天保12年~明治維新=松平松江藩抱屋敷、抱屋敷

堀田正睦、藩政改革で力つける

11代将軍家斉の補佐役として老中首座に就任した松平定信は田沼一族を追放して寛政の改革を断行するが6年で挫折し、幕府政治は家斉の大御所時代へとすすむ。家斉は自らに取入った側用人の水野忠成らを重用、51年間にわたって親政を行ない、引退後も大御所として実権を握った。その治世は政治を私した側近政治で頹廢がめだった。滝沢馬琴、喜多川歌麿、市川団十郎、平賀源内らに代表される文化文政の華が咲き誇った繁栄の一方で地方の困窮はその極に達した。

12代将軍家慶のもと幕閣の中心に座した水野忠邦は大御所の逝去を待って、江戸幕府最後の財政改革といえる天保の改革にいどんだ。改革は幕府財政立直しのため奢侈を取り締り低物価政策を貫こうというものであったが、安逸になれた役人や一般市民に歓迎されるはずがなかった。腹心の鳥居よう蔵は渡辺華山、高野長英ら蛸社の会員を告発した。鳥居の手段はいまのおとり捜査、点数かせぎのため通常に取り締りでは間に合わなくなった部下たちは市民をワナにかけて犯罪者をつくり上げた。こんな政治が歓迎されるはずはない。水野の掲げた理念は音をたてるように崩れていった。天保14年、上知令を転機に改革は失敗、水野が失脚した日の西の丸下役屋敷は江戸市民の喝采のなか投石がつづいた。

正睦は文化7年8月、佐倉藩主正時の2男、藩士・源田光寿の女を母に誕生した。正時の後をついだ正愛に嫡子がなかったので一時その後継が問題となった。正睦を押す一派と支藩堅田藩主で若年寄正敦の子正修を押す一派に別れたが大事に至らず、文政7年養子に迎えられ、翌8年佐倉藩11万石を相続した。ときに16才。当初は支藩の正敦が後見した。

正睦の就封当時の佐倉藩は先代正愛の文政改革失敗のあとで、藩借財は22万両にも達した。これは全収入のほぼ6年分で、藩の財政は破産同様であった。また、藩士の士気低下と頹廢、領内農村の荒廢もすすんだ。正睦は反対派を一掃、年寄・渡辺弥一兵衛を登用して天保の改革に取り組む。まず全藩士を佐倉城に集めて苦しい財政事情を説明、協力を呼掛けた。生活に困窮した藩士に貸付け金を与える一方で儉約令を強制するとともに文武を奨励して学制改革に乗出した。正順の作った学問所を拡充、江戸と佐倉に成徳書院を設置した。儒学を中心に礼節、書道、数学を教え、医学所を付属させて、江戸から蘭学医学者佐藤泰然を招いて順天堂を開いた。高名をしたった門下生が全国から集まったので「西の長崎、東の佐倉」とよばれた。

演武場では兵学や剣道、槍、馬術、弓、砲術などの訓練にあたった。藩士は8才になると藩の塾に入学し、15才から24才までは成徳書院に学ぶことが義務づけられた。いまなら小、中、高、大学の一貫教育といったところだろうか。文武いずれかに免許をえない者は家督相続時に俸祿を大幅にカットするという厳しいペナルティもあった。こうした正睦の教育方針は幕末、維新期に活躍する多くの人材をうむ原動力ともなった。兵制も火縄銃、弓、槍、刀から大砲を重視した西洋式軍制に改革した。また、農村に講を組織して子育てを奨励、間引きを禁止して農村人口の回復をはかった。篤農家や豪農に農村復興にあたらせ備蓄米政策を実施、商家を育成して、領内経済の自立をめざした。正睦の改革は財政、学制、兵制、医療、人材の登用におよび、一応の成果をあげることであった。

正睦は文政12年の奏者番を切出しに幕閣への道も歩む。天保5年寺社奉行、8年大阪城代、同じ年西の丸老中をへて天保12年には念願の老中就任をはたすが天保の改革をすすめる水野忠邦と衝突、2年間で退任している。

当時、イギリス、フランス、アメリカなど列強諸国では東アジア戦略が本格化していた。イギリスは隣国清国をアヘン戦争に破り、香港の割譲、賠償金の支払い、片務的最恵国待遇など清国に屈辱的な条約締結を強いていた。世界列強の次の狙いは日本。日本が清国と同じような状況に陥る恐れが十分にあった。また内政でも、富国強兵をこころざす西国雄藩の台頭があった。薩摩島津、長門毛利、肥前鍋島、

土佐山内の諸藩はそれぞれの藩政改革に成功、財政基盤の安定化をはかるとともに改革を通じて有能な人材を育成していた。幕府政治も鎖国体制同様大きな時勢のうねりのなかにあった。

内憂外患、時局緊迫の嘉永6年6月、12代将軍家慶が急逝、12月後継将軍として一人息子の家定が就任した。家定は生来多病でカンが強く、首や手足がケイレンするなど挙動に異常もあった。人と会うことが嫌いで、幕末の英傑・松平慶永は「凡庸中のもっとも下等」と酷評した。平時なら幕閣の補佐をえて大過なく過ごせたはずの家定に難局が次々と襲う。首席老中以下の幕閣にその重圧が厚くかかっていた。

嘉永6年6月、米国遣日特使ペルー率いる黒船4艘が三浦半島を回って江戸湾に侵入した。浦賀沖に停泊した艦隊は黒々とした煙を吹上げ、砲門を陸地に向けて威嚇した。蒸気船の突然の寄港は、千石船しか目にしたことのない当時の人々を驚愕させた。このときあっさり引上げたかにみえたペリーだが、翌安政元年再び江戸湾に姿を表して開国を迫ると、思案にあまった幕府は4回にわたる交渉の結果、とりあえず開国することを決め日米親善条約を締結した。200年間にわたった鎖国政策が崩れた。

首席老中の阿部正弘はペリーの持参した米国大統領の国書を諸大名に示し、ひろく意見を求め、水戸斉昭、島津斉彬らの開明有力大名とも協議している。独裁政治をつづけた幕府が一般諸大名、まして外様大名やご三家OBの意見を聞くことなどこれまでまったく考えられないことであった。阿部はまた、講義所や海軍伝習所、洋学所を開設するなど西洋文化の吸収をはかった。こうした改革の中に、早くから蘭学に取り組み藩政改革に成果をあげる正陸の姿は救世主にもみえた。

正陸、老中首座にすすみ日米修好通商条約を締結

安政2年、正陸は阿部の要請で再び老中に返咲いてその首座、勝手入用掛、外国御用取扱となった。4年アメリカ総領事ハリスが来日、提供された下田はずれの玉泉寺に星条旗がホンボンとひるがえった。日本初の米国領事館の誕生であった。ハリスの来日目的は日本との通商条約の締結にあった。交渉の窓口となった下田奉行相手では交渉が進展しないことを知ったハリスは、正陸のもとに頻りに書簡を送って中央交渉を呼びかける。幕府はついに江戸出府と将軍家定への会見についての許可を与えた。

10月カゴにのり、星条旗をかかげたハリスの一行が江戸に到着。将軍家定との謁見をすませた後、正陸の西の丸下お役屋敷で予備打合せのうえ、蕃所調所で本格的な条約交渉に入った。翌年はじめには日米間で条約内容がまとまったが、正陸は反対派工作なども考慮、正式調印には朝廷の勅許が必要だと判断して京都に参内することにする。その背景には内外からの激しいあつれきと天皇にも了解していただけるという自信があったのだろう。この判断が政治の舞台を京都に移すという幕末史上重大な転機を招くとは当時の正陸に予想もできないことであった。

正陸は自ら京都に上って勅許を奏上する。ところが大金を積んだ勅許工作も朝廷内の尊攘派公卿の反対がはげしく実現しない。正陸は勅許をえることがないままやむなく江戸にもどった。安政5年4月、正陸の上に井伊直弼への突如の大老内命が下った。自らの意思表示などただの1度もなかったはずの将軍家定が意地をとおした2つの大事。1つが井伊の大老就任で、もう1つは井伊に託した後継将軍慶喜の阻止であった。大勢を見通した井伊の最終判断が加わり、6月ポーハンタン号船上において日米修好通商条約の調印がなされた。

ときあたかも将軍継嗣問題がおこった。13代将軍家定は正座もできないほどの病弱で正室はいたが子どもができる見込みもなかった。国政のかなめにだれを迎えるか、自らの利害関係が絡んで政局の一大争点となった。有力候補の1人がもっとも血筋の近いイトコの紀伊慶福（のちの家茂）であったが不安定な政局を乗切るには8才では若すぎる。もう1人が水戸斉昭の8男でご3卿の一族橋家に養子となっ

ていた一ツ橋慶喜であった。堀田正陸、阿部正弘の老中や越前藩主の松平慶永、薩摩藩主の島津斉彬、宇和島藩主の伊達宗城、土佐藩主の山内豊信らは慶喜を押したが、大奥を中心に大老の井伊直弼らは慶福をすすめた。とくに家定の生母本寿院は「慶喜を養子に迎えるくらいなら死んだ方がまし」と公言してはばからない。6月井伊直弼が強権を発動、将軍家定の名で後継将軍が慶福に決まった。

正陸は正式発表に先立って老中を罷免、翌6年には隠居して家督を正倫に譲ったが、文久2年、老中在職中不行届のかどをもって蟄居を命ぜられた。正陸ら当時の幕閣が結んだ修好通商条約は明治維新後、不平等な条項を含むとした批判をあびることになった。しかし、徳川300年におよぶ泰平がやぶれた内外混乱の中に国の方針を誤ることなく、開国に導いた功績は讃えられてこそ当然といえよう。

将軍継嗣で失脚、安政大獄で蟄居。西の丸下お役屋敷から浜町上屋敷へ

正陸時代の上屋敷ははじめ芝金杉で、最初の老中就任時は辰の口、辞任後いったん小川町に引き下がるが2度目の老中就任で西の丸下にすすみ、再び失脚して浜町上屋敷が最後の地となっている。龍の口邸は現在の千代田区丸の内1丁目③番地と⑤番地、東京海上ビルディング本館、新館、新丸ノ内ビルにあたる。JR東京駅の正面で行幸通りをまっすぐすすむと皇居外苑、皇居に連なっている。江戸時代は内濠のオーバーフロー分を道三濠に落とした辰の口の南隣で、忠臣蔵で知られる伝奏屋敷や幕府の評定所が置かれた。四六時中水音が聞こえ「朝々は鴨のきている辰の口」が周辺ののどかさを伝えている。江戸時代ははじめの蒲生秀行邸跡で、寛永時代の酒井忠勝以来老中役屋敷とされていた。天保8年7月前任老中大久保忠真邸を拝領。大久保は天保の改革前期の勝手掛老中で、幕府朝廷間を周旋し、貨幣改鑄や物価統制などをすすめた。正陸邸は老中在任の6年間、14年間9月老中退任にともなって後任の阿部正弘に邸地を明渡している。阿部は水野忠邦後の首席老中にすすみ、嘉永6年ペリー来航にあたって開国の政策をすすめ、正陸を再び老中の座にかつぎだすことになる。跡地は明治維新まで老中役屋敷として続き、松平康直を最後に明治維新。維新後、日本郵船ビル、三菱商事ビル、丸ビルの地にあった岡山池田藩邸に囲込みとなり、陸軍士官学校仮校舎、鎮台歩兵第3連隊第1大隊などをへて、明治23年に三菱社所有地となった。

小川町上屋敷は千代田区神田神保町1丁目の②から40の偶数番地、46、48番地と④から②の偶数番地の一部。神田北神保町郵便局、誠和ビル、清和寮、東京デザイナー学院6号館、大平紙商事、石毛製本所などがある。白山通りと靖国通りが接する神保町交差点近くで、江戸時代は大名、旗本屋敷街だった。天保14年小川町阿部伊勢守屋敷と入替え拝領。敷地は拝領地7,834坪と預かり地が122坪あった。

安政2年10月2日夜、江戸は安政大地震に震う。江戸城内外、諸大名、旗本邸、市民の家屋の多くが倒壊し、同時に発生した火災が立残った邸地を焼いた。「町方書上」による死者3,895名、あるいは4,895名ともいう。倒壊した家屋は14,346戸だが、これには武家地が加わっていないので総被害はもっと大きかった。堀田藩小川町上屋敷も潰れ、大破のうえ類焼、男48名、女60名、馬8匹が死亡した。火災後始末もすまないこの月15日、正陸再度の老中就任で小川町上屋敷を返上。跡地は松平伊賀守に5,334坪、隣接する森川出羽守邸に2,622坪と預かり地122坪が分割添地された。

正陸の老中再任期の西の丸下役屋敷は皇居外苑②番地、皇居二重橋橋濠前から100メートルほどさがった玉砂利を敷占めたあたりと松の芝生地にあたる。かつて堀田正俊安中2万石時代の屋敷地跡で、江戸中期から後期にかけて若年寄2邸がおかれていた。阿部正弘の推挙で老中にすすんだ正陸は、西の丸下若年寄松平忠恵役屋敷4,896坪と同じく若年寄松平忠優役屋敷3,208坪を拝領。敷地合計は

8, 104坪あった。正陸の2度目の老中期は3年間であったが、この間の安政4年10月の26日と12月2日の2回、正陸の役屋敷でハリスと幕府との予備会談が行なわれた。1回目ハリスは正陸をはじめとした幕府担当官を前に2時間にわたって世界情勢を説明し、日本に迫っている危険を回避するには自ら開国の道を選ぶべきであるなどとした。ハリスの発言はアメリカ通詞のヒュースケンがオランダ語に通訳、それを日本人通詞がさらに日本語に通訳し直すというまだるこい方法で行なわれた。正陸は分からないことがあると熱心に質問したという。この日は説明を受けただけ、重大な問題なので將軍に伝えて検討するとして終わる。2回目は交渉団のメンバーやスケジュールなどを伝達、本交渉は会場を蕃書調所に移し13回にわたって開催された。

安政5年7月、正陸の失脚で役屋敷跡地は後任老中の安藤信正邸に変わる。安藤は万延元年、井伊直弼が榎田門外に倒れた後、久世広周の協力をえて井伊後の首席老中にすすむ。井伊の強硬路線を修正して公武合体策をすすめた。文久元年14代將軍家茂への皇女和宮降嫁を実現させるが、翌2年自宅近くの坂下門で尊皇攘夷派の襲撃を受けて失脚。つづく板倉勝静も15代將軍慶喜の幕政改革を補佐して首席老中にすすむが、時代の波に抵抗する術もない。最後は兵制改革をすすめた幕府の歩兵屯所で明治維新となった。慶応4年4月11日、江戸城は新政府軍によって開城。目の前に本拠を構えた西の丸下歩兵屯所はただ静観するばかりであった。14日武装解除され解散。変わって新政府の長州軍、天皇を守る親兵屯所が入った。明治5年隣の旧会津藩邸の陸軍省添屋敷から出火。西の丸下から丸の内一帯を焼いて銀座方面にのびた。跡地はしばらく近衛兵の訓練場とされたが、明治7年に近衛第1大隊が兵舎を作り、東京憲兵隊の仮本部なども体験した。

正陸最後の浜町上屋敷は中央区日本橋浜町3丁目①、②、⑦から⑩、⑮、⑯番地と日本橋中州⑬番地、⑭番地にあたる。高速6号向島線が走り、清洲橋ランプの一部を中心に公園遊歩道と浜町ランプ、清洲通りに囲まれた一画、化学工業日報社、中央裁断所などがある。江戸時代は大川とよばれた隅田川と入堀に2面を接し、近くに新大橋があった。元禄6年の架橋で、現在の橋からおおよそ100メートルほど下流におかれていた。一帯は武家地で庭園をそえた大名下屋敷がつづき、浜町河岸でも知られた。変わって老中にすすんだ安藤信正の旧邸5,445坪あった。正陸はここで蛸居謹慎のあと佐倉城に隠棲、元治元年2月、三の門御殿のうちに松山御殿を作り隠居所としたが、わずか1か月後の同年3月、悲運のうちに逝去した。55才であった。遺骸は佐倉市の堀田家菩提寺甚大寺に埋葬された。「故佐倉城主侍従4位文明公墓」と書かれた大きな墓碑と傍らの顕彰碑がその功績と歴史の重みを伝えている。正陸の中屋敷ははじめ鉄砲洲であったが、前出のように文政12年6月、紀伊家の強権発動で南八丁堀紀伊中屋敷8,680坪に振替となった。中央区銀座2丁目の⑪番地の一部と⑫から⑯番地まで、昭和通りの一部、区立中央会館、富士火災ビル、東急銀座ビル、電通PRセンターなどがある。江戸時代は東西の2面が堀割で海寄りにおおよそ800坪ほどの池泉が設えられていた。安政年間江戸図によると北隣が伊達吉田藩3万石上屋敷、南隣が板倉松山藩5万石中屋敷で一画に細川熊本藩54万石下屋敷があった。

安政3年1月、深川小名木川牧野備後守下屋敷のうち、4,550坪を拝領。東西119間、南北38間の四角形に小名木川沿いの道路からの入り道が付いた。江東区北砂2丁目⑮番地の一部で現在は小名木川貨物駅の一部になっている。。深川小名木川邸はわずか3か月で再び紀伊中屋敷と相対替え、安政3年4月、南八丁堀の旧邸に復帰して明治2年6月まで居住した。

安政元年2月から12月までのおよそ1年間、正亮時代の鉄砲洲中屋敷に復帰している。前出中央区築地5丁目②番地の中央卸売センターの一部であったが、安政元年、太平の夢を破られた幕府は旗本の子弟に剣術や槍、砲術を教練するため、堀田邸に講武所設置を決めた。男谷精一郎、高橋泥舟、江川太郎

左衛門ら当時一流の武芸者が教授で、猛げいこで知られたが、洋式の陸軍教練が重視されるにおよんで陸軍所に合併、跡地は軍艦操練所と変わって明治維新におよんだ。堀田邸を講武所に引継いだ時の建屋建具畳目録が『東京市史稿』に載っている。敷地面積6,320坪、うち建屋、長屋、土蔵521坪で物揚げ場1か所。門扉27枚、戸456枚、障子307枚、襖106枚、畳376帖、梯子14丁、植木大小品々となっている。

下屋敷は寛文以来の渋谷下豊沢村を継承した。安政5年『復元江戸情報地図』による下豊沢村拝領屋敷は20,834坪余、抱屋敷23,588坪、あわせておよそ4万4千坪あった。下屋敷の推移は幕末期の項で一括紹介することにした。

嘉永年中から万延2年まで太田備前守邸を借地、愛宕下薬師小路中屋敷とした。港区西新橋3丁目⑨から⑭番地、愛宕山下の東京慈恵医科大学の一画にあたる。隣りは忠臣蔵の発端となった浅野長矩の切腹地田村右京太夫邸。この庭先で浅野が無念の刑死をとげた。太田家の『屋敷改役書上』によると1,150坪で、万延2年に返却、跡地は太田邸、堀田益吉邸などにになった。また、安政年間に一ツ橋門外3番火除明地3,803坪を預かっている。千代田区神田錦町3丁目③、⑤から⑨番地、⑪、⑰番地、興和一ツ橋ビル、麴町神田税務署、東京電気大学5号館などの一画にあたる。安政元年12月、ペリー来航に刺激された幕府がもうけた講武場の1つで、火除地を柵で囲って馬場を作り、歩兵奉行、陸軍奉行配下の歩兵屯所などが訓練にあたった。軍制改革をすすめた幕府の責任者として老中在任中、その管理を担当したものとみられるが経緯がいま1つははっきりしない。

堀田相模守、備中守正篤、正陸。生没=文化7年8月、元治元年3月。菩提寺=佐倉市甚大寺。在任=文政8年3月~安政6年9月。文政12年4月~奏者番、天保5年8月~寺社奉行、8年5月~大阪城代、8年7月~西の丸老中、12年2月~14年閏9月老中、安政2年10月~安政5年6月老中。石高11万石。領地=下総国、上総国、相模国、常陸国、下野国、出羽国内

参考)堀田佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

芝金杉上屋敷*前出。堀田正愛邸参照

龍の口南角上屋敷*慶長~寛永11年=蒲生秀行、忠郷、忠知。~元禄6年=酒井忠勝、忠直、忠隆。~享保19年=土屋政直、陳直、篤直。~延享4年=本多忠良。~宝暦8年=本多正珍。~天明4年=松平輝高、輝和。~寛政2年=牧野貞長。~12年=本多忠かず、忠誠。~文化3年=戸田氏教。~文政元年=松平信明、信順。~天保8年=大久保忠真。~14年=堀田正篤。~安政4年=安部正弘。~万延2年=脇坂安宅。~文久3年=松平信義。~慶応元年=牧野仲恭。~4年=松平康直。~明治元年=小笠原忠のぶ

小川町上屋敷*享保3~15年=松平輝規。~明和6年=水野忠之、忠輝、忠辰、忠任、忠かね。~天明7年=阿部正倫。~8年=松平信明。~文化14年=阿部正倫。~文政6年=牧野忠精。~天保14年=阿部正弘。~安政2年=堀田正陸。~4年=松平忠礼。~明治維新=松平定保、定法

西の丸上屋敷*慶長~寛永12年=大久保忠常、忠職。~万治2年=安部重次。~寛文10年=本多忠相。~延宝8年=堀田正俊。~天和2年=牧野成貞。~貞享3年=堀田正休。~元禄元年=加藤明英。~同年=大久保忠増。~2年=南部直政。~3年=松平正信、正久。~9年=内藤政親。~宝永元年=本多正永。~正徳3年=永井直敬、尚平。~享保13年=大久保常春。~19年=太田資晴。~寛保元年=西尾忠尚。~明和4年=板倉勝清。~安永4年=水野忠見。~天明3年=松平忠順。~5年=米倉昌晴。~8年=松平忠福。~寛政5年=青山幸完。~10年ころ=立花種周。~文政5年=小笠原貞温。~天保9年=森川俊知。~安政2年=松平忠恵。~5年=堀田正陸。~文久2年=安藤信正。~同年=板倉勝静。3年~慶応4年=歩兵屯所

浜町上屋敷*寛永ころ~元禄12年=井上笠間藩蔵屋敷、中屋敷。~延享ころ=松平桑名藩中屋敷。~文化12年=酒井忠用、忠与、忠貴、忠進。~安政5年=安藤信義、信由、信正。~元治2年=堀田正陸、正倫。~明治維新=松平康英

鉄砲洲中屋敷*前出。堀田正亮邸参照

南八丁堀中屋敷*延宝以前~文政12年=紀伊藩蔵屋敷、下屋敷。~安政3年=堀田藩中屋敷。~同年=紀伊藩下屋敷。~明治2年=堀田藩中屋敷

深川小名木川中屋敷*不詳~安政3年=牧野笠間藩下屋敷。~同年=堀田藩中屋敷。~明治維新=紀伊藩中屋敷。安政6年~明治維新=松平藩下屋敷

渋谷下豊沢村下屋敷*寛文8年~明治4年=堀田藩下屋敷。先代からの継続

愛宕下薬師小路中屋敷*文化ころ~嘉永年中=太田掛川藩中屋敷。~万延2年=堀田藩中屋敷。~明治維新=太田藩所有地

延宝以前~堀田藩、新島左へ

堀田正倫、慶喜助命嘆願で謹慎処分。混乱期は藩主不在

堀田正睦隠居の後を受けて9才の正倫が急遽佐倉11万石を継承することとなった。正倫は嘉永4年、正睦の4男として、小川町上屋敷において藩士平田留次郎の女イクを母に誕生、兄3人がいずれも早世したので繰上がって世子となった。父に似て学問を好み、武道はとくに馬術に優れた。

正倫が相続した当時の幕府はすでにその権勢も昔日に比すべくもなかった。政治の中心は京都に移り、開国、佐幕の論争はやがて幕府を倒して天皇の政府を作ろうとする倒幕派と幕府を守ろうとする佐幕派の対立へと発展していた。14代将軍家茂の治世だが京都には将軍名代の一ツ橋慶喜が常駐していた。幕末の風雲が急を告げた慶応2年7月、禁門の変がおこり、長州討伐の朝命が慶喜を通じて幕府に伝えられた。2度目となった今度の長州征伐は幕府の命運をかけた戦いとなった。家茂は西国21藩に出兵を命令、自ら出陣するが大阪に着いたときすでに病にであった。7月大阪城内で逝去、わずか21才の生涯であった。将軍の死を契機に征長もうやむやのうちに終わる。

2年11月、徳川最後の将軍に慶喜が就任、家康の再来ともいわれた俊才でもあったが、時代の波に抗する術もない。3年10月、徳川家の生残りをかけて大政を奉還。勢いにのる尊攘派は徳川家の辞官、納地を主張して旧幕府を挑発した。また一方、これまで仇敵にも等しかった薩摩と長州がこっそりと手を結ぶ。舞台裏の準備が整った薩長軍は佐幕派の江戸薩摩屋敷焼討ちを契機に起こった幕府軍の京都進撃に呼応して兵を起こした。

倒幕の密勅を手にあくまで武力による倒幕をめざした薩長軍5千と大義によって君則の奸を一掃するとした幕府軍1万5千の両軍が鳥羽伏見にまみえたのは4年1月のことであった。しかしすでに士気の衰えた幕府軍が近代軍制のもと錦旗をなびかせて進撃する薩長軍の敵ではなかった。全軍が総くずれとなると慶喜は松平容保ら数人の幹部をともなってアメリカ軍船で江戸に逃げ帰った。

薩長軍はさらに追撃をかける。慶喜追討の号令を発し、諸藩に服従をせまった。鳥羽伏見の戦いで勝利を目の前にみた西日本の諸藩がたちまちのうちにその傘下に加わった。東征大提督に有栖川宮たる仁親王をいただき、東海、東山、北陸の3道に官軍20数藩の総進撃がはじまった。

一方、江戸城に入った慶喜は水戸藩義公(光圀)烈公(斉昭)の血を引いて勤皇の志が厚く、敗戦にも増して賊軍とされたことにショックが大きい。江戸で最後の決戦を主張する小栗忠順などの抗戦派を罷免、自ら上野寛永寺でひたすら謹慎生活に入った。

こうしたなか関東、東北の40藩は慶喜の助命嘆願にむけて行動を開始することになる。その代表に選ばれたのが佐倉藩、小田原藩、上田藩、佐野藩の4藩であった。正倫は3月京都に向けて江戸を出発。静岡の府中城に進撃していた大提督に会見を申込み、逆に新政府軍につくのかどうか厳しくとがめられ、正倫の態度があいまいであるとして京都での謹慎を命ぜられた。佐倉藩は維新混乱期の決断を藩主抜きで行なわざるをえないという最悪の事態におちいったのである。

4月11日、江戸城が無血開城して新政府軍が江戸城に入ると関東は大騒動になる。慶喜を守護するとした彰義隊は慶喜が水戸に移ったあとも上野寛永寺に居座り、幕府海軍奉行の榎本武揚は新政府への軍艦引渡しをこぼんで江戸湾を離れた。幕府の脱走兵散兵隊は佐倉に応援を求めたが拒否、新政府軍の薩摩藩と佐土原藩が佐倉を通過したとき食料などを提供、閏4月の東海道先鋒副総督柳原前光の佐倉通過時には大多喜城受取を命ぜられて出陣した。藩主不在のなか平野重久らの重臣が藩論を統一、その進路を誤ることがなく、7月正倫はようやく許されて佐倉に戻った。

正倫の上屋敷は最初、正睦時代の浜町屋敷を継承したが、元治2年1月いったんこの屋敷を松平周防守に差上げ、麻布今井谷の板倉周防守邸を拝領したが引越しにはいたらず、3月改めて麻布日ヶ窪の毛利左京亮邸を拝領移転した。港区六本木6丁目⑨番地、⑩番地、⑫から⑭番地と④、⑪番地の一部で、テ

レビ朝日、公団日ヶ窪住宅、アルゼンチン大使館、スエーデンセンタービル、REVLQNビルなどがある。

拝領記録によると敷地は南北がおおよそ140間、東西がおおよそ220間で長方形に手足がくっついた複雑な地形をしていた。拝領記録は17,000坪と浜町屋敷の3倍ほどだが、毛利家の安政2年書上げは上屋敷11,410坪、抱屋敷2,677坪と微妙な違いがある。うち建物長屋土蔵が2,354坪で、表門は東向き、ほぼ中央あたりにほどほどの大きさの池泉があった。建具畳目録によると門扉が大小とも10枚、戸928枚、障子が1,356枚、襖471枚、畳1,645枚、はしがが5丁で、植木、庭石大小品々となっている。長門府中5万7千石毛利藩上屋敷の跡地で、元禄15年吉良邸討入りを果たした赤穂浪士のうち、武林唯七ら10名が預けられて切腹となった。毛利家は義士46士を預かった4家中もっとも待遇が悪く後世評判が悪かったともいう。一部の書に古い庭園の面影が残され、池のほとりに記念碑があると書かれているが確認できていない。

中屋敷は南八丁堀、下屋敷は渋谷下豊沢村でいずれも先代からの継続であった。

下屋敷は正盛時代の寛文8年3月、百姓地6,200坪を家光から拝領したことに始まる。延宝7年には8,725坪を添地拝領、羽根沢下屋敷は下豊沢村下屋敷に隣接、文化3年2月上田弥右衛門下屋敷3,084坪を青山下屋敷と相對替え拝領、添屋敷は江戸中期に購入したことにはじまるが詳細はわからない。3邸はいずれも地続きであることから囲込んで一括所有した。その後の増減は複雑なので『東京市史稿』『紀氏雑録続集』から下記に整理した。

渋谷下豊沢村下屋敷の受払推移

年月	累計坪数	拝領坪数	返上坪数	内容
寛文8-3		6,200坪		拝領(紀氏雑録)坪数記載なし(市史稿)
延宝7-12		8,725坪		添地拝領(市史稿)8,700坪添屋敷拝領(紀氏雑録)
宝永元-5			565坪	堀田佐野藩預かり(市史稿)
享保15-4	* 2,467坪			稲葉玄蕃上げ屋敷預かり(市史稿)
元文6-2			1,200坪	3者相對替え、前田半右衛門へ(市史稿)
延享3-10			3,000坪	相對替え、森川兵部少輔へ(市史稿)
"			1,400坪	相對替え、牧野清兵衛へ(市史稿)
"			400坪	相對替え、辻市太郎へ(市史稿)
寛延2-2			3,600坪	相對替え、加納大和守へ(市史稿)
宝暦4-2	10,880坪	7,400坪	1,502坪	山口修理亮下屋敷と部分交換(市史稿)
" 4閏2			1,052坪	抱屋敷に変更(市史稿)
安永2-10	17,234坪			屋敷改役差出し(紀氏雑録)
文化2-9	17,234坪			"
" 8-6	17,234坪			"
文政元-9	17,234坪			"
" 4-3	17,234坪			"
" 12-6			3,000坪	相對替え、森川出羽守へ(市史稿)
天保9-11		3,600坪		6者相對替え、加納遠江守邸拝領(市史稿)
" 14-9		700坪		大島甲斐守邸拝領(市史稿)
"		1,588坪		預地(市史稿)
安政2年	20,834坪			屋敷改役差出し(紀氏雑録)
羽根沢下屋敷の受払推移				
文化3-2		3,084坪		相對替え、上田弥右衛門下屋敷拝領(市史稿、紀氏雑録)
" 8-6	3,084坪			屋敷改役差出し(紀氏雑録)
" 12-5		1,196坪		相對替え、井上左太夫抱屋敷拝領(飛地=紀氏雑録)
文政元-9	3,084坪			屋敷改役差出し(紀氏雑録)
" 4-3	3,084坪			"
安政2年	3,084坪			"
渋谷下豊沢村抱屋敷の受払推移				
古来より		6,280坪		抱地書出し(紀氏雑録)
宝暦4-2		1,502坪		"
" 4閏2		1,052坪		下屋敷から変更(市史稿)
" 4-3		12,580坪		渋谷屋敷のうち抱地書出し(紀氏雑録)

安永 2-10	9,812坪	屋敷改役差出し (紀氏雑録)
"	12,580坪	"
寛政 2-2	1,480坪	抱地書出し (紀氏雑録)
文化 2-9	22,392坪	屋敷改役差出し (紀氏雑録)
" 8-6	22,392坪	"
文政元-9	22,392坪	"
"	1,196坪	" 年貢地
" 4-3	22,392坪	"
安政 2年	23,588坪	"

注意) 坪未満を省略 * 拝領かどうか不詳

残念ながら拝領と返上、累計坪数があわないのではほかにも記録にない推移があったものとみられる。

現在の渋谷区広尾 4 丁目①番地、日本赤十字社日赤中央血液センター、医療センター、看護大学、交通災害等救急医療付属設備、広尾ガーデンヒルツ、広尾上宮保育園、乳児院、区立広尾北公園、②番地の大蔵省官代宿舍、社団法人福田会官代学院、自治大学洗心寮、広尾住宅、日本青年海外協力隊事務局、区立広尾東公園、③番地の聖心女子大学、聖心インターナショナルスクールのほぼ全域、旧井上邸は筭川をはさんだ飛地で港区南麻布 5 丁目①番地の一部、順心女子大学一部と慶福苑麻布乳児院の一部にあたる。

敷地はおおむね四角形でその東側と北側を筭川がめぐり、渋谷区と港区の境にあたる下屋敷に通ずる小道は堀田坂とよばれ、路傍に「江戸時代には大名堀田家の下屋敷に向かって登る坂になっていた」と書かれた港区の案内表示杭が 2 本、江戸時代の名残をとどめている。

「紀氏雑録続集」に正陸時代の下屋敷敷地略図が掲載され、出典を寛政 9 年日記方絵図ならび渋谷大目付絵図としている。幕末図と比較するとその後加納遠江守、辻又吉、島田治兵衛、上田弥吉、佐々大膳、井上左太夫の 6 邸を囲込んでいることがわかる。100メートルほどの堀田坂を登りきった広尾ガーデンヒルツ、イーストヒルのところに引込みのための専用道路、表門は東向きで冠木門らしい。現地に立って見渡すとなんとなく大名下屋敷の風情が漂っているようにもみえる。

表門を入った所は単にお屋敷としているが、マンション街と日赤センターにかけて表御殿、奥御殿が連なったはずである。敷地西の方にはおよそ 7、800メートルはあろうかという馬場が直線で描かれ、東の方にももう 1 本短い馬場がある。筭川沿い青年協力隊のあたりは庭園らしく、この辺地低く泉水ありとみえる。下豊沢村下屋敷の庭園はあまり立派でなかったのか、ほかの中屋敷や下屋敷に名園を求めた経緯もある。中央奥まったあたりに富士見山が描かれている。屋敷地には家臣邸、長屋などがめぐったが、屋敷図が現存しないので詳細はわからない。

また、安政 5 年を再現したとする「復元江戸情報地図」では、北側表側半分と東側筭川側、南側飛地に入組んだ形で下屋敷地があり併せて 20,834坪、中央部西側から南側にかけて抱屋敷 23,588坪、合計坪数が 44,422坪となっている。

堀田鴻之丞、相模守正倫。生没=嘉永 4 年 12 月、明治 44 年 1 月。菩提寺=佐倉市甚大寺。在任=安政 6 年 9 月~明治 4 年 7 月。石高=11 万石。領地=下総国、上総国、相模国、常陸国、武蔵国、下野国、出羽国の内

参考) 堀田佐倉藩江戸屋敷地の主要変遷

浜町上屋敷*前出。堀田正陸邸参照

日ヶ窪上屋敷*元禄以前~元治 2 年=毛利元朝、元矩、まさ広、師就、まさ敬、まさ満、まさ芳、元義、元運、元周。~明治 5 年ころ=堀田正倫

南八丁堀中屋敷*前出。堀田正陸邸参照

渋谷下豊沢村下屋敷*寛文 8 年~明治 4 年=堀田藩下屋敷、抱屋敷

維新後、荒廃した下屋敷に製茶場、養蚕場をつくる

慶応 4 年 3 月 14 日、江戸城総攻撃の中止を決めた西郷隆盛と勝海舟の会談が行なわれたこの日、京都

の紫宸殿では、在京の大名、公卿を前に明治天皇が「5か条のご誓文」を神々に誓った。9月明治天皇が江戸に行幸、明治と改元して、江戸を東京と改めた。翌2年の再行幸では首都を京都から東京に移す東京遷都が実現、明治天皇は江戸城西の丸に入城、皇居となった。

江戸に進攻した新政府軍は空き家同然であった江戸城周辺の大木屋敷を次々と没収していった。明治維新を契機に西の丸下、丸の内は官軍屯所、明治元勳邸、中央官庁街へと変身をはたした。新政府は丸の内に上屋敷をもつ大名の邸地返上を命じ、石高に応じて屋敷数も制限した。開城まもなくの慶応4年4月19日付けで新政府にあてた佐倉藩の江戸屋敷と在住藩士人数が「佐倉市史」にある。

上屋敷＝麻布日ヶ窪

中屋敷＝南八丁堀

下屋敷＝渋谷羽根沢村、同豊沢村入会、ただし抱え屋敷一円。

の3か所で15才以上の江戸藩邸居住者は総人数197名、うち士分18名、女84名、輕輩95名であった。江戸末期の慶応2年、参勤交代の制度が緩和され藩邸居住者もへったが、維新の戦いがはじまると藩主家族は佐倉に移住、江戸詰藩士の多くも国元に呼び戻されたので、わずかな残留部隊だけが残った。江戸屋敷の3邸とも郭外にあった佐倉藩にはそのまま旧邸の使用が認められ、明治2年2月改めて下賜された。

明治維新直後の江戸は新政府軍が入城したものの、旗本は四散し大名屋敷も縮小されたので広大な武家地が空家として放置された。この活用に頭を悩ませた新政府が考えだしたアイデアがさびれた武家地を開墾して桑や茶を植えるというものであった。明治2年2月桑茶の植栽を奨励する法令を制定、当時荒廃をきわめながらもなお多少の旧態を残した大名庭園の多くがこわされた。

佐倉藩でも渋谷下豊沢村下屋敷の手入れが行き届かず製茶、養蚕場とした。依田学海の「学海日録」を開くと、いくつかの記述が目につく。

明治2年9月 5日、渋谷の邸にいたる。太夫人の別墅をみしに去年みたりとはいたく変わりて今は荒廃してみるよしもなく感慨にたえず

“ 3年5月13日、製茶場および新墾地を渋谷邸に閲視す

“ 3年6月30日、渋谷邸、先に聖廟荒廃せり。よって像を藩廟に移し、その廟をこわつ

“ 4年3月27日、斧橋の邸にいたりて製茶場、養蚕場を巡視す。去年開墾せし地は尽く麦作をもふく。今年は実りよきを物産大属赤井潔らいえり。物産史生高橋某そのことに幹たり。茶は上等のものを300斤余を得べし

明治2年から3年にかけて藩邸建造物の多くが取壊され、藩の事業として行なわれた製茶場、養蚕場が着々と成果をあげつつあることがわかる。のちに正倫が佐倉で地場産業の振興をめざして農業試験場をひらく端緒はこのときにあったのだろう。

廃藩置県後の明治4年9月、渋谷下豊沢村下屋敷は新政府に没収されて開拓使の官園となった。開拓使は明治2年に創立された中央官庁で北海道の開拓を主な任務とした。この時、青山南町、青山北町とともに設置された3つの官園の1つで東京出張所農業課管理で第3官園とよばれた。堀田家から開拓使に引継がれた敷地は47,506坪であった。この年11月、周辺敷地29,689坪を買いたし、外国製品の動植物を飼養栽培（東京市史稿）した。その内訳は

果樹園	0坪
穀菜園	41,116坪
牧場運動場	6,057坪
牧草園	1,954坪
桑園	0坪
茶園	1,015坪
丘林道路	16,139坪

であった。

明治5年6月の項に園内牧牛場棚、牛馬羊豚牧畜樹芸取扱人詰所建築があり、畜産飼育も行なわれたこ

とがわかる。「風俗画報」には洋式門扉の正門と老松の写真があり、「ご料乳牛場常盤松」のネームがついている。明治6年3月皇太后宮、5月皇太后宮、皇后宮、8年2月明治天皇が行幸。8年3月農業試験場と改称されたが、15年3月開拓使の廃庁により宮内省御用地と変わり、博物局園芸課、内匠課出張所が管理、しかし「官製の近代工場がよい成績を残せず、次々に民間に払下げられていった」（東京市史稿）。

赤十字病院、聖心女子大、高級マンション街に変身

明治20年、その前年に国際赤十字条約に調印、新たなスタートを切った日本赤十字社が本格病院を建設することとなり、ご料地のおよそ半分ほどの貸与と皇室から建築資金として10万円が下賜された。工事は22年4月に着工、24年5月開院した。赤レンガの塀に囲まれ、玄関と本館はレンガ作り「東西幾棟の病室は清楚なる木製建築にて（中略）病室総数82、患者250人を収容するをえる」（風俗画報）。また、宗吾松という名松ありとも。現在も病棟前の庭に残る老松のことと思われる。昭和20年の戦災は東京都内を焦土と化した、旧下屋敷の1帯だけは幸い焼失をまぬかれる。米軍空軍があえて赤十字病院への爆撃を避けたともいう。その後の変遷をへて、中央血液センター、医療センター、看護大学など同社の近代医療センターになっている。

大正8年5月、ご料地の一部22,000坪を久邇宮家が拝領した。久邇宮家は明治8年、伏見宮邦家親王の王子朝彦親王が創立した宮家で、2代邦彦王の長女良子（ながこ皇太后）が皇太子（昭和天皇）との婚約が整ったあと拝領した邸地に壮大な宮廷建設をすすめ、お妃教育学問所として新築したばかりのお花御殿を麴町一番町の旧邸から移転した。お二人がはじめて顔を合わせられたのも久邇宮邸。「このとき良子女王は本来の夫である皇太子の軍服姿を一目ご覧になっただけで深々とお辞儀をしたあと、3歩後ずさりをして退席した。2人の間で言葉を交わしあうことはなかった」（良子皇太后）。結婚の儀は13年1月、晴れの盛典が繰り広げられた。

邦彦王は陸軍大將をつとめた軍人で明治36年大勲位に叙せられた。朝融王（皇太后の兄）も海軍兵学校を卒業して海軍中將にすすむが、敗戦後の昭和22年皇室離脱。その後牧場経営、香水製造販売に乗出すが失敗、一時母が隠居所としていた広尾の屋敷に戻ったが昭和22年にここも売却した。戦後の混乱期に翻弄されながら昭和34年57才で逝去した。

昭和23年久邇宮邸跡地は聖心女子大学にかわる。「聖心女子大学25年史」によれば、新制総合大学の建築地は「旧久邇宮邸が最適と認められた。しかしこれはすでに大映株式会社社長永田雅一氏の所有となっていた。永田氏は戦後の女子教育に関心を寄せ、とくに学院の建学の精神を理解し個人的計画を犠牲にしてこの学院に譲渡することとなった。（中略）広大な土地は国有財産で、将来払下げの可能性もあるのでここに新制大学を設置することになった」。同校の正門はかつての久邇宮邸表門で堂々たる薬医門が残っている。また、堀田家時代の邸内略図、ご料地時代の測量図、現在図をくらべると大学体育館と2号館裏の丘地と急坂が富士見山跡にあたる。

明治末期にご料地の一部を貸与された福田会は孤児の救済を目的に明治12年に創立された社会福祉法人で堀沢新吉もかかわって会計監査などを勤めた。育児院、幼稚園にはじまり、戦後は児童収容舎、精神薄弱者施設など、現在も宮代学院として福祉活動を続けている。

昭和55年、日本赤十字病院が改造されることになり、本部産院の一画に広尾ガーデンヒルツが竣工した。センターヒルを中心にノースヒル、イーストヒル、ウエストヒル、サウスヒルの5ブロック、14棟からなっている。落ち着いたたたずまいの閑静なマンション街で千所帯以上の方々が居住されている。

新資料
再掲

永代橋近くの佐賀町が最後の東京本邸に

明治維新の戦いは東北、北海道と続いた旧幕臣の抵抗も明治2年をもってすべてが終息。武家支配による幕府政治から天皇を頂点とした中央集権体制が第一歩を記すすることとなった。正倫もひたすら天皇に忠誠を誓って臣下として仕える。明治元年10月の明治天皇第1回行幸では坂下門に天皇を迎え、天皇の京都お戻りを見送ったが、このときの佐倉帰城の行程が『佐倉市史』にある。明治元年12月13日。七ツ半（午前5時ころ）馬揃え、正倫は旅装にあらためて居間に着座。6ツ（6時ころ）出立の儀式ののちカゴに乗り日ヶ窪上屋敷を出発。逆井小休止、渡船。市川小休止、渡船。（本）八幡宿小休止なし。船橋9ツ（正午）前着昼食。大和田小休止。臼井小休止。7ツ（午後4時ころ）佐倉表帰城。江戸時代の正式参勤ルートは陸路途中1泊だが、後期は経費削減のため海路が多かった。かつて数百人におよんだ供揃いも従う家臣は植松当太郎以下わずかに9騎、数十人にすぎなかった。

明治2年3月、薩摩、長門、土佐、肥前4藩が率先版籍の奉還を申出、天皇の謝意が伝えられると全国262の諸藩も一斉にこれになった。6月版籍奉還が認められてそれぞれの藩主を藩の知事に任命、正倫も佐倉藩知事に任じられた。

この年6月、南八丁堀中屋敷を金杉、旧宇和島10万石伊達遠江守藩邸と相対替え移転、港区芝浦1丁目①、②、③番地の一部、芝1丁目⑦、⑧番地で、その大半がJR線山手、東海道線、東海新幹線の線路敷地となり、区立新浜公園、シーバンスN、アモール第一勧業銀行、トーワツェンナビル、区立心身障害者福祉センターなどになっている。伊達宇和島藩から「出京後外国事務を仰付けられ手狭にてしかも出勤に不便」（佐倉市史）として交換の申出があり、話合いのうえ移転経費4千両をもらうということとで決着した。

元松平会津藩の下屋敷で表門は東向き、敷地面積はほぼ四角形の10,660坪余あった。江戸時代はじめの埋立て庭園で江戸湾から潮入の池泉を呼び込んだ。『佐倉市史』は幕末の台場屋敷としており、一時沿岸防備の台場がすえられたものだろうか。堀田邸のころ、諸外国から公私館の候補地として狙われている。「明治2年12月2日、外務省よりまた芝の邸を一覧するよし申しくる。この邸海に接するをもってしばしば外国人にのぞまる。このたびは米人なるよしなり」（学海日録）。

ところが明治3年5月、営繕司から蒸気鉄道（JR東海道線）の線路用地にあたるので5日以内に立退くようにという通知を受ける。移転経費は政府が払い「その余りの地所は御用これなき候につき勝手次第苦しからず」（年寄日記）としている。横浜―新橋間に日本最初の鉄道が開通したのは、それから間もなくの明治5年9月のことであった。横浜ステーションの開通式には冠、ひたれ姿の明治天皇が臨席、最初は午前1往復、午後1往復の2便であったが、1年後には8往復となった。沿線住民は黒い牛と呼んで地上にひれ伏して通過を見送った。電信はこれに先立つ明治2年、郵便は明治4年に開業、文明開化は一気にすすんだ。

新政府は先の版籍奉還で新たな地方官を選任したが、藩知事はいずれも元藩主で旧領を管理したので幕藩時代と変わることがない。ここに中央集権の効果をあげるべく、従来の藩を廃止して県に統一しようと明治4年7月一挙に廃藩置県を断行した。新政府は藩知事のすべてを免職、華族という身分を与えて東京在任を命じた。替わって新設された県には中央から新しい地方官が任命されていた。

藩知事の職務を解かれた正倫は、明治4年9月15日東京へ移住。先だつ12日藩士を佐倉城に集め、手づから金5両ずつを下賜し、ほかに道具などを拝領したものも多かったという。翌5年6月麻布日ヶ窪上屋敷、芝中屋敷、下豊沢村下屋敷を改め、新たに深川佐賀町邸地を拝領した。永代橋を渡ったすぐ江東区佐賀町1丁目の⑨、⑩、⑬番地の一画、高速9号線沿いで、東京コカコーラボトリング佐賀町営業所、製麦会館などがある。大河内（旧姓松平）大多喜2万石の下屋敷跡地で、敷地面積が3,254

坪、表門が東向きで向かって左側に池泉を据え中島があった。「明治に生きた佐倉藩ゆかりの人々」に堀田正久氏所蔵の佐賀町堀田伯爵邸写真が載っている。南側屋敷端から池泉と庭園を前面に藩主居室などの表御殿、遠く長屋も望める。藩邸内部の写真は極めてめずらしく貴重な文化遺産といえよう。

殿様でなくなったとはいえ、主従の関係は簡単に切れない。旧藩士が引続き目通りのため深川邸に立寄っている。新政府に任官した依田学海は

明治5年8月24日 依田学海、深川の従5位邸にいたり（中略）この夜、深川邸に宿す
 " 5年8月30日 依田学海、深川邸にいたり
 " 5年10月27日 依田学海、深川従5位邸にいたりて安否を問い奉る
 " 6年3月20日 依田学海、深川にいたりて堀田公を拝し奉る。（中略）女子の舞をみる（学海日録）

とひんばんに拝謁した。

明治20年、華族の東京以外での居住が認められたことを期に、正倫は佐倉への永住を決意する。錦木町におよそ2万坪の土地を購入して別邸の新築工事に取りかかった。建築は東京の大工棟梁西村市左衛門、造園は当時屈指の庭師として知られた伊藤彦右衛門が担当した。芝生を多用した初期の洋式庭園で県下では徳川慶喜ゆかりの水戸戸定邸とともに歴史的な明治の大名庭園として保存されている。主屋は木造平屋一部2階建て、寄棟屋根、棧瓦一部金属板葺き、その構成は玄関、居間、座敷、書斎と食堂の主屋5棟と湯殿、番所、土蔵、茅門などからなった。明治23年11月竣工、翌24年には正倫が寄留し、29年5月この錦木町邸に本籍を移して深川邸を別邸とした。

佐倉に帰った正倫は地域の文化、教育、産業の振興をめざした。国を富ますには収益性のある農業に改革することが大切と考えた正倫は、明治30年錦木町邸の近くに用地を購入して堀田農事試験場を開設した。米麦の改良からはじめた研究はしだいに耕地を拡大、野菜、果樹栽培、養鶏、病虫害の研究が大規模に行なわれた。これには旧佐倉藩の多くの家臣、研究心に燃える若い旧領民が加わった。農事試験場は昭和元年までつづき、正倫没後の明治44年には皇太子時代の大正天皇が視察のため往訪、堀田邸に宿泊された。

教育面では佐倉高校の前身、成徳学院、鹿山精舎、佐倉集成学校などの育成に心をそそいだ。佐倉中学校時代その廃止が千葉県議会で論議されたとき運営経費の負担を申出、新校舎建設時は建築総工費の全額を寄付して明治43年に落成した。塔とドーム屋根をもった明治期の木造洋風建築で、およそ百年をへた今日、佐倉高校記念館として保存されている。「正倫は千葉県の近代農業の基礎をつくり、前藩主堀田正睦が種をまいた進取の気風を育んだ。その結果、明治時代に多くの旧佐倉藩士が各方面で活躍する。もし、佐倉藩が戊辰戦争勃発時から官軍方であったとすれば、さらに多くの藩士に活躍の舞台があったと考えるのは佐倉に住んだがゆえの思い入れであろうか」（明治に生きた佐倉藩ゆかりの人々）。正倫は明治44年1月佐倉の本邸において逝去、遺骸は夫人の万里小路伴子、継室松平吉子墓碑と並んで佐倉市の堀田家菩提寺甚大寺に埋葬「従二位勲三等伯爵正倫之墓」と刻まれている。

正倫没後正恒に代わった、大正元年（明治45年）の「地積地図台帳」が公刊されている。これから堀田家を拾うと

住所	地目	等級	坪数	地価	所有者
深川区佐賀町	2-14	宅地	39坪	740円	佐倉市堀田正恒
"	2-17	"	79坪	1,507円	"
"	2-18	"	67坪	1,275円	"
"	2-19	"	173坪	2,859円	"
"	2-20	"	196坪	3,043円	"
"	2-23	"	100坪	1,604円	"
"	2-57	"	3,677坪	35,741円	"
本郷区向ヶ岡彌生町②-3	"	*68級	1,605坪	3,770円	"
"	②-5	"	1,547坪	3,634円	"

主要参考文献

国史大系／徳川実記（国史大系編修会議）
 東京市史稿（東京市、東京都）
 寛政重修諸家譜（続群書類完成会）
 大武鑑（橋本 博）
 江戸武家名鑑集成（石井良助）
 江戸復元図（東京都教育委員会）
 復元江戸情報地図（児玉幸多）
 江戸城下変遷絵図集（浅倉治彦）
 集約江戸絵図（古板江戸図集成刊行会）
 江戸切絵図集成（斉藤直成）
 五千分一東京図測量原図（日本地図センター）
 地籍地図台帳（東京府）
 地籍図（内山模型製図）
 はいまっぷ（セーコー社）
 ゼンリン住宅地図（ゼンリン）
 徳川将軍列伝（北島正元）
 藩史大事典（村上 直、木村 礎、藤野 保）
 国史大辞典（国史大辞典編集委員会）
 三百藩藩主人名事典（新人物往来社）
 幕末維新三百藩総覧（新人物往来社）
 江戸諸藩要覧（井上隆明）
 藩史辞典（秋田書店）
 物語藩史（児島幸多）
 内閣文庫蔵諸侯年表（児玉幸多）
 江戸幕藩大名家事典（小川恭一）
 幕末人物事件散歩（人文社）
 幕末維新ものしり事典（奈良本辰也）
 明治官制度辞典（朝倉治彦）
 探訪日本の城／江戸城天守考（西ヶ谷恭弘）
 福井城・金沢城（平井 聖）
 江戸東京地名事典（菊地秀夫）
 東京府志料（東京府）
 江戸から東京へ（矢田揮雲）
 江戸名所図会（市古夏生、鈴木健一）
 明治の東京（人文社）

風俗画報（東陽堂）
 千葉県史料／佐倉藩紀氏雑録続集（千葉県）
 佐倉市史（佐倉市史編さん室）
 佐倉の歴史を学ぶ資料集（佐倉市立中央公民館）
 佐倉細見（佐倉市教育委員会）
 近世の佐倉（佐倉市）
 佐倉市誌資料（佐倉市公民館）
 古今佐倉真佐子（佐倉市史編さん委員会）
 学海日録（学海日録研究会）
 東金御成街道（本保弘文）
 お成り街道を歩く（千葉の歴史を知る会）
 佐倉歴史散歩（外山信司）
 暦年十さい（青柳嘉忠）
 佐倉惣五郎（児玉幸多）
 堀田家三代記（堀田正久）
 佐倉史談（能田葦城）
 堀田正睦と幕末の政局（佐倉城研究会）
 佐倉市郷土の先覚者堀田正倫（佐倉市教育委員会）
 明治に生きた佐倉藩ゆかりの人々（内田儀久）
 古河市史（古河市史編さん委員会）
 土井利勝（古河市、市史編さん委員会）
 歴史読本／藩祖土井利勝について（早川和見）
 旧芝離宮庭園（旧芝離宮庭園調査団）
 旧芝離宮庭園（小杉雄三）
 井伊直弼（楠本正雄）
 赤穂義士事典（佐々木杜太郎）
 徳川将軍家大名の墓（河原芳嗣）
 江戸図屏風（内藤 昌）
 大名庭園（白幡洋三郎）
 大名庭園（サライ編集部）
 聖心女子学院創立50年史（聖心女子大学）
 皇室の百科事典（歴史百科編集部）
 良子皇太后（河原敏明）
 江戸城ものがたり（山岸弘明）
 各種江戸図、東京区分図、武鑑

新刊佐倉城（佐倉市）

参考）佐倉藩の藩邸図が掲載されている資料

- ①大久保加賀守芝金杉上屋敷概略図（大久保藩下屋敷の後、堀田藩上屋敷の前＝旧芝離宮庭園）＊
 芝御用屋敷お庭略図（堀田藩上屋敷の後＝旧芝離宮庭園）＊
- ②酒井小浜藩江戸神田橋屋敷図（松平乗久上屋敷の後の後＝小浜市立図書館蔵、福井城／金沢城）
- ③堀田正俊大手前邸敷地図（千葉県史料／紀氏雑録）
- ④渋谷下屋敷／寛政9年日記方絵図ならび渋谷大目付絵図（千葉県史料／紀氏雑録続集）
- ⑤大久保小田原藩芝海上屋敷表門同形の真田表門（大久保藩下屋敷後、堀田藩上屋敷の前＝小川恭一蔵、江戸幕藩大名家事典）

＊原典記載なし。本図は読めない

試作第1版 平成10年9月1日作成

調査／まとめ
 山岸 弘明

本書は個人研究用にまとめたもので公刊の計画はありません
 本書のうちとくに藩邸関係の資料ご存じよりの方、ご教授いただければ幸いです
 引続き、本編関係の資料編を作成します
 新資料発見時は一部を修正、追加することがあります

DVDBY 塚原 茂

